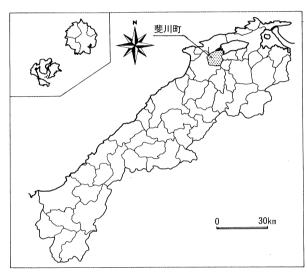


# 後谷V遺跡

1996年3月

丁教育委員会

# うしろ だに 5 後谷 V 遺跡



島根県斐川町の位置

1996年3月

斐川町教育委員会



1 区建物遺構全景



3 区建物遺構全景

斐川町南部の丘陵地には、200を越える多くの遺跡・古墳が存在しています。 そのうち、奈良~平安・鎌倉時代の遺跡・遺物散布地は48%で、ほとんど全域に分布しています。後谷V遺跡もこうした遺跡の密集地にあります。

本遺跡発見のきっかけは、平成3年に県道拡幅工事に伴う事前調査で大量の炭化米とともに大きな礎石が検出されたことにあります。翌4年度以降、文化庁および島根県教育委員会から補助金を得て本格的な範囲確認のための調査を行ってきました。4次にわたる調査の結果、奈良~平安時代に営まれた正倉跡であることが確認されました。しかも同一場所で掘立柱から礎石へ高床倉庫が変遷したことが明らかとなり、長期間にわたって正倉が管理されていたことがわかってきました。733年に制定された『出雲国風土記』の記載によれば、本遺跡の所在する地域は出雲郡出雲郷に属し、出雲郡家はこの出雲郷内に置かれていたことが知られています。本遺跡の正倉跡はまさに出雲郡家の一施設ではないかとして注目されました。

正倉跡の調査は、今年度で一定の区切りといたします。今後は予想される郡庁の所在地や郡家諸施設の実態を調査することによって、律令社会における郡家の具体的姿を解明することができればと考えています。

本書が風土記研究の一助になりますとともに、教育のために活用されることで、広く埋蔵文化財に対する関心と理解が高まりますことを期待するものであります。

最後に、調査・保存にあたりご協力いただいた土地所有者・奈良国立文化 財研究所・島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター・島根県出雲 土木建築事務所並びにご指導いただいた調査指導の先生方に厚く御礼申し上 げる次第であります。

1 9 9 6 年 3 月

斐川町教育委員会教育長 杉 谷 光 昭

# 例言

- 1. 本書は、斐川町教育委員会が平成4年度(第1次)から平成7年度(第4次)にかけて国庫補助 事業として実施した後谷V遺跡発掘調査報告書である。
- 2. 調査年度と調査次、調査区、地番、地目は、以下のとおりである。

平成4年度 第1次 1区~4区 斐川町大字出西2049番地1外 田

平成5年度 第2次 5区 斐川町大字出西2055番地 畑

平成6年度 第3次 6区•7区 斐川町大字出西2120番地外 田

平成7年度 第4次 8区 斐川町大字出西2023番地 田

3. 調査組織は、次のとおりである。

#### 【調査指導】

山本 清 (島根大学名誉教授、平成4~平成7年度)

田中義昭 (島根大学法文学部教授、平成4~平成7年度)

山中敏史 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長、

平成4~平成7年度)

勝部 昭 (島根県埋蔵文化財調査センター長、平成4~平成6年度)

池田敏雄 (斐川町文化財保護審議会委員、平成4~平成7年度)

角田徳幸 (島根県教育委員会文化課主事、平成4年度)

足立克己 (島根県教育委員会文化課文化財保護主事、平成5年度)

広江耕史 (島根県教育委員会文化課主事、平成6年度、

文化財課文化財保護主事、平成7年度)

#### 【事務局】

富岡俊夫 (斐川町教育委員会文化課長、平成4~平成7年度)

山根信夫 (斐川町教育委員会文化課係長、平成4、5年度)

錦織 勉 (斐川町教育委員会文化課係長、平成6、7年度)

昌子裕江 (斐川町教育委員会文化課主任、平成7年度)

#### 【調查員】

金築 基 (斐川町教育委員会文化課主事、平成4年度)

四方田(北脇)三己 (斐川町教育委員会文化課主事、平成4年度)

宍道年弘 (斐川町教育委員会文化課主事、平成5~平成7年度)

陰山真樹 (斐川町教育委員会文化課主事、平成6年度)

#### 【事務補助・遺物整理・報告書作製】

栂由喜子、内田久美子、青木由美、大田晴美(以上、斐川町教育委員会文化課臨時職員)

4. 本書を作製するにあたり、下記の方々より玉稿を賜った。

関 和彦(共立女子第二中・高等学校)、池田敏雄、和佐野喜久生(佐賀大学農学部)、柴田セ っ子・川野瑛子(以上、大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター)、浜崎 晃 (株式会社日本海技術コンサルタンツ)、平石 充 (島根県埋蔵文化財調査センター)

5. 自然科学、物理学、地質学的な調査・分析は、次の方々にお世話になった。

炭化米分析:和佐野喜久生、<sup>14</sup>C年代測定:柴田せつ子・川野瑛子、樹種鑑定:光谷拓実(奈 良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)、電気探査:浜崎 晃、地質分析:中村唯史(島根 大学地質学教室)

- 6. 本書の執筆・編集は金築の助言を得て、宍道が行った。遺物の実測・採拓は青木、トレースは大 田、浄書は内田が補助し、宍道がこれを行った。遺物の写真撮影は桧山清記氏(フォトショップヒ ヤマ)の協力を頂いた。
- 7. 本書に掲載した第7図「後谷V遺跡と周辺の遺跡」は平成3年修正の建設省国土地理院発行の1 :50,000「今市」、第8図「後谷V遺跡周辺の主要遺跡」は平成元年撮影・測図の島根県斐川町発 行の1:5,000「斐川町基本図5」をそれぞれ使用した。
- 8. 本調査によって得られた資料(出土遺物、実測図、写真)は、斐川町教育委員会で保管している。
- 9. 本書で 表記した遺構は、下記の略号を使用している。

S A ······柵列

SD……溝状遺構 S……礎石

SB……掘立柱建物 • 礎石建物

SK……土坑

P……ピット (柱穴)

- 10. 地形図、遺構図に表記した方位は、すべて国土座標に従ったものである。従って、北の方位は座 標北である。
- 11. 第1次から第3次までは『出雲国出雲郡家正倉跡(後谷V遺跡発掘調査概報)』、『出雲国出雲郡 家正倉跡Ⅱ(後谷Ⅴ遺跡第2次発掘調査概報)』、『出雲国出雲郡家正倉跡Ⅲ(後谷Ⅴ遺跡第3次発 掘調査概報)』で既に概要を報告しているが、内容・記述についてはすべて本報告で統一した。
- 12. 第1次から第4次の調査にあたり、下記の方々に協力して頂いた。(順不同・敬称略)

#### 【指導・助言】

池田満雄、伊藤瑞章、井上寛司、上原真人、内田律雄、大賀靖浩、恩田 清、亀田修一、川上 稔、瀧音能之、昌子寬光、巽淳一郎、常松幹夫、徳岡隆夫、西尾克己、西村 康、野坂俊之、 林 健亮、原 俊二、原田昌幸、原 裕司、平川 南、平野邦雄、松下正司、松村恵司、松本 堅吾、松山智弘、三宅博士、水野正好、三原一将、森 公章、柳浦俊一

#### 【地元協力】

西 富市、多々納彰一、西 一雄、青木 明、青木秀子

#### 【発掘作業】

#### • 地元

青木知子、青山 保、小豆沢敏子、小豆沢正人、飯塚弘子、池田 良、遠藤繁義、岡 喜義、 岡トシ子、陰山慶子、陰山トミエ、陰山百合子、陰山律雄、梶谷松代、川内幸子、黒田幸一、 黒田友喜、佐藤倭和子、島田邦久、嶋田澄江、島田富美子、昌子健二郎、昌子滝市、高木長一、 高橋重雄、多々納恵子、栂 真一、栂 富子、長谷川恒太郎、浜下奈津子、樋野喜久、日野吉 正、村上花子、持田繁義、元井清二、矢野政子、山根作夫

#### 学生

田島夕美子、中本八穂(以上、奈良大学院生)、高雄由起子(奈良大学学生)、富田修(青山 学院大学学生)、飯塚賢治(駒沢大学学生)、島田幹也(岡山商科大学学生)

# 目 次

序

例 言

目 次

挿図目次·表目次·図版目次

I 調査に至る経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
(1) 第 1 次調査(平成 4 年度)	2
(2) 第 2 次調査(平成 5 年度)	5
(3) 第 3 次調査(平成 6 年度)	5
(4) 第 4 次調査(平成 7 年度)	5
Ⅱ 位置と環境	6
1.遺跡の位置と周辺の歴史的環境	6
2. 周辺の神話・地名伝承	10
(1) 神話による地名伝承	10
(2) 遺跡と関わりのありそうな地名伝承	11
(3) むすび	12
Ⅲ 調査の概要	13
1. 1 区 の 調 査	13
(1) 検 出 遺 構	13
(2) 出 土 遺 物	21
2. 2 区 の 調 査	30
(1) 検 出 遺 構	30
(2) 出 土 遺 物	32
3. 3 区 の 調 査	32
(1) 検 出 遺 構	32
(2) 出 土 遺 物	38
4. 4 区 の 調 査	38
(1) 出 土 遺 物	38
5. 5 区 の 調 査	39
9 1 0 part 1979	

(1) 検 出 遺 構	···· 39
(2) 出 土 遺 物	····· 41
6. 6 区 の 調 査	···· 42
(1) 検 出 遺 構	····· 43
(2) 出 土 遺 物	44
7. 7 区 の 調 査	····· 46
(1) 検 出 遺 構	···· 47
(2) 出 土 遺 物	48
8.8 区の調査	···· 54
(1) 検 出 遺 構	54
(2) 出 土 遺 物	57
IV 自然科学 • 物理学的調查	68
1. 後谷V遺跡の炭化米特性と稲作起源(和佐野喜久生	
(1) 材料及び方法	
(2) 結果及び考察	69
① 北部九州及び韓国の古代稲の粒特性と分類法	69
② 後谷V遺跡の古代稲の粒特性	···· 70
(3) 要 約	···· 72
2. 出土炭化米の ┗C年代測定結果について(柴田せつ子・川野瑛子	<del>-</del> ) 78
(1) 測定試料	···· 78
(2) 測定原理及び測定方法	···· 78
(3) 試料調整	···· 78
(4) 年代測定結果	···· 78
(5) 歴年代(較正年代)	···· 78
$3$ .後谷 ${f V}$ 遺跡発掘調査にかかる電気探査(浜崎 $$ 気	
(1) はじめに	80
(2) 高密度電気探査	80
(3) 調査結果と解釈	
(4) まとめ	84
V 出雲国風土記の正倉·······(関 和彦	
1. はじめに	
2.『出雲国風土記』の正倉記事	85
3.『陸奥国風土記』逸文の正倉	88

5. 交	・通路と正倉 ―― 個別的検討 ――	90
6. 意	\$字郡・神門郡の正倉 ······	91
7. お	sわりに	93
VI i	ミとめ	95
1. 遣	動の検討	95
(1)	遺構に伴う遺物	95
(2)	遺構に伴わない遺物	95
(3)	墨書土器について ······(平石 充)	97
2. 遺	遺構の検討	99
3. 後	後谷 $ m V$ 遺跡の性格と今後の課題 $ m$	01
	挿 図 目 次	
巻頭挿図	③ 島根県斐川町の位置	
第1図	グリッド調査区配置図	2
第2図	グリッド調査風景	2
第3図	調査区全体配置図	3
第4図	建物遺構配置図	4
第5図	発掘調査風景	5
第6図	稲城遺跡出土軒丸瓦	7
第7図	後谷V遺跡と周辺の遺跡	8
第8図	後谷V遺跡周辺の主要遺跡	8
第9図	後谷V遺跡周辺の伝承地名図	11
第10図	1 区遺構平面図	16
第11図	SB01実測図(1:80)	17
第12図	SB03実測図(1:80)	
第13図	SB02、SB04実測図(1:80) 19~	20
第14図	1区SB04-P <sub>5</sub> 出土遺物実測図(1:3)	21
第15図	1 区出土遺物実測図(1:3)①	
第16図	1 区出土遺物実測図(1:3)②	

4. 正倉記事の検討 — 「即ち」考 — …………………………… 89

第17図	1 区出土遺物実測凶(1 : 3 ) ③	27
第18図	1 区出土遺物実測図(1:3)④	28
第19図	1 区出土遺物実測図(1:3)⑤	29
第20図	2 区遺構実測図(1:40)	30
第21図	2 区出土遺物実測図(1:3)①	31
第22図	2 区出土遺物実測図(1:3)②	31
第23図	3 区遺構平面図	34
第24図	3 区 S B 0 5 実測図 (1:80) ······ 35~	36
第25図	3 区出土遺物実測図(1:3)	37
第26図	4 区出土遺物実測図(1 : 3)	39
第27図	5 区遺構平面図(1:100)	40
第28図	SB06実測図(1:80)	41
第29図	柱穴(A)実測図(1:40)	42
第30図	5 区出土遺物実測図(1:3)	42
第31図	6 区平面図(1:200)	43
第32図	6 区南壁土層図	43
第33図	6 区杭列実測図(1:40)	44
第34図	6 区出土遺物実測図(1:3)①	45
第35図	6 区出土遺物実測図(1:3)②	46
第36図	SD05(1)、SK01(2)、SK03(3)出土遺物実測図(1:3)	48
第37図	7 区遺構平面図(1:100)	50
第38図	SD05実測図(1:40)	51
第39図	SA01実測図(1:40)	51
第40図	SK01実測図(1:40)	52
第41図	SK02実測図(1:40)	52
第42図	SK03実測図(1:40)	52
第43図	7 区出土遺物実測図(1:3)①	53
第44図	7 区出土遺物実測図(1:3)②	54
第45図	8 区遺構平面図(1:100)	55
第46図	SD06実測図(1:40)	56
第47図	SD07 • SD08 実測図 (1:40) ·······	56
第48図	8 区出土遺物実測図(1 : 3 ) ①	57
第49図	8 区出土遺物実測図(1 : 3)②	57
第50図-	- 1 遺構 V - 1 、 2 、 5 の炭化米粒写真	76
第50図-	- 2 遺構V-7、10の炭化米粒写真	77

第51図	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	79
第52図		79
第53図	測定結果の表示	81
第54図	調査地平面図	81
第55区	A-1比抵抗図 ······	82
第56区	B-1比抵抗図 ·····	82
第57区	] C-3比抵抗図	83
第58図	] D-1比抵抗図 ·····	83
第59区	] 墨書土器	97
第60区		
第61図	Ⅱ 期建物群の配置	102
	表 目 次	
表 1	周辺の遺跡一覧表	9
表 2	礎石計測表(1)	
表 3	礎石計測表(2)	
表 4	柱穴計測表	
表 5	出土遺物観察表(1)	
表 6	出土遺物観察表(2)	
表 7	出土遺物観察表(3)	
表 8	出土遺物観察表(4)	
表 9	出土遺物観察表(5)	
表10	出土遺物観察表(6)	
表11	出土遺物観察表(7)	
表12	石器一覧表	
表13	稲粒 (米、籾) 特性の指数、指数別階級値及び特性の表現法 (和佐野、1995)	
表14	稲粒 (米、籾) の粒長・粒幅指数による粒型分類 (和佐野、1995)	
表15	北部九州及び韓国の比較・対照遺跡の炭化米粒特性(和佐野、1995)	
表16	北部九州及び韓国の比較・対照遺跡の炭化米粒の粒型分布表(和佐野、1995)	
表17	後谷V遺跡の炭化米粒特性表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
表18	後谷V遺跡の炭化米の粒型分布表	
表20	「倉」関係墨書土器の出土遺跡	98

表21	建物遺構の時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	100
表22	建物遺構計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	101
	図 版 目 次	
巻頭図	]版 1 区建物遺構全景、3 区建物遺構全景	
図版 1	後谷V遺跡周辺航空写真(1995年撮影)	
図版 2	1区·2区全景、1区SB01	
図版 3	1 🗵 S B 0 2 、 1 🗵 S B 0 3	
図版 4	$1\boxtimes S B 0 2 - S_{19}$ , $1\boxtimes S B 0 3 - P_6$ , $1\boxtimes S B 0 4 - P_3$	
図版 5	3区SB05 (北東から)、3区SB05 (東から)、3区SB05 (北から)	
図版 6	3区SB05-S4、3区SB05石列、3区SB05とSD04 (南から)	
図版 7	5区全景	
図版 8	4 区全景(東から)、5 区SB06(南から)、5 区SB06(東から)、5 区柱穴(A)	
図版 9	6 区杭列検出状況、6 区杭列(東から)、6 区弥生土器出土状況	
図版10	) 7区全景、8区全景	
図版11	l 7区礎石(A)、7区礎石(B)、7区SD05(東から)	
図版12	2 7区SA01検出状況(東から)、7区SK01(南東から)、7区SK03(東から)	
図版13	3 7区打製石斧出土状況、8区SD06(西から)、8区SD07(西から)	
図版14	4 1区SB04-P <sub>5</sub> 出土須恵器、1区出土墨書土器	
図版15	5 1区出土縄文土器、1区出土須恵器	
図版16	3 1区出土土師質土器	
図版17	7 1区出土土師質土器	
図版18	3 1区出土土師質土器	
図版19	9 1区出土白磁・青磁、1区出土石器	
図版20	) 1区出土縄文土器・須恵器・土師質土器、2区出土石器	
図版21	3 区出土弥生土器・須恵器・土師質土器	
図版22	2 4区出土縄文土器・弥生土器、5区出土弥生土器・須恵器・土師質土器	
図版23	3 6 区出土弥生土器	
図版24	4 6区出土弥生土器·須恵器、7区SD05出土土師器、7区SK01出土須恵器、7区S	8 K
	0 3 出土須恵器	
図版25	5 7区出土縄文土器・土師器・須恵器・土師質土器	
図版26	3 7区出土石器、8区出土縄文土器·土師質土器、8区出土石器	

# Ⅰ 調査に至る経緯と経過

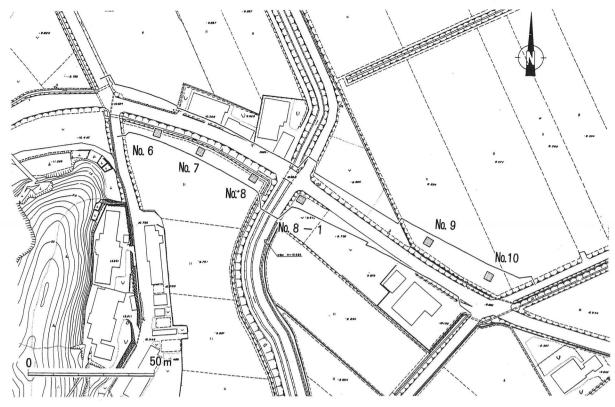
#### 1. 調査に至る経緯

平成2年度、島根県出雲土木建築事務所は斐川町大字出西地内において一般県道木次直江停車場線緊急道路整備事業を計画していた。事業の施行面積は9,200㎡(総延長920m×平均拡幅10m)にもおよび、この範囲内に既に小野遺跡(斐川町遺跡地図191号)、後谷 I 遺跡(同96号)、後谷 II 遺跡(同97号)が知られていた。 斐川町教育委員会は計画地内にほかにも遺跡が存在する可能性があるとして県出雲土木建築事務所と協議の上、平成2・3年度に現地踏査を行うとともに、36ケ所のグリッドを設定して遺跡の確認調査を実施することとした(第1図)。

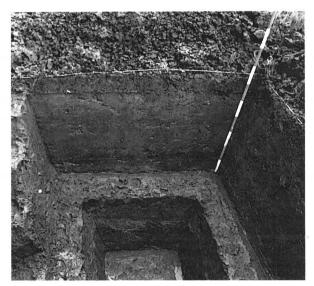
踏査の結果、上記の遺跡以外に後谷Ⅴ遺跡、稲城遺跡、氷室Ⅲ遺跡を発見し、結局、事業計画地 内には6つの遺跡が全域にわたって存在していることがわかった。また、グリッド調査によって後 谷V遺跡、小野遺跡、稲城遺跡からは土器類が多量に発見され重要な遺跡であることを予感させた。 後谷 V 遺跡のグリッド調査は平成3年度に実施した。調査グリッドはNo.6、No.7、No.8、No.8 -1、No.9、No.10グリッドの6ケ所で、 $3 \times 3$  mのグリッドを設定して調査を行った。そのうちNo.7からは水田下2.1mより多数の土師質土器とともに径1m大の礎石が数点、Na.8 からは水田下1.9m より多数の須恵器や土師質土器、No.8-1からは水田下2.3mより縄文土器、No.10からは水田下1 mより礎石列と炭化米が出土した。とくにNo.7とNo.10から出土した礎石の時期は出土土器から奈良 ~平安時代とみられ、官衙または寺院に関する遺構の一部の可能性が考えられた。この調査の結果、 後谷V遺跡にかかる事業計画地内はすべて遺跡が存在することがわかったため、平成4年度におい て町教育委員会と県出雲土木建築事務所とは事前に発掘調査を行うことについての協議がもたれた。 そして、町教育委員会は 4 年度に後谷 V 遺跡 1 ~ 4 区の第 1 次調査を実施することとなった。この 結果、1区においては礎石建物1棟、掘立柱建物2棟を新たに検出することができた。いずれも総 柱の構造であることや大量に炭化米を伴うことから、穀物を収納した倉庫が焼失した建物であろう と考えられた。3区においても大量の炭化米とともに中小の石列を配した珍しい基礎構造をもつ大 型の礎石建物が検出された。このように、1・3区でみられた倉庫群は、建物の配置、規模、年代、 『出雲国風土記』の記述からみて出雲郡家の諸施設のうちの正倉跡である可能性が高くなってきた。 一方、町教育委員会は文化庁、島根県教育委員会と協議して道路部分だけでは遺跡の全容がわか

一方、町教育委員会は文化庁、島根県教育委員会と協議して道路部分だけでは遺跡の全容がわからないとして、周辺の民有地を含めた本格的な範囲確認調査を補助事業として実施することにした。平成5年6月1日に町教育委員会は、「一般県道木次直江停車場線緊急地方道路整備事業に伴う遺跡の取り扱い」について県教育委員会と協議を行い、同年6月18日付けで町、町教育委員会、県教育委員会の3者で覚書がかわされた。即ち、①「出雲郡家」にかかわる遺跡が存在する可能性があり全容が解明された時点において、②町は遺跡を保存整備するとともに保存すべき域内の路線の付け替えについて責任をもつ、という覚書の内容であった。これによって、平成5年度以降も補助事業として後谷V遺跡の全容解明のために継続かつ計画的な調査がなされることとなった。

これらの協議に基づいて、平成5年度(第2次)は5区、6年度(第3次)は6区と7区、7年度(第4次)は8区の調査を実施した(第3図)。



第1図 グリッド調査区配置図



No. 7 完掘状況



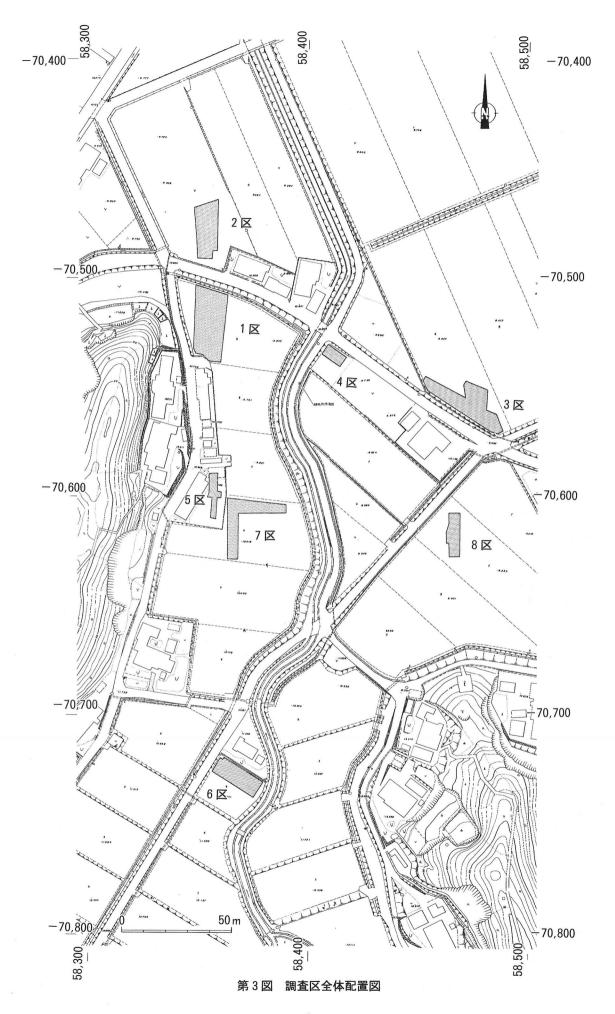
No.10 完掘状況

第2図 グリッド調査風景

#### 2. 調査の経過

#### (1) 第1次調査(平成4年度)

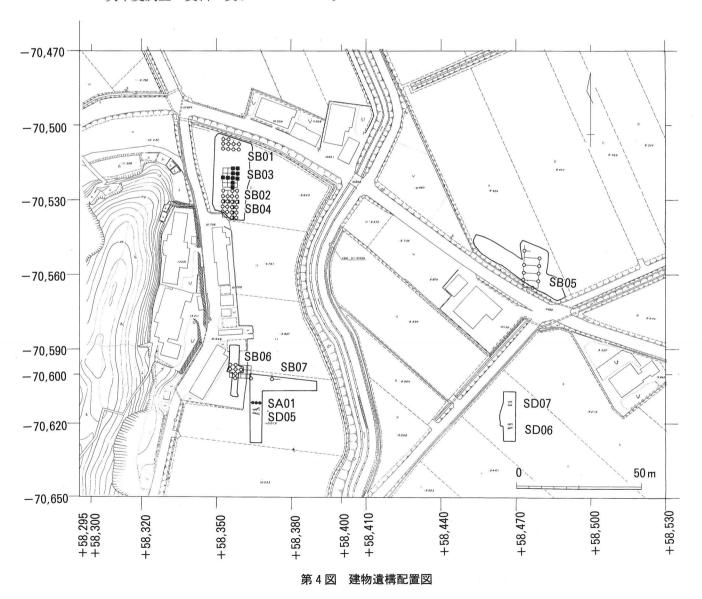
平成4年度に第1次調査として1区420㎡、2区240㎡、3区550㎡、4区50㎡の調査を平成4年7月から平成5年3月にかけて行った。1区は平成3年度に道路敷地部分の調査が終了した後、4年度に民有地を含めて調査を行った。道路部分では礎石建物(SB01)が1棟検出され、これが北側(旧道路下)へ延びるものと考えられた。4年度の調査では、新たに設定した調査区南



寄りで礎石建物1棟(SB02)を確認することができた。さらに、SB02の東側から2列目の礎石列に沿って南北方向にサブトレンチをあけ下層の堆積状況を調べたところ、SB02の北側で掘立柱建物(SB03)とSB02の真下で掘立柱建物(SB04)を検出することができた。SB04は土層断面での確認にとどめた。また、SB01の南側とSB02の西側で溝状遺構が検出され、大量の炭化米が出土した。

3区も道路敷地部分の調査で確認された中小の石を多数伴った礎石建物が検出された。建物が 北側へつづく可能性があったため、北側の民有地へ調査区を拡張して行った。結局、総柱ではな いものの特異な基礎構造をもつ礎石建物(SB05)であることがわかった。建物の西側では溝 状遺構が検出された。ここでも大量の炭化米が確認されたが、出土した土器の数は少量であった。

なお、2 区および 4 区は、奈良~平安時代の明確な遺構は検出できず、出土遺物も少なかった。第 1 次調査では 1 ~ 4 区周辺の地形測量を 1 :500 の縮尺で行うとともに、1 区と 3 区ではラジコンへりによる遺構の空中写真撮影を行った。また、1 区と 3 区の南北ラインで電気探査を行い次年度調査の資料に資することとした。



#### (2) 第2次調査(平成5年度)

平成5年度は第2次調査として5区60㎡の調査を平成5年12月から平成6年3月にかけて行った。ここに調査区を設定した目的は、1区で確認された礎石建物群が南側へどこまで続くのかを確認するために行った。設定にあたっては電気探査のデータをもとに1区の南48mの地点に調査区を設けた。調査の結果、 $4 \times 3$ 間の東西棟の総柱礎石建物(SB06)1棟を検出することができた。炭化米は多く検出されたが、遺物は少量であった。

第2次調査では5区周辺の地形測量、遺構の空中写真撮影、5区より東側の電気探査を行った。

#### (3) 第3次調査(平成6年度)

平成6年度は第3次調査として6区175㎡、7区290㎡の調査を平成6年7月から平成7年3月にかけて行った。6区は後谷公民館の南側(谷奥側)に防火用水槽が設置されることになり、事前に調査を行ったものである。5区でみられた建物群から南へ200mの距離にあたり、関連を調べる目的で行った。結果、奈良~平安時代の遺構・遺物はほとんど検出できなかったが、杭列遺構や多数の弥生土器を検出することができた。

7区は5区のすぐ東隣の水田部にL字状の調査区を設定した。5区で得られた成果を基に東西と南北方向に電気探査を行ったところ、東西ライン(基点より東へ4~15m)で高い抵抗値を示すデータが得られた。これを基に5区の東側水田部に東西26m、南北4~7mのトレンチを設定し、新たな遺構の確認に努めた。また、1区で確認された建物群の南限を確認する目的で東西トレンチの西端から南側へ南北28m、東西5mのトレンチを設定した。結果、SB06の南東隅の礎石と新たにSB07の礎石、溝状遺構、柵列等を検出することができた。

このほか第3次調査では6区と7区周辺の地形測量、7区の遺構の空中写真撮影を行った。

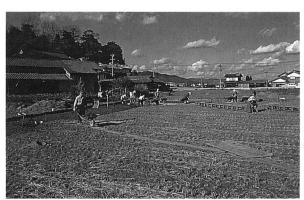
#### (4) 第 4 次調査 (平成 7 年度)

平成7年度に第4次調査として8区100㎡の調査を平成7年10月から平成8年1月にかけて行った。ここは、7区の調査で東西に走る溝状遺構が検出されたのをうけ、この溝が東側でどのように検出できるのか、即ち建物群の南東部を画する施設なのかどうかを確認する目的で行った。結果的に溝状遺構2条を検出することができた。

第4次調査では8区の遺構の空中写真撮影を行った。



第1次調査(3区)作業風景



第3次調査(7区)作業風景

第5図 発掘調査風景

# Ⅱ位置と環境

#### 1. 遺跡の位置と周辺の歴史的環境

後谷V遺跡の所在する島根県簸川郡斐川町は宍道湖の西岸に位置し、中国山地に源を発する斐伊川の下流域に形成された沖積平野(簸川平野)と標高300級の仏経山や大黒山を中心とする山々から成り立っている。

後谷V遺跡は斐川町の南西部に位置する仏経山頂(標高366m)から西へ2.4km、斐伊川の右岸から1.5kmの低丘陵に挟まれた「後谷」の出口あたりに立地している。斐伊川は近世以降、大量の土砂を平野にもたらすが、遺跡のあるあたりは古代においてはその影響をあまり受けていなかったところのようである。

斐川町内で遺跡の密集地といえばやはり南部の丘陵地と谷あいである。これまでに縄文時代から中世までの貴重な遺跡が200カ所以上知られている。とくに、昭和59年・60年に銅剣358本、銅矛16本、銅鐸6個が発見され全国的に有名になった荒神谷遺跡(国指定史跡)は、弥生時代の山陰のイメージを大きく変えた。以下に後谷V遺跡周辺の代表的な遺跡の概要をのべることにする。

#### 斐伊川鉄橋遺跡

昭和37年、国鉄山陰本線の斐伊川鉄橋かけかえ工事中に多数の弥生式土器が発見された。これらの土器は10ヶ所の新橋脚のうち東側堤防から1,2,3番目の脚柱穴と、西側から3番目の脚柱穴の深さ7m前後の粘土層から発見された。

出土した土器に完形品はないが、少量の弥生時代後期の壺や甕、器台と複合口緑を有する壺など 多くの古式土師器が発見された。

#### 長者原古墳群

後谷 V 遺跡の南東0.5km、標高70mの丘陵上に位置する。南北に長く延びる丘陵の中ほどに9基近くの円墳がある。中でも突端に近い1基は帆立貝状の前方後円墳を思わせる。いずれも径7~8mで、墳丘は高い。周辺に石片が散在しているが、明治末年に土地の老人が掘ったところ石室があり、刀やカワラケが出たという伝えがある。

周辺の丘陵上をみると、円墳3基からなる押屋古墳群や円墳1基、方墳3基からなる後谷丘陵古 墳群が存在するなど小規模古墳群が集中する地域である。

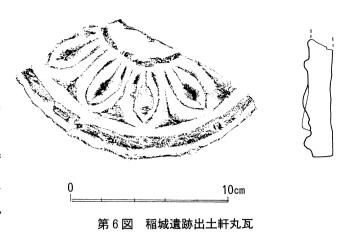
#### 出西小丸古墳群

後谷 V遺跡の南西1.3km、標高20mの丘陵の西側斜面に3基の円墳状古墳が所在する。1号墳(旧名・丸子古墳)は径10m、高さ2.5mの円墳で横穴式石室が西に開口する。玄室は長方形プランで玄室と羨道との境は1枚の切石で閉塞し、閉塞石には宍道湖周辺に6例がみられる閂状の陽刻が施されている。昭和27年の調査の際、羨道部に陥入した土中から須恵器の脚付子持壺の破片が2個体分出土して、現在は県立出雲高校に保管されている。

2号墳(旧名・栖雲寺山古墳)は、1号墳のすぐ上方にある円墳で、羨道部より前面は失われ、 西に開口する横穴式石室である。玄室は大型切石を使用し、ほぼ正方形プランに造られる。 3号墳は円墳と思われるが未掘である。 古墳時代後期における在地首長層の動向を 知る上で重要な古墳群といえる。

#### 稲城遺跡

県道(木次直江停車場線)の拡幅工事に 伴う事前調査によって平成4年度に発掘さ れた。後谷V遺跡の東側に隣接する遺跡で ある。遺構は明確ではないが、これまでに 多数の須恵器、土師器、土師質土器のほか に呪符木簡や軒丸瓦(第6図)も出土した。



呪符木簡は「(符纂) 如律令」という呪句が読みとれ、平安時代の庶民の切実な思いがうかがわれる。軒丸瓦は1点だけで、安来市教昊寺 I b 類軒丸瓦と同類瓦である。

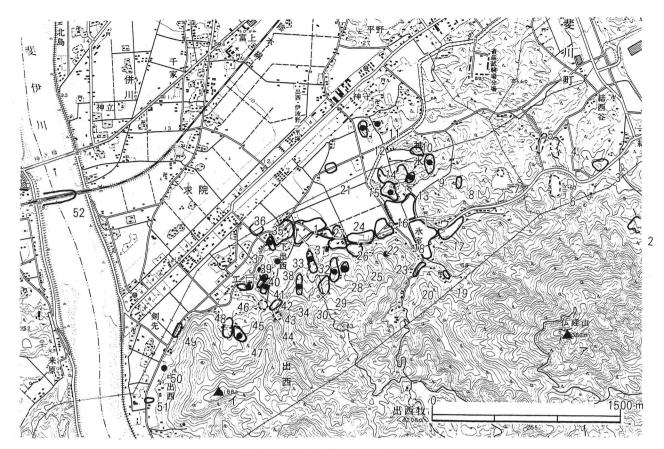
#### 小野遺跡

稲城遺跡同様、県道の拡幅工事に伴って平成5年度に発掘された。後谷V遺跡から東へ0.5㎞の位置になる。1~8区までの調査が行われ、1~4区では中世の掘立柱建物跡3~4棟、小ピット多数、溝状遺構2条、石列等が検出された。出土遺物には弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器、瓦類がある。なかでも瓦類は特徴的である。種類としては軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鴟尾がある。軒丸瓦は単弁と複弁の2種があり、単弁のものは安来市教昊寺Ib類軒丸瓦と同類瓦、複弁のものは簡素な水切りをもつもので、文様は出雲市神門寺境内廃寺の軒丸瓦と類似している。

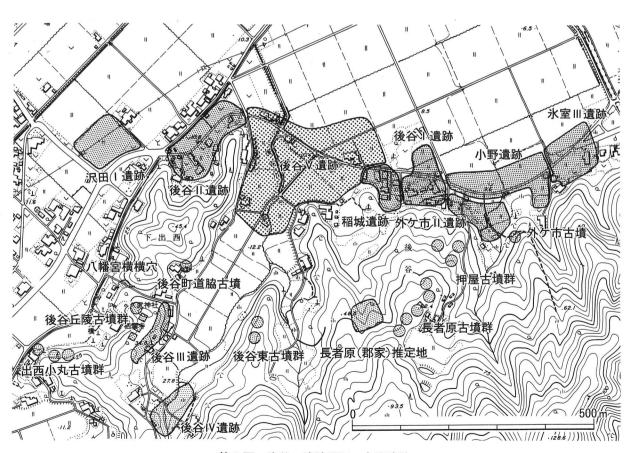
5~6区は奈良~平安時代の掘立柱建物跡 5 棟以上と溝状遺構 2 条が検出された。 2×2間の総柱、 3×2間以上の総柱、 3×2間、 2×2間以上の掘立柱建物跡が確認できる。出土遺物としては須恵器、土師器、土師質土器の他に、円面硯、土馬、丹塗土器、漆塗木器がある。円面硯は径14.3cmで透かし高台をもつ、土馬は体長9.8cmで頭、尾尻、四肢を欠き胴部に飾りをつけた痕跡が認められる。 7~8区では、溝状遺構 2 条、小ピット多数がある。須恵器、土師器、土師質土器の他に墨書土器、丹塗土器、漆塗土器が出土した。墨書土器は輪状つまみ付きの蓋でつまみ内面に「大」に似た文字がみえる。以上のように多くの遺構、遺物が出土した小野遺跡は、奈良~平安時代において何らかの公的な施設かあるいは在地有力者の住まいがあったのではないかと想像される。また、教昊寺系や神門寺境内廃寺系の瓦が出土したことは、当町の仏教文化の導入期を考える上で貴重な資料を残すこととなった。

#### 参考文献

- 斐川町教育委員会『斐川町史』1972年
- 斐川町教育委員会『遺跡分布調査報告書』1992年
- 斐川町教育委員会『出雲国出雲郡家正倉跡』1993年



第7図 後谷 V遺跡と周辺の遺跡



第8図 後谷 V 遺跡周辺の主要遺跡

#### 表 1 周辺の遺跡一覧表

2	番号	遺跡名	所 在 地	種 別	台帳 番号	概     要
2	1	後谷V遺跡	斐川町出西	官衙跡	197	礎石建物跡、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、縄文・弥生 土器、須恵器、土師質土器、白磁、墨書土器、他
3 結 本	2	祇	斐川町直江	散布地	187	
4						
5						
6 直正石馬 1 遠跡 要川町	5				60	
8 有 間 谷 Ⅱ 滷 跡 突川 町神 水 生 落 跡 167	6		斐川町直江	住 居 跡	61	
9 神 水 古 培 群 菱川町神水	7				166	
10   神 宇 古 遠 跡   変 川 町 神 水   古 境 郡   174   1.1版   174   1.1版   174   1.1版   174   1.1版   174   1.1版   174   1.1版   175   1.1版   1.1 K   1.	8				167	
11   神 宇 姑 群 要川町神水 古 墳 群   81   円増之基   12   神 宇 娥 蘇 愛川町神水 齿 墳 群   87   万境4基以上   13   城 山 東 古 墳 群 要川町神水 協						5 基・1、5 号(円墳)、2 ~ 4 号(方墳)
12   神 守 城 跡 愛川町神水 城 跡   174   山城   山城   山城   跡   攻 山 成 跡 愛川町神水 城 跡   159   山城   154   山城   155   山城   155   山城   155   山城   157   15   15   15   15   15   15   1						
13						
14						
15						
16	14	城 山 城 跡	斐川 町 神 氷	城 跡	159	
17	15					他は墳形不明、 2 号(剣片、砥石、他)
18						
19						
20					-	
21   神 宇 I 遺 跡 斐川町神水 散 布 地   85						
22						
23						
24						土師器、須恵器
25 外 ケ 市 古 墳 斐川町神水 故 布 地 88 土師質土器、旧面硯、土馬、夏類、他 26 外 ケ 市 百 墳 斐川町神水 散 布 地 88 土師蜜 須恵器 (27 後 谷 I 遺 跡 斐川町出西 集 落 跡 96 須恵器 (28 押 屋 古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 192 円墳3 基 29 長 名 原 古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 191 9 基 《见武汉 14 基、他は円墳 30 郡家(長者原)推定地 斐川町出西 古 墳 群 192 円墳3 基 29 長 名 原 古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 91 9 基 《见武状 1基、他は円墳 30 郡家(長者原)推定地 斐川町出西 官 衙 跡 196 須恵器、土師質土器、砥石、他 31 稲 城 遺 跡 斐川町出西 古 墳 群 49 円墳2 基 33 稲 城丘陵古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 49 円墳2 基 35 後 谷 古 墳	23	新 在 古 墳	斐川 町神 氷	古 墳	90	
26						器、土師質土器、円面硯、土馬、瓦類、他
27   後 谷 I 遠 跡   斐 川 町 出 西   集 落 跡   96   須恵器   須恵器   押屋 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳 群   192   円墳 3 基   929   長 者 原 古 墳 華   斐 川 町 出 西   百 墳 群   91   94 · 帆立貝状1 基. 他は円墳   30   郡家 (長者原) 推定地   斐 川 町 出 西   百 街 跡   196   須恵器、土師質土器、砥石、他   31   稲 城 遺 跡   斐 川 町 出 西   集 落 跡   198   須恵器、土師質土器、呪符木簡、瓦、他   32   後 谷 古 墳   斐 川 町 出 西   古 墳   44   円墳   33   稲城丘陵 古墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳   群   49   円墳 2 基   35   後 谷 耳 遺 跡   斐 川 町 出 西   散 布 地   97   須恵器、磁器   36   沢田   損 次 群   斐 川 町 出 西   散 布 地   103   土師質土器、高磁器   36   沢田   損 次 群   斐 川 町 出 西   古 墳   107   横穴式石室   39   八幡   宮 楠 横 穴   世 西   古 墳   193   円墳 1、方墳 3   3   八幡   宮 楠 横 穴   野 川 町 出 西   横 穴						
28						
29   長者原  古墳群   斐川町出西  古墳群   91   9基・帆立貝状1基、他は円墳   30   郡家(長者原)推定地   斐川町出西  集落   51   58   30   30   38   30   38   30   38   30   38   30   38   30   38   30   38   30   38   30   38   30   38   38						
30						
31   稲   城   遺   跡   斐       町   出   西   生   茶   跡   44   円墳   日   日   日   日   日   日   日   日   日						
32   後 谷 古 墳   斐     町 出 西 古 墳   44   円墳   158   158   34   後 谷 東 古 墳 群   斐     町 出 西 古 墳 群   49   円墳 2 基   35   後 谷 I 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   97   須恵器 磁器   36   沢 田 I 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   103   土師質土器、青磁   37   沢 田 横 穴 群   斐     町 出 西 古 墳   107   横穴式石室   38   後 谷 町 道 脇 古 墳   斐     町 出 西 古 墳   107   横穴式石室   39   八幡 宮 横 横 穴 斐     町 出 西 古 墳   193   円墳 1、万墳 3   34   6 谷 丘 陵 古 墳 群   斐     町 出 西 古 墳   193   円墳 1、万墳 3   141   後 谷 櫃 茂 群   斐     町 出 西 古 墳   193   円墳 1、万墳 3   141   後 谷 櫃 茂 群   斐     町 出 西 古 墳   193   円墳 1、万墳 3   141   後 谷 匝 陵 古 墳 群   斐     町 出 西 散 布 地   98   須恵器   43   後 谷 IV 遺 跡   斐     町 出 西 古 墳   45   円墳   45   日墳   45   日墳   45   日墳   45   日墳   45   日墳   46   日西 小 丸 古 墳 群   斐     町 出 西 古 墳   45   日墳   46   日西 小 丸 古 墳 群   斐     町 出 西 古 墳   45   日墳   46   日西 小 丸 古 墳 群   5   5   5   6   23 穴以上   48   山 / 奥 I 遺 跡   斐     町 出 西 古 墳   7   5   5   6   23 穴以上   48   山 / 奥 I 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   102   土師器、須恵器   49   中 出 西 I 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   102   土師器、集   16   23 穴以上   5   中 出 西 II 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   101   土師器、土師質土器   50   到 先 横 穴 群   斐     町 出 西 散 布 地   101   土師器、土師質土器   5   5   中 出 西 II 遺 跡   5     町 出 西 散 布 地   101   土師 器、土部 資土器、陶磁器   7   4   4   4   4   4   4   4   4   4						
33   稲城丘陵古墳群   斐川町出西   古墳群   49   円墳2基   34   後谷東古墳群   斐川町出西   故布地   97   須恵器、磁器   36   沢田   遺跡   斐川町出西   散布地   103   須恵器、磁器   37   沢田   横穴群   斐川町出西   横穴墓   33   38   後谷町道脇古墳   斐川町出西   横穴墓   18   107   横穴式石室   39   八幡宮横横穴   斐川町出西   横穴墓   18   107   横穴式石室   40   後谷丘陵古墳群   斐川町出西   横穴墓   95   3穴   42   後谷町遺跡   斐川町出西   散布地   98   須恵器   44   後谷下   遺跡   斐川町出西   散布地   99   土師器、須恵器   44   稲城古墳   群   斐川町出西   散布地   99   土師器、須恵器   44   稲城古墳   群   斐川町出西   古墳   13   3基・1号   (横穴式石室)   18   14   23   25   (横穴式石室)   18   14   25   25   (横穴式石室)   18   26   26   26   26   27   25   (横穴式石室)   27   25   (横穴式石室)   27   25   25   (横穴式石室)   25   25   (横穴式石室)   25   25   25   25   25   25   25   2						
34   後 谷 東 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳 群   49   円墳2基   35   後 谷 II 遺 跡   斐 川 町 出 西   散 布 地   97   須惠罴、磁器   36   沢 田 I 遺 跡   斐 川 町 出 西   散 布 地   103   土師質土器、青磁   37   沢 田 横 穴 群   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   18   107   横穴式石室   39   八 幡 宮 横 横 穴   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   18   107   横穴式石室   39   八 幡 宮 横 横 穴   斐 川 町 出 西   古   墳   193   円墳1、方墳3   34   16   6   6   6   6   7   章 跡   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   95   3 穴   3   3   3   3   4   1   6   6   6   6   6   7   章 跡   世 町 出 西   散 布 地   99   土師器、須惠器   44   稲 城 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳 群   15   45   日墳   45   日墳   45   日墳   46   出 西 小 丸 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳   45   日墳   45   日墳   46   日西 小 丸 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳   45   日墳   46   日西 小 丸 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳   45   日墳   46   日西 小 丸 古 墳 群   5   日西   古 墳   7   5   6   (歳/式石室)   10   10   10   10   10   10   10   1						円項
35   後 谷 II 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   97   須恵器、磁器   36   沢 田 I 遺 跡   斐     町 出 西 散 布 地   103   土師質土器、青磁   37   沢 田 横 穴 群   斐     町 出 西 横 穴 墓   33   38   後 谷 町 道 脇 古 墳   斐     町 出 西 古 墳   107   横穴式石室   39   八 幡 宮 横 横 穴 斐   川 町 出 西 横 穴 墓   18   40   後 谷 丘 陵 古 墳 群   斐   川 町 出 西 横 穴 墓   95   3 穴   42   後 谷 II 遺 跡   斐   川 町 出 西 散 布 地   98   須恵器   43   後 谷 IV 遺 跡   斐   川 町 出 西 散 布 地   99   土師器、須恵器   44   稲 城 古 墳 群   斐   川 町 出 西 古 墳 群   15   45   円墳   46   出 西 小 丸 古 墳 群   52   東 川 町 出 西 古 墳 群   13   3 基 · 1 号 (横穴式石室、閉塞石に門状の陽刻、子持壺)、2 号 (横穴式石室)   47   山 / 奥 横 穴 群   斐   川 町 出 西 古 墳 群   13   3 基 · 1 号 (横穴式石室)   2 号 (横穴式石室)   48   山 / 奥 I 遺 跡   斐   川 町 出 西 古 墳 郡   102   土師器、須恵器   49   中 出 西 I 遺 跡   斐   川 町 出 西 散 布 地   102   土師器、須恵器   49   中 出 西 I 遺 跡   斐   川 町 出 西 散 布 地   102   土師器、土師質土器   50   剣 先 横 穴 群   斐   川 町 出 西 散 布 地   194   土師質土器、陶磁器   52   斐   川 町 出 西 散 布 地   194   土師質土器、陶磁器   52   斐   川 町 出 西 散 布 地   194   土師質土器、陶磁器   52   斐   川 町 出 西 散 布 地   194   土師質土器、陶磁器   52   ▼   川 町 出 西 散 布 地   194   土部質土器、古式土師器   7   仏 経 山   斐   川 町 出 西 散 布 地   195   弥生土器、古式土師器   7   仏 経 山   斐   川 町 出 西 散 布 地   194   土部質土器、 古式土師器   7   仏 経 山   斐   川 町 出 西 散 布 地   195   弥生土器、古式土師器   7   仏 経 山   斐   川 町 出 西 散 布 地   196   土部   101						田棒の甘
36   沢 田 I 遺 跡 斐川町出西						
37   沢 田 横 穴 群   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   33   38   後谷 町 道 脇 古 墳   斐 川 町 出 西   古 墳   107   横穴式石室   39   八 幡 宮 横 横 穴 斐 川 町 出 西   横 穴 墓   18   40   後谷 丘 陵 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳   193   円墳1、方墳3   41   後 谷 横 穴 群   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   53   穴 墓   52   3穴   42   後 谷 田 遺 跡   斐 川 町 出 西   散 布 地   99   五 師器、須恵器   43   後 谷 Ⅳ 遺 跡   斐 川 町 出 西   古 墳 群   15   15   45   登 道 古 墳   斐 川 町 出 西   古 墳   群   15   15   45   登 道 古 墳   斐 川 町 出 西   古 墳   群   15   16   45   日墳   日本   16   16   16   16   16   16   16   1						
38   後谷町道脇古墳   斐川町出西   古   墳   107   横穴式石室   39   八幡宮横横穴   斐川町出西   横穴墓   18   18   40   後谷丘陵古墳群   斐川町出西   横穴墓   95   3穴   42   後谷町 遺跡   斐川町出西   散布地   98   須恵器   43   後谷町 遺跡   斐川町出西   散布地   99   土師器、須恵器   44   稲城古墳群   斐川町出西   散布地   99   土師器、須恵器   45   日墳   七面小丸古墳群   斐川町出西   古墳   45   日墳   45   日間   45						上 即 貝 上 茄 、 月 呶
39   八幡 宮 横 横 穴   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   18     40   後谷丘陵古墳群   斐 川 町 出 西   古   墳   193   円墳1、万墳3     41   後 谷 横 穴 群   斐 川 町 出 西   横 穴 墓   95   3 穴     42   後 谷 田 遺 跡   斐 川 町 出 西   散 布 地   98   須恵器     43   後 谷 IV 遺 跡   斐 川 町 出 西   古 墳 群   15     44   稲 城 古 墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳 群   15     45   登 道 古 墳   斐 川 町 出 西   古 墳 郡   15     46   出 西 小 丸 古墳 群   斐 川 町 出 西   古 墳 郡   13   3		次 山 慎 八 <del>日</del>				# · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
40   後谷丘陵古墳群   斐川町出西   古   墳   193   円墳1、方墳3   41   後 谷 横 穴 群   斐川町出西   横 穴 墓   95   3 穴   42   後 谷 Ⅲ 遺 跡   斐川町出西   散 布 地   98   須惠器   43   後 谷 Ⅳ 遺 跡   斐川町出西   散 布 地   99   土師器、須惠器   44   稲 城 古 墳 群   斐川町出西   古 墳 群   15   15   15   15   16   16   16   16						(現代)人(日主
41 後 谷 横 穴 群 斐川町出西 横 穴 墓 95 3穴   42 後 谷 Ⅲ 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 98 須恵器   43 後 谷 Ⅳ 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 99 土師器、須恵器   44 稲 城 古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 15   45						円墳1. 方墳3
42 後 谷 Ⅲ 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 98 須恵器 43 後 谷 Ⅳ 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 99 土師器、須恵器 44 稲 城 古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 15 45 登 道 古 墳 斐川町出西 古 墳 45 円墳 46 出西小丸古墳群 斐川町出西 古 墳 群 13 3基・1号(横穴式石室、閉塞石に門状の陽刻、子持壺)、2号(横穴式石室) 47 山ノ奥横穴群 斐川町出西 横 穴墓 16 23穴以上 48 山ノ奥 I 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 102 土師器、須恵器 49 中出西 I 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 101 土師器、土師質土器 50 剣 先 横 穴 群 斐川町出西 横 穴 墓 94 2穴以上 51 中出西 I 遺 跡 斐川町出西 散 布 地 194 土師質土器、陶磁器 52 斐伊川鉄橋遺跡 斐川町出西 散 布 地 194 土師質土器、陶磁器 7 仏 経 山 斐川町出西 散 布 地 119 弥生土器、古式土師器 7 仏 経 山 斐川町出西 故 布 地 119 弥生土器、古式土師器 6 支 中 出						
43       後 谷 IV 遺 跡       斐川町出西       散 布 地       99       土師器、須恵器         44       稲 城 古 墳 群       斐川町出西       古 墳 群       15         45       登 道 古 墳 要川町出西       古 墳 群       15         46       出西小丸古墳群       斐川町出西       古 墳 群       13       3基・1号(横穴式石室、閉塞石に門状の陽刻、子持壺)、2号(横穴式石室)         47       山ノ奥 I 遺跡       斐川町出西       黄 元に門状の陽刻、子持壺)、2号(横穴式石室)         48       山ノ奥 I 遺跡       斐川町出西       散 布 地       102       土師器、須恵器         49       中出西 I 遺跡       斐川町出西       散 布 地       101       土師器、須恵器         49       中出西 I 遺跡       斐川町出西       散 布 地       101       土師器、土師質土器         50       剣 先 横 穴 群       斐川町出西       散 布 地       101       土師器、土師質土器         50       剣 先 横 穴 群       斐川町出西       散 布 地       194       土師質土器、陶磁器         52       斐伊川鉄橋遺跡       斐川町併川       散 布 地       119       弥生土器、古式土師器         7       仏経       山 斐川町出西       お立て山(国引き神話)         9       自 内能を神社       斐川町神水       曽伎乃夜社(風土記)						
44     稲 城 古 墳 群 斐川町出西 古 墳 群 45       45     登 道 古 墳 斐川町出西 古 墳 45     円墳       46     出西小丸古墳群 斐川町出西 古 墳 群 13     3基・1号(横穴式石室、閉塞石に門状の陽刻、子持壺)、2号(横穴式石室)       47     山ノ奥横穴群 斐川町出西 横穴墓 16     23穴以上       48     山ノ奥 I 遺跡 斐川町出西 散 布 地 102     土師器、須恵器       49     中出西 I 遺跡 斐川町出西 散 布 地 101     土師器、土師質土器       50     剣先横穴群 斐川町出西 横穴墓 94     2穴以上       51     中出西 II 遺跡 斐川町出西 散 布 地 194     土師質土器、陶磁器       52     斐伊川鉄橋遺跡 斐川町併川						
45     登 道 古 墳 斐川町出西 古 墳 45     円墳       46     出西小丸古墳群 斐川町出西 古 墳 群 13     3基・1号(横穴式石室、閉塞石に閂状の陽刻、子持壺)、2号(横穴式石室)       47     山ノ奥横穴群 斐川町出西 横穴墓 16     23穴以上       48     山ノ奥 I 遺跡 斐川町出西 散布地 102     土師器、須恵器       49     中出西 I 遺跡 斐川町出西 散布地 101     土師器、土師質土器       50     剣先横穴群 斐川町出西 横穴墓 94     2穴以上       51     中出西 II 遺跡 斐川町出西 散布地 194     土師質土器、陶磁器       52     斐伊川鉄橋遺跡 斐川町併川 公出雲市 散布地 119     弥生土器、古式土師器       ア 仏経 山 斐川町出西・神水 119     小生土器、古式土師器       イ 三 本 松 山 斐川町出西 おった 2     お立て山(国引き神話)       ウ 曽 枳能夜神社 斐川町神水     曽伎乃夜社(風土記)						
46     出西小丸古墳群     斐川町出西 古墳群     3 基・1号(横穴式石室、閉塞石に閂状の陽刻、子持壺)、2号(横穴式石室)       47     山ノ奥横穴群     斐川町出西 横穴墓 16     23穴以上       48     山ノ奥 I 遺跡     斐川町出西 散布地 102     土師器、須恵器       49     中出西 I 遺跡     斐川町出西 散布地 101     土師器、土師質土器       50     剣先横穴群     斐川町出西 横穴墓 94     2穴以上       51     中出西 II 遺跡     斐川町出西 散布地 194     土師質土器、陶磁器       52     斐伊川鉄橋遺跡     斐川町併川	45				45	円墳
48     山 ノ 奥 I 遺跡     斐川町出西     散布地     102     土師器、須恵器       49     中出西 I 遺跡     斐川町出西     散布地     101     土師器、土師質土器       50     剣 先 横 穴 群     斐川町出西     横 穴 墓     94     2 穴以上       51     中出西 II 遺跡     斐川町出西     散布地     194     土師質土器、陶磁器       52     斐伊川鉄橋遺跡     斐川町併川 公出雲市     散布地     119     弥生土器、古式土師器       ア 仏 経 山 斐川町出西・神水 古江・阿宮     神名火山(風土記)       イ 三 本 松 山 斐川町出西     お立て山(国引き神話)       ウ 曽 枳 能 夜 神 社 斐川町 神 氷     曽伎乃夜社(風土記)	46	出西小丸古墳群	斐川 町 出 西	古墳群	13	
48     山 ノ 奥 I 遺跡     斐川町出西     散布地     102     土師器、須恵器       49     中出西 I 遺跡     斐川町出西     散布地     101     土師器、土師質土器       50     剣 先 横 穴 群     斐川町出西     横 穴 墓     94     2 穴以上       51     中出西 II 遺跡     斐川町出西     散布地     194     土師質土器、陶磁器       52     斐伊川鉄橋遺跡     斐川町併川 公出雲市     散布地     119     弥生土器、古式土師器       ア 仏 経 山 斐川町出西・神水 古江・阿宮     神名火山(風土記)       イ 三 本 松 山 斐川町出西     お立て山(国引き神話)       ウ 曽 枳 能 夜 神 社 斐川町 神 氷     曽伎乃夜社(風土記)	47	山ノ奥横穴群	斐川 町 出 西	横穴墓	16	
49     中 出 西 I 遺 跡     斐川町出西 散 布 地     101     土師器、土師質土器       50     剣 先 横 穴 群 斐川町出西 横 穴 墓 94     2 穴以上       51     中 出 西 II 遺 跡     斐川町出西 散 布 地 194     土師質土器、陶磁器       52     斐伊川鉄 橋 遺跡     斐川町併川 公出雲市 散 布 地 119     弥生土器、古式土師器       ア 仏 経 山 斐川町出西・神水 神名火山(風土記)     本 松 山 斐川町出西 お立て山(国引き神話)       ウ 曽 枳 能 夜 神 社 斐川町 神 氷     曽伎乃夜社(風土記)	-					
50     剣 先 横 穴 群 斐 川 町 出 西 横 穴 墓 94 2 穴以上       51     中 出 西 II 遺 跡 斐 川 町 出 西 散 布 地 194 土師質土器、陶磁器       52     斐 伊 川 鉄 橋 遺 跡 芝 川 町 出 西 散 布 地 119 弥生土器、古式土師器       ア 仏 経 山 斐川町出西・神水 神名火山(風土記)       イ 三 本 松 山 斐 川 町 出 西 ウ 曽 枳 能 夜 神 社 斐 川 町 神 氷     お立て山(国引き神話) 曽伎乃夜社(風土記)	49					
51     中 出 西 I 遺 跡 斐 川 町 出 西 散 布 地 194 土師質土器、陶磁器       52     斐 伊 川 鉄 橋 遺 跡 世 出 雲 市 散 布 地 119 弥生土器、古式土師器       ア 仏 経 山 斐川町出西・神水 神名火山(風土記)       イ 三 本 松 山 斐川町出西 お立て山(国引き神話) 曽 枳 能 夜 神 社 斐 川 町 神 氷 曽 伎乃夜社(風土記)	50				94	
52     斐 川 町 併 川 へ 出 雲 市 散 布 地 119 弥生土器、古式土師器       ア 仏 経 山 斐川町出西・神水直江・阿宮     神名火山(風土記)       イ 三 本 松 山 斐川町出西 お立て山(国引き神話) 曽 枳 能 夜 神 社 斐川 町 神 氷     曽 内 市 神 氷					194	土師質土器、陶磁器
ア     仏     経     山     斐川町出西・神氷     神名火山(風土記)       イ     三     本     松     山     斐川町出西     お立て山(国引き神話)       ウ     曽     根     花     神     社     財     財     財     財     財     日 </td <td></td> <td></td> <td>斐川町併川 ~出雲市</td> <td></td> <td>119</td> <td></td>			斐川町併川 ~出雲市		119	
イ 三 本 松 山 斐川町出西     お立て山(国引き神話)       ウ 曽 枳 能 夜 神 社 斐川町 神 氷     曽伎乃夜社(風土記)	ア	仏 経 山	ま出西・神氷			神名火山(風土記)
ウ 曽 枳 能 夜 神 社 菱 川 町 神 氷 曽伎乃夜社 (風土記)	1	三 本 松 山				お立て山(国引き神話)
	エ	久 武 神 社	斐川町出西			久牟社(風土記)

#### 2. 周辺の神話・地名伝承

平成3年度より4次にわたって発掘調査が実施された後谷V遺跡は、『出雲国風土記』の出雲郡出雲郷の条「即属郡家」に相当することの蓋然性を高めた $^{(1)}$ 。たまたまこの地や周辺には、それと関わりのありそうな神話・地名伝承が多くあるので記すことにする(第9図)。

#### (1) 神話による地名伝承

#### ① 稲城(いなぎ)

その昔、須佐之男命が高天が原からこの地に天下りになると、奥地の山あいからもむくむくと幾重にも流れ出る雲に驚かれ、こんな雲の多いところに人が住んでいるだろうかと思われながら、ふと海辺に流れ出る大川に目をされると「箸」が流れて来ました。

"人が住んでいる"と喜んで川上に足を運ばれると、「おきな・おみな」が「おとめ」を中にして泣いていました。

~ ここから、古事記に記されている須佐之男命の八俣大蛇退治になる。

さて、須佐之男命が大蛇退治に出発されるにあたって、稲田姫命の身を深く案じられ、稲藁で七重八重に垣を巡らした城を作ってそこにかくまわれた。つまり稲城をつくられたのである。 「稲城」の地名がここにあるのは、このような神話伝承によるからである<sup>②</sup>。

#### ② 雲社(くものやしろ)

須佐之男命が大蛇退治を終えてお帰りになり、稲田姫命がお待ちになっている稲城にお入りになると、それをめでるかのようにそこかしこから雲が湧き出るようにして充満し城を包みました。

大変お喜びになった須佐之男命は満面笑みて「八雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣作る その八重垣を」とお歌いになりました。

その稲城の跡にこの二神をお祀りした「雲社」があったそうですが、幾度かの遷座によりそのあとかたが消失、現在は久武社(くむのやしろ)として同地域内の他の場所に祀られている<sup>(3)</sup>。

#### ③ 朝妻里(あさつまのこざと)

須佐之男命が毎夜稲田姫命を妻問いされて、毎朝お帰りになった里(さと)ということから、 この地域の地名となったといわれている。

稲田姫命の館跡といわれている場所には、現在姫神を祀る稲田明神があり、遺跡に隣接している。なお、この明神社の西南約300mの山麓には、御崎荒神といって須佐之男命を祀る祠があり、そこが須佐之男命の館があったところと伝えられている<sup>(4)</sup>。

正倉院文書『出雲国大税賑給歴名帳』®の出雲郷にこの朝妻里名があるが、上記の伝承によったものと思われる。

なお、この『歴名帳』の朝妻里に「寡」(か→老独女)として稲置(城)部が記されている ことも意義あるように思われる。また、この朝妻里から「魏志倭人伝」に記されている投馬国 を想定することも考えられる。

#### (2) 遺跡と関わりのありそうな地名伝承

#### ① 長者原(ちょうじゃばら)

『出雲風土記考』 $^{(6)}$  は、ここを郡家に比定しているが、やや不便な丘陵地なうえに狭小でもあり妥当性に欠ける。

伝承では、その昔、学問の好きな大変立派な長者(大和時代の首で稲置であったとも考えられる)が住んでおり、朝鮮半島渡来の学者である畑(秦)氏が仕えていたと伝えられている。 その畑氏は江戸時代中期ごろまで豪農としてこの地で栄えていたが、その後裔がふるわず今は絶家となっている。

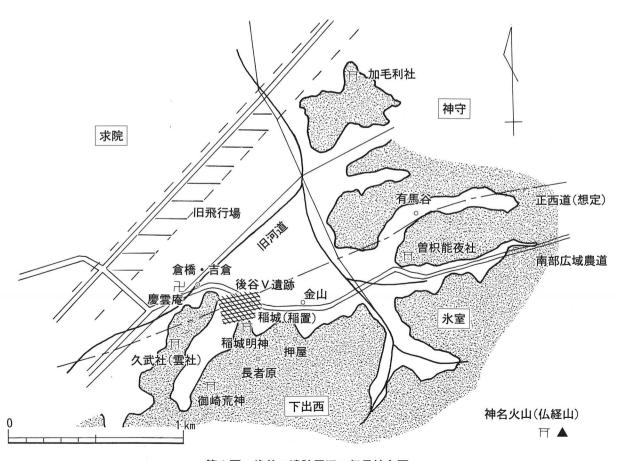
#### ② 慶雲庵 (けいうんあん)

平成4年発掘の正倉跡の隣接地にこの庵があった。『雲陽誌』<sup>(7)</sup> によれば、上記畑氏の建立とあるが、なぜ704~707年に使われた年号を用いたのであろうか。同時代の郡家との関わりを思量したくなる。(現在は慶雲庵観音堂として筆者の宅地内にある)

#### ③ 押屋(おしや)

稲城(この地名を屋号にしていた家がこの地にあったが江戸時代末絶家となる)の地に隣接 して「押屋」の地名がある。そしてこの地にある民家の屋号にもなっている。

「おさのや $\rightarrow$ おさや $\rightarrow$ おしや」の音韻変化が考えられ、郡司(郷長)の館跡ではなかったか と思われる。



第9図 後谷 V 遺跡周辺の伝承地名図

#### ④ 有馬谷(ありまだに)

遺跡の東方約500mの地にある緩やかな谷間をいう。この地は『出雲国風土記』にいう正西道(まにしのみち)が通っていたと考えられる場所で、郡庁舎(郡家)の一部で厩牧令にいう厩家が置かれた所ではないかと思われる。

#### ⑤ 倉橋・吉倉(くらはし・よしくら)

正倉跡との距離約50m北側の旧川(平成2年川跡発掘)に架っていた橋の名を「倉橋」といっていた。また、その近くには「吉倉」という地名があったと言われている。現在は両地名ともその近くの家の屋号となっている。

#### ⑥ 神名火山(かむなびやま)

『出雲国風土記』に4山が記されている。そしてこの神山にもっとも近い郷に郡家がある。 ちなみに、意宇郡(おうのこほり)は神名樋野→郡家約1.8km。秋鹿郡(あきかのこほり)は 神名火山→郡家約4.8km。楯縫郡(たてぬひのこほり)は神名樋山→郡家約3.5km。出雲郡は神 名火山→郡家約1.8kmである。

山にこもれる神が、春から秋にかけて野辺に下って、農作物の豊穣をねがう民を見守る。という神山を郡家の背後にもつことの意義が考えられる。このように思量すると、発掘された(1区~8区)正倉跡に隣接して出雲郡家があったことが想定される。

#### ⑦ その他

全国的に郡家(郡衙)遺跡の態様をみると、郡庁の外に種々の付属施設や仏教・祭祀関係の 施設がみられる。

ここ後谷V遺跡の周辺には、前述したように厩家らしき地名があり、また、平坦地には「金山」という地名があって、金属生産工房があったではないかと想像される。

この遺跡の東方約200mの地から同時代と思われる寺院瓦の出土や前述した慶雲庵の存在、 前述の各社等を思量すると、全国なみの郡家(郡衙)遺跡の存在が想定される。

なお、横枕、京田、大田、坪の内等条里制にかかわる地名がこの地にあることも見逃すこと はできない。

#### (3) むすび

「郡家の所在地は比処」という前提で、後谷V遺跡周辺の神話・地名伝承を隈無く取り上げた つもりである。しかしこれは、郡家遺跡の発掘があってこそ確かな伝承といえる。

今後も継続的な調査で郡家の全容を解明されることが待たれる。

池田敏雄(斐川町文化財保護審議会委員)

#### 註

- (1) 斐川町教育委員会『出雲国出雲郡家正倉跡』1993 年、Ⅱ・1994年、Ⅲ・1995年
- (2) 長瀬定市氏のご教示による。
- (3) 池田敏雄『久武神社遷宮記念誌』1994年
- (4) 池田敏雄『斐川の地名散歩』斐川町1987年
  - (5) 島根県『新修島根県史』臨川書店1968年
- (6) 横山永福『出雲国風土記考』1963年
- (7) 『雲陽誌』島根県内務部1910年

# Ⅲ調査の概要

#### 1. 1区の調査

道路敷地部分で礎石が検出されたため調査区域を南側に拡張して調査を行った。調査地の現況は水田で、標高は9.6mを測り、北に向かって次第に低くなる地形となっている。調査区の南側は「後谷」の谷奥、北と東側は水田が広がるが、西側はわずか5mほどで後谷丘陵の裾野に達し、切迫した印象を受けるところである。

基本的な層序は、上から耕作土(I)、灰色砂質土(Ⅱ)、暗オリーブ灰色土(Ⅲ)、暗オリーブ褐色土(Ⅳ)、オリーブ黒色土(Ⅴ)、黒色土(Ⅵ)、黒褐色土(Ⅶ)の順に堆積している。とくに、Ⅵ層からは多量の炭化米や多数の土師質土器、若干の須恵器、白磁が出土した。礎石を検出したのもⅥ層中である。このⅥ層は水田下1.3m、20㎝の厚さで均一に堆積し、標高は上面で8.2mを測る。検出された主な遺構は、礎石建物跡 2、掘立柱建物跡 2、溝状遺構 2、小ピット少数である。

#### (1) 検出遺構(第10図~第13図)

#### SB01 (礎石建物)

1区の北寄りで検出された総柱構造の礎石建物跡である。平成3年度の調査で既に南北2間、東西3間(全長6.24m)の礎石列が確認されていたものであるが、礎石の大きさや間隔からみて、桁行は南北方向で2間以上は確実にあるものとみられる。従って、建物の北側はさらに道路下に続くものと考えられる。このようにみると建物の主軸は南北方向にあり、柱間寸法は桁行193cm(6.5尺)等間、梁行208cm(7尺)等間を測り、主軸方向はN1°Eとなるであろう。

礎石は径65~135㎝のもの10個が検出された。角のとれた丸味のある楕円形の石が多い。礎石は若干動いているのかほとんどの石が上面を平坦としていない。礎石の周囲に径10~40㎝大の根石を多く据えているもの( $S_2$ 、 $S_3$ 、 $S_7$ 、 $S_{10}$ )とほとんど無いもの( $S_1$ )がある。礎石の標高は8.11~8.30mを測る。

SB01の地下構造を土層断面でみると、まず東西長8.5m以上にわたって建物より広い範囲で地面を深さ $60\sim80$ cmに掘り下げ、次に底にオリーブ黒色土(V)を固く敷いて叩き締め、その上に根石、礎石を据え周囲に黒褐色土(W1・整地層)を敷きつめた地業を行っていることがわかる。根石や礎石を据える際に掘り方を掘る作業は行わなかったようである。

建物の南側には南辺の礎石より南へ1mのところで、SD01 (溝状遺構)が検出された。検出状況からみて、SB01と同時期の遺構と考えられる。

#### SB02 (礎石建物)

1区の南半で検出された総柱構造の礎石建物跡である。建物の南側は調査区外へ続く可能性もあるが、ここで検出されたのは桁行5間(全長11.90m)、梁行3間(5.34m)の南北棟である。柱間寸法は桁行238cm(8尺)等間、梁行178cm(6尺)等間である。床面積は63.5㎡を測り、主軸方向はN1°Eとなる。SB02の東辺礎石列とSB01のそれとは南北に一直線上に並ぶことから、東

側の柱筋を揃えて建てられていることがわかる。なお、SB01との空間距離は15mを測る。

SB02の西辺の礎石から1.5mの位置で南北に走るSD02(溝状遺構)が検出された。SB02と同時期の遺構と考えられる。

なお、建物の北西側で径25cm前後を測る16個の小ピットが集中して検出された。この内12個は建物の外側に位置することから建築時の補助的な役割を果たす足場穴とも考えられる。しかし、ピットの並びが不揃いで、径も小さいため断定することは難しいであろう。

#### SB03 (掘立柱建物)

1区の中央で検出された総柱構造の掘立柱建物跡である。SB02の北側の黒褐色土( $\mathbf{W}\mathbf{I}$ ・整地層)を取り除いた下層・黒色土面で検出された。検出面の標高は7.67~8.11mを測る。検出された建物は桁行4間(7.72m)、梁行3間(5.79m)の南北棟である。柱間寸法は桁行、梁行ともに193cm(6.5尺)等間である。床面積は44.7㎡を測り、主軸方向はN1.5°Eとなる。

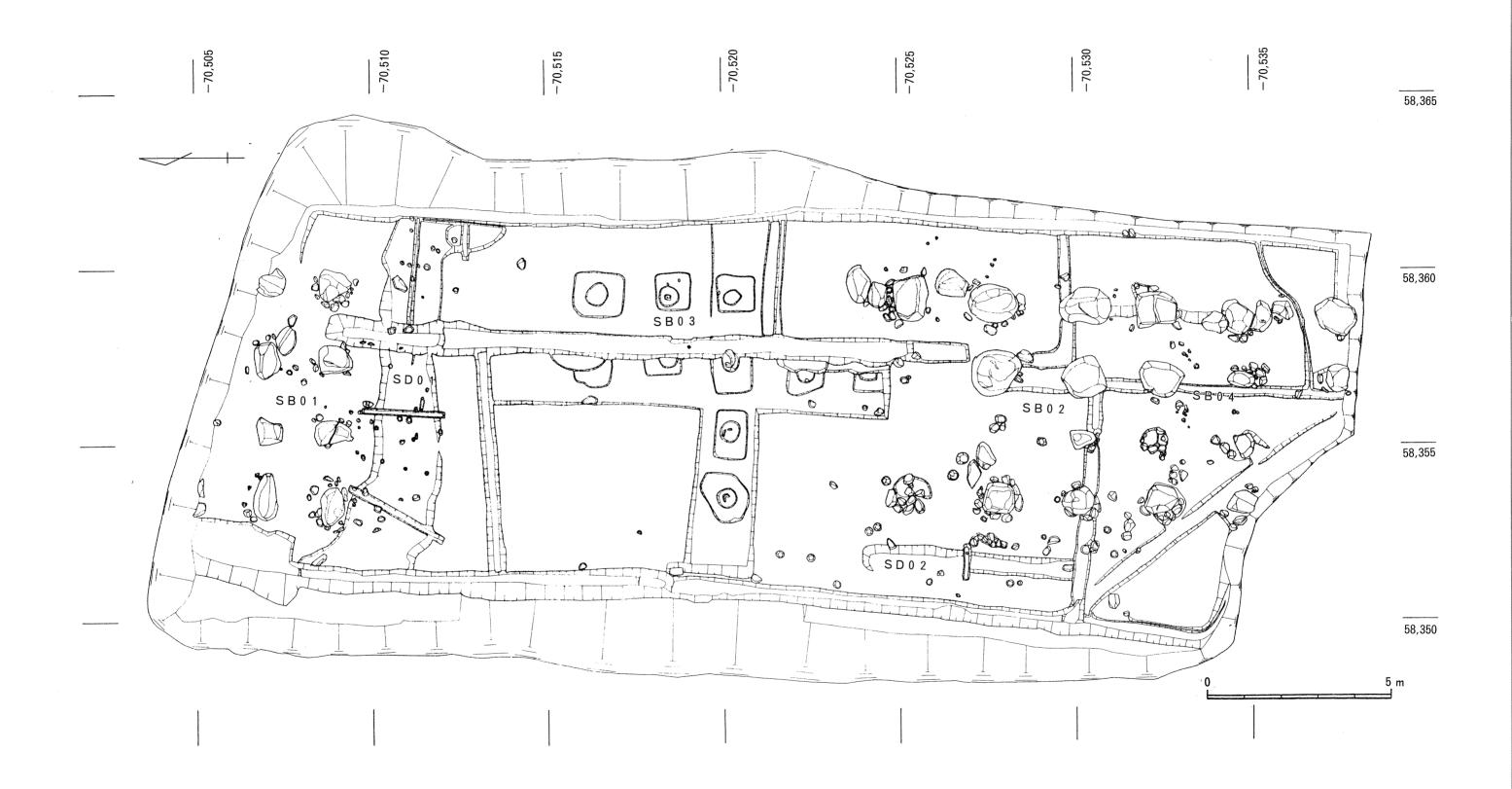
検出された柱穴は10個で、大半が方形の掘り方をもち、一部に長方形や不整方形のものもある。柱穴の一辺は93~146cm、深さは49~71cmを測る。 $P_2$ 、 $P_6$ 、 $P_9$ 、 $P_{10}$  は柱根が遺存している。  $P_6$  の柱根は長さ72cm、径30~40cmを測り、自らの重みのせいか底部が柱穴底にくい込む状態になっている。柱穴に抜き取り穴がみられないこと、いずれの柱根も頂部が腐植していることからマサカリのようなもので切断した可能性が考えられる $^{(1)}$ 。 $P_7$ 、 $P_8$  の柱根上部は土砂で埋められていた。  $P_5$  の柱根は樹種鑑定をした結果、カヤであった。平城京などではヒノキを使うのが一般的であるが、その代用品として別の木を使ったのではないかとする見方がある $^{(2)}$ 。

なお、SB03は後述するSB04とともに全面的に遺構を検出すれば、上層遺構(SB02など)が破壊されることになるため、今回は遺構保存の観点から最小限の調査にとどめた。

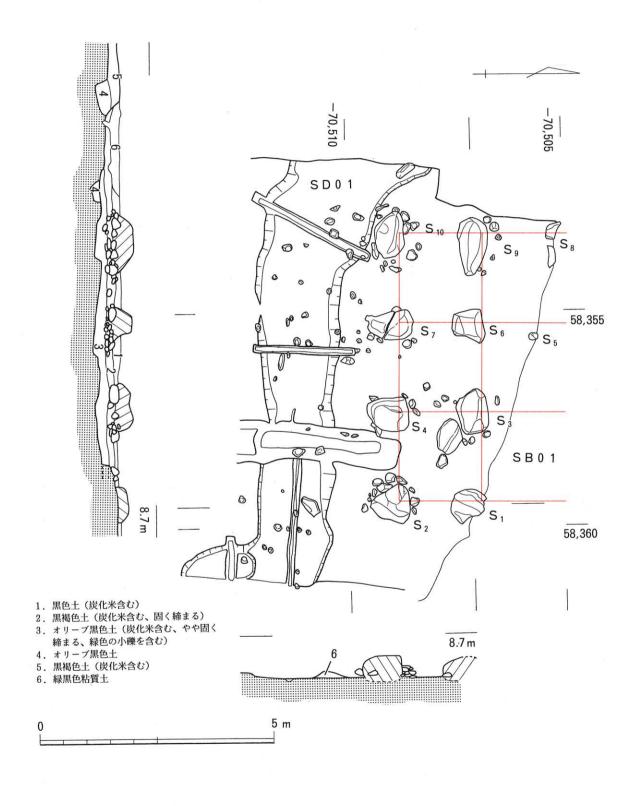
#### SB04(掘立柱建物)

1区の南寄りで検出された総柱構造の掘立柱建物跡である。SB02の東辺から2列目の礎石列にサブトレンチを設定し、下層の状況を調査した際に土層断面で確認された。検出された柱穴は南北方向に4穴、東西方向に3穴であるが、南側の調査区外に延びることを考慮にいれると、桁行は南北方向にあると思われる。従って、桁行3間以上、梁行3間(5.79m)と想定される。柱間寸法は桁行、梁行ともに193cm(6.5尺)等間を測る。主軸方向はN2°Eとなり、東辺柱穴列はSB03のそれと柱筋を揃えて建てられている。SB03との空間距離は4.7mを測る。

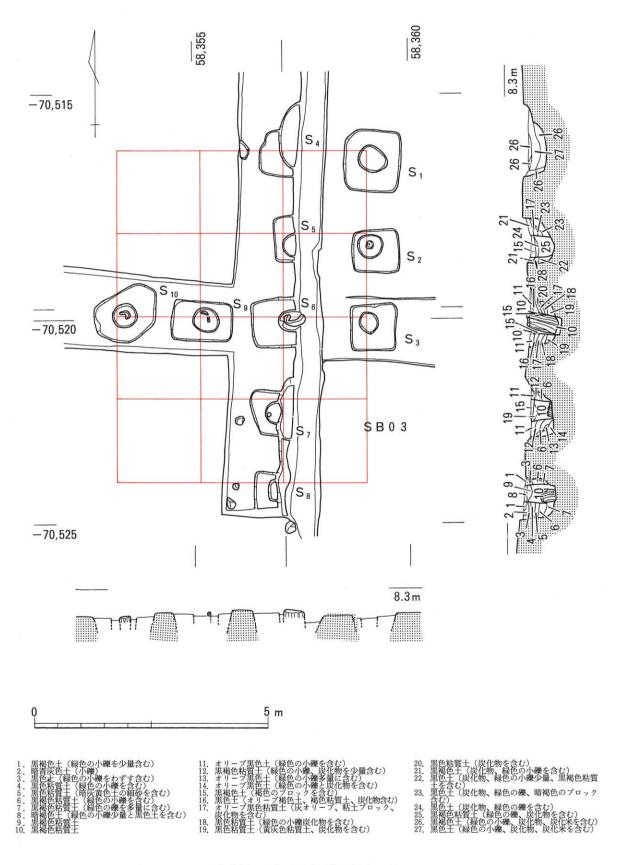
検出された7つの柱穴は一辺 $116\sim153$ cm、深さは $66\sim80$ cmを測り、 $P_3$ と $P_5$ で柱根が遺存している。



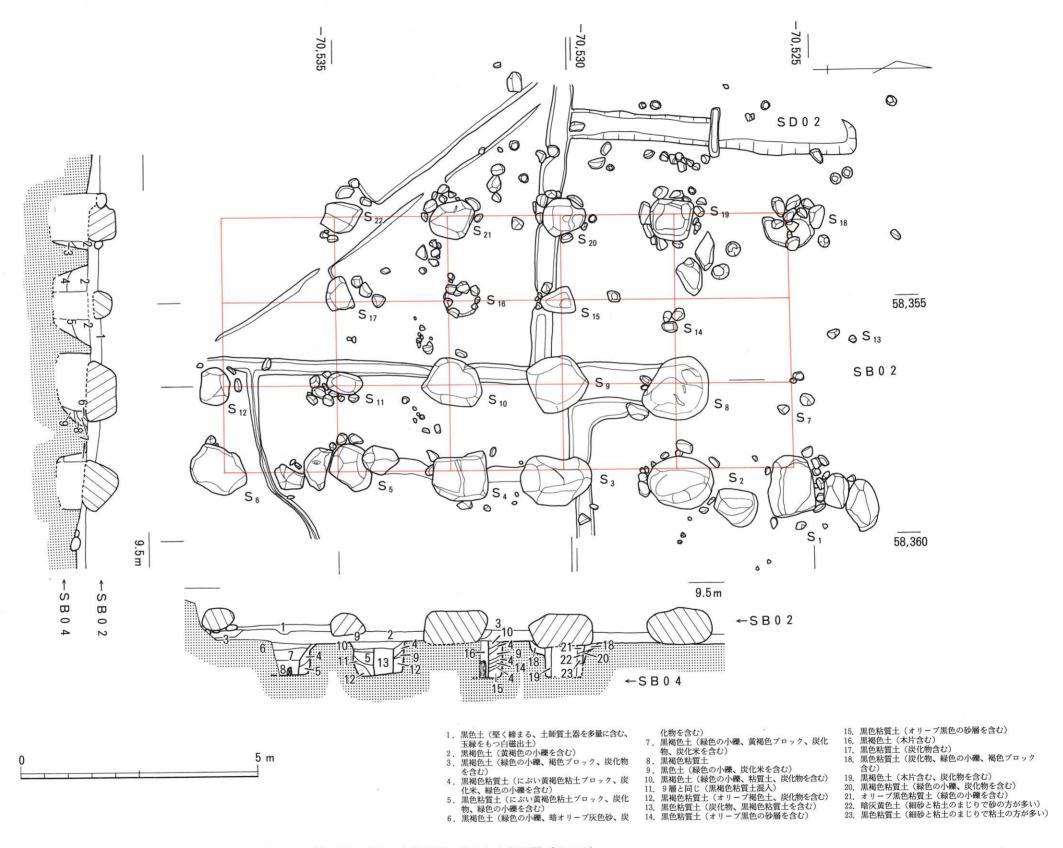
第10図 1区遺構平面図(1:100)



第11図 SB01実測図(1:80)



第12図 SB03実測図(1:80)

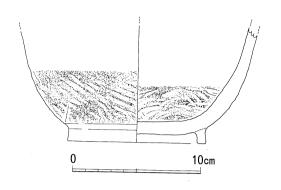


第13図 SB02実測図、SB04断面図(1:80)

 $P_3$ 、 $P_6$   $\sim$   $P_8$  の掘り方内から炭化物や炭化米、 $P_1$ 、  $P_4$ 、 $P_5$  の掘り方内から炭化物、 $P_5$  の掘り方内から 須恵器壷の底部(第14図)が出土した。 SB0 4 が検出 された面は SB0 3 と同一面のため同時期の建物と考えられる。

#### SD01 (溝状遺構)

1区の北寄りでSB01の南辺に沿って東西方向に検 出された溝状遺構である。溝の西側では北向きに、東側 では南向きに方向をかえ、幅も広くなりつつある。検出



第14図 SB04-P 5 出土遺物実測図(1:3)

された溝の長さは9.8m、幅は中央で1.1m、西側端で3.3m、東側端で3.1mを測る。溝の深さは15cmを 測り、断面は浅いU字状を呈している。溝内からは炭化米が多量に検出された。位置関係からみて、 SB01が火災にあって、南側へ倒壊したために多量の炭化米が堆積した可能性が考えられる。

#### SD02(溝状遺構)

1 区の南西寄りでSB02の西辺に沿って南北方向に検出された溝状遺構である。検出された溝の長さ6m、幅0.6mを測るが、溝の南側の続きは検出できなかった。深さは7cmと浅く、断面U字状を呈している。溝内より炭化米が多量に検出された。SB02の雨落ち溝であろうか。

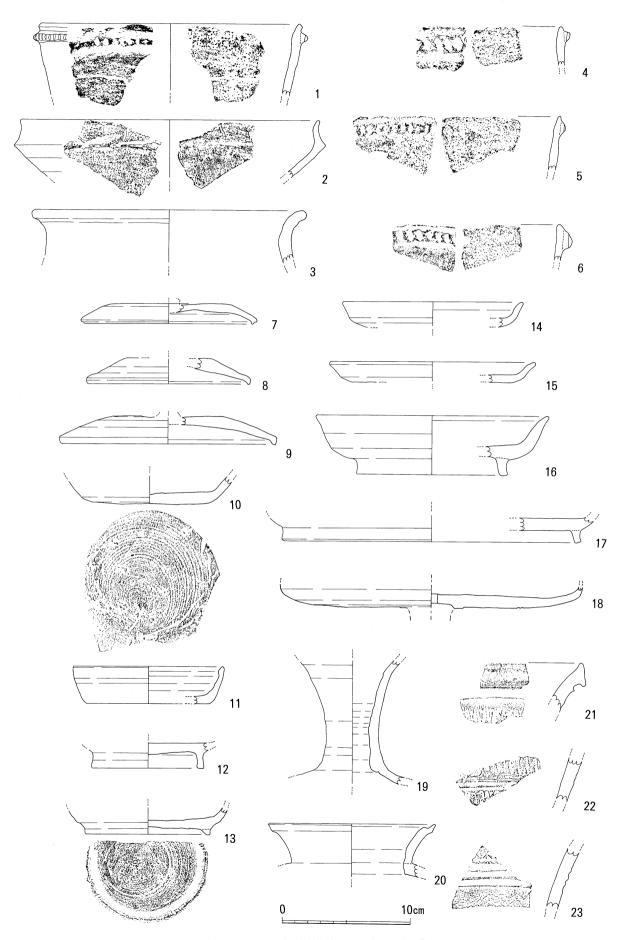
#### (2) 出土遺物(第15図~第19図)

1区から出土した遺物はSB04のP $_5$ から出土した須恵器の壺片1点を除くと、他はすべて堆積土またはサブトレンチから出土したものである。しかし、厳密にどの層から出土したものか十分に把握することができなかったが、概ね次のようなことがいえそうである。

- 土師質土器と陶磁器 —— SB01およびSB02の黒色土層 (VI) から出土

出土した遺物の量はコンテナにして35箱になるが、大半が破片のため実測し得たのは一部であった。第15図1~6は縄文土器である。1、4~6は晩期に属する突帯文土器の深鉢で、頸部は直立ないしやや外反し、口唇部は先細りを呈するが、1は外にやや肥厚する。突帯は1、5がやや鋭く、4、6は蒲ぼこ形を呈する。突帯の貼り付け位置は1が口唇部から5mm下った位置で、4~6は口唇部近くにある。突帯上の刻目は5以外は深く刻まれている。調整は1の外面に条痕が認められる。 胎土はいずれも1~3 mm大の白色細砂粒を多く含み、4と5以外は褐色を呈する。2は浅鉢で、口頸部は内湾し、体部との境は明瞭である。頸部はミガキ、胴部はケズリの後、ミガキ調整を施す。3はS字状にゆるく外反する口縁部をもつ鉢であろうか。突帯文土器とともに後述する打製石斧が出土する類例として松江市石台遺跡が $^{(3)}$ 注目される。

7~23は古墳時代後期末~平安時代の須恵器である。7~9は蓋である。7は平らな天井部におそらく擬宝珠つまみをつけたものであろう。口縁部は口径14.8cmを測り、わずかにかえりを残し、天井



第15図 1区出土遺物実測図(1:3)①

部は回転ナデ調整を施す。7世紀後半か。8、9の口縁端部は低く垂下する。8は厚めの天井部、9 はつまみが剥離している。10、11は高台の付かない坏である。10は底部と体部との境は明瞭でなく、 底部に回転糸切りが残る。11は口径12.6cm、器高3.1cmを測り、体部が直線的にのび、口縁端部は内 面に肥厚する。12、13は高台を有する坏で、12の高台は高くまっすぐ下にのび、底部は回転糸切り後、 ナデ調整している。13は底径10.4cmを測り、低い高台で体部は内湾気味に立ち上る。底部は回転糸切 りである。外面に「□□倉」が墨書されている。14、15は高台の付かない皿である。14の体部は短く - 逆「ハ」の字状に開き、15は短く斜め外方に開く。15の底部は回転糸切りである。16は高台を有する 皿で、器壁は厚く、太くしっかりした高台である。体部は斜め上方にのび、端部はすぼまる。焼成は やや不良で、黄灰色を呈する。17は高台を有する盤である。底径25cmと大形で、底部は回転糸切り後、 回転ナデ調整している。外面に墨が付着し転用硯であろうか。8~17はいずれも奈良時代後半から平 安時代に属すものであろう。18は高坏の坏部で大形品である。口縁端部は若干つまみ上るタイプと思 われる。焼成はやや不良で重ね焼きしたと思われる中心部は灰白色、周囲は灰色を呈する。19は長頸 壺で細身の頸部から上方に向けて逆「ハ」の字状に開く。20、21は甕の口縁部である。20は短い頸部 で口縁部を外反させ、端部を上方につまみ上げる。宍道町小松古窯跡群(4)から類似する口縁部が出 土している。21は外反する口縁端部を上下につまみ出し、外面に波状文を施す。22、23は甕の胴部で ある。

第16図~第18図14~18は土師質土器である。破片も含め大量に出土したが、ここでは高台のないもの、脚付きのもの、高台の付くものに分け、さらに高台のないものは皿形、坏形、椀形に、脚付きのものは皿形、坏形に高台の付くものは皿形、坏形、椀形に分類して記すことにする。

土師質土器はすべてロクロ成形で、焼成は良好であるが、色調は白色を呈するものと褐色を呈するものがある。高台のないものと脚付きのものはほとんど回転糸切りが認められる。これらの土師質土器は、形態的特徴や脚付きが出現することから平安時代末から鎌倉時代初期のものとみられる。 〈高台のないもの〉

#### • 皿形土器 (第16図 1~23)

口径の大きさより I 類 (5 cm)、II 類  $(6.0 \sim 8.85 \text{ cm})$ 、II 類  $(8.2 \sim 9.2 \text{ cm})$ 、IV類  $(11.0 \sim 11.2 \text{ cm})$  に分け、さらに形態的特徴から II 類は a: 体部がうすく内湾するもの、b: 体部が厚く内湾し、端部が丸くおさまるもの、c: 体部が逆「ハ」の字状になるもの、d: 体部が逆「ハ」の字状になり端部がやや外反するものに細分化した。

I類(1) 口径5 cm、器高11.5 cmを測り、皿を倭小化した形である。底部はうすく、体部は短く外傾し、端部は丸くおさまる。

 $II a 類 (2 \sim 5)$  口径7.8 cm、器高 $1.7 \sim 2.1 \text{cm}$ を測る。体部は内湾して立ち上がり、底部は厚めのもの  $(2 \ 3)$  と薄めのもの  $(4 \ 5)$  とがある。

b類(6、7) 口径7.7~8.4cm、器高2.1~2.6cmを測る。体部、底部ともa類より厚めで、口縁端部は丸くなる。a類より器高が高い。

c 類(8~13) 口径7.6~8.85cm、器高2.2~2.45cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上

がり、底部は厚めである。器高はb類より高い。

d 類 (14~18) 口径7.6~8.8cm、器高1.75~2.3cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は厚めである。

Ⅲ類(19~21) 口径8.2~9.2cm、器高1.75~2.5cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部は鋭り気味のもの(19、20) と丸くなるもの(21) がある。20、21の底部は擬高台状を呈す。

Ⅳ類 (22、23) 口径11~11.2cm、器高2.6~2.7cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がるもの (22) と内湾気味になるもの (23) とがある。22の口縁端部は平ら気味になる。

- ・底部(第16図24~27) Ⅱ類かⅢ類の底部になるものと思われる。
- 坏形土器 (第17図1~3)

口径の大きさよりⅠ類とⅡ類に分類した。

I類(1) 口径12.4cm、器高5.4cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部はやや鋭る。体部と底部の境は明瞭である。器高の高い坏である。

Ⅱ類(2、3) 口径16cmを測る。2の体部はやや内湾気味に立ち上がり、3は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部に丸みがある。

• 椀形土器 (第17図4~7)

口径の大きさよりⅠ類とⅡ類に分類した。

I類(4) 口径6.7cm、器高4.2cmを測る。体部、底部ともに厚く、口縁端部は強く外反する。 小形の椀である。

Ⅱ類(5) 口径11.6cm、器高4.5cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。 底部は薄くつくられる。

Ⅲ類(7、8) 口径17.4~17.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。

• 底部 (第14図 6 、 9 ~12) 6 、 9 は体部と底部の境はあまり明瞭ではなく、11、12は高台化した 底部をもつ。

〈脚付きのもの〉

皿形、坏形ともに脚部の形態によってa, b類に分類した。

Ⅲ形土器 (第17図13~20)

a類(13) 口径8cm、底径3.6cm、器高2.8cmを測る。皿部はやや深いが脚部は直立気味で、端部は少し内傾する。

b類( $14\sim16$ ) 口径 $7.6\sim8.4$ cm、底径 $3.6\sim4.7$ cm、器高 $2.0\sim2.9$ cmを測る。脚部はやや「ハ」の字形に開くもので、脚部高は高いもの(15)と低いもの(14)とがある。皿部は極端に浅いもの(15)がある。

• 坏形土器 (第17図17~20)

a類(17) 底径4.2cmを測る。脚部は直立気味で、端部はやや内傾する。

b類 (18~20) 口径7.4cm、底径4.9~5.35cm、器高4.4cmを測る。脚部はやや「ハ」の字状に開

くもの(18、19)と大きく「ハ」の字状に開くもの(20)とがある。

〈高台付きのもの〉

口径の大きさより皿形は I 類と I 類と I 類、坏形は I 類~I 類、椀形は I 類と I 類に分けた。さらに坏形 I 類は形態の特徴から a 、 b 類に細分化した。

#### • 皿形土器 (第18図1~4)

I類(1) 口径8.6cmを測り、浅い皿部をもつ。

II 類  $(2 \sim 4)$  口径9.7~11cm、高台径  $6 \sim 6.3$ cm、器高 $3.1 \sim 3.2$ cmを測る。皿部は「ハ」の字状に開き、高台は外方にふんばる。皿底部は薄いもの(2)と厚いもの(3、4)とがある。

#### • 坏形土器 (5~14)

I類(5) 口径7.9cmを測る。坏部は深く、体部は内湾して立ち上がる。

Ⅱ a 類 (6、7) 口径7.8~8.2cm、高台径4.8~5.4cm、器高2.9~3.5cmを測る。坏部は内湾して、短く外方へ立ち上がる。高台は短いもの (6) と長いもの (7) とがある。

b類(8、9) 口径8.7~9 cm、高台径5~6.8 cm、器高2.5 cmを測る。坏部は内湾して、外方へ立ち上がる。

Ⅲ類(10、11) 口径10.2~11.6cm、高台径6.8cm、器高3.7cmを測る。坏部は内湾して立ち上がり、高台は大きくふんばる。

IV類 (12、13) 口径1.5~15.4cm、高台径6.5cm、器高5.6cmを測る。坏部は大きく逆「ハ」の字形に開くもの (13) と、やや内湾して立ち上がるもの (12) とがある。高台は坏部に比べて低くて、短い。

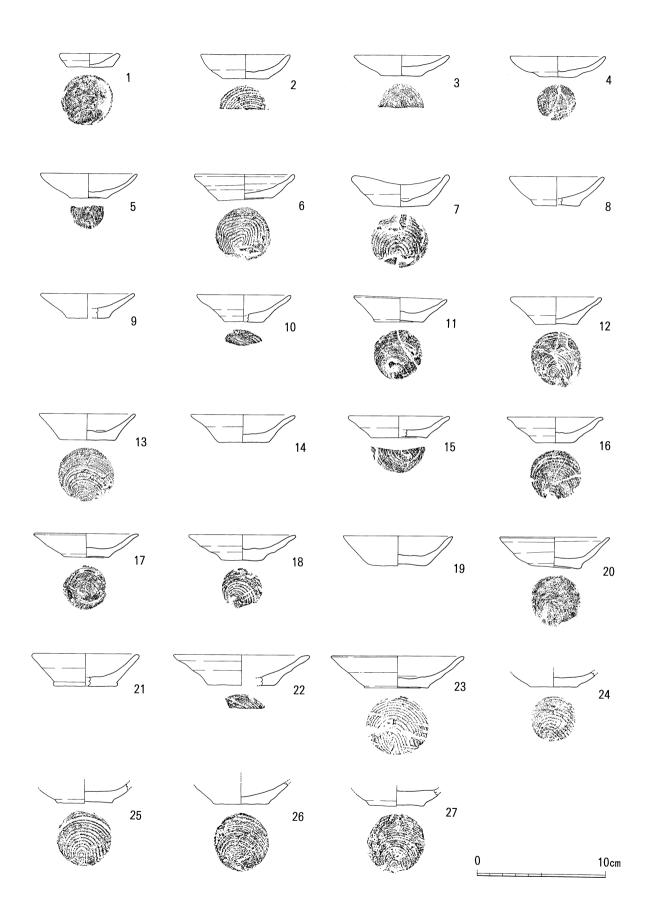
#### • 椀形土器 (15~17)

I類(15) 口径11.2cm、高台径8.2cm、器高7.3cmを測る。坏部は深く、内湾して立ち上がり、端部はやや鋭る。高台は薄く、「ハ」の字状に開く。

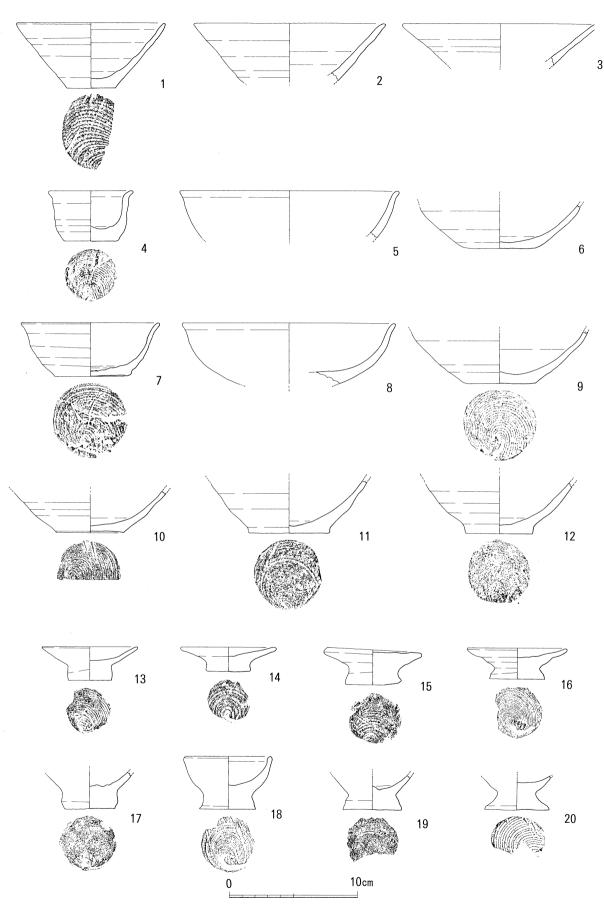
Ⅱ類(16、17) 口径13cmを測る。坏部は内湾して立ち上がり、端部は外反する。坏底部は厚くつくられる。

• 底部(第18図18、19) 高台径6.1~6.7cmを測り、高台は「ハ」の字状に開くが、(19) は太くて 短い。

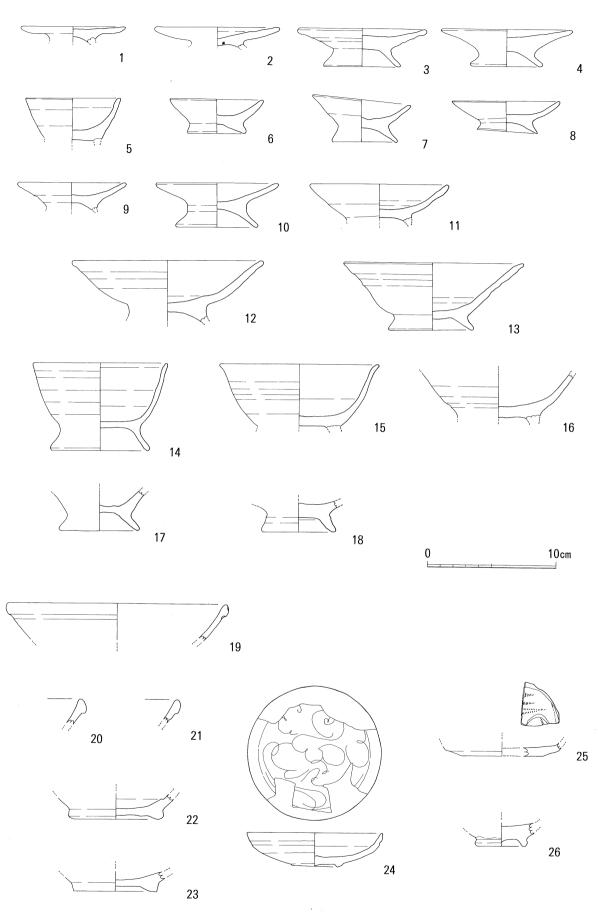
第18図20~25は白磁、26は青磁である。20~22は口縁部を玉縁にする白磁碗である。20はやや小さめの玉縁で、黄色味を帯びている。21、22は灰白色の胎土で、釉調は乳白色を呈する。釉には若干の貫入がみられる。大宰府分類のIV類に相当するであろう。23、24も椀IV類の底部と思われる。いずれも幅広の低い高台がつき、白色の胎土中に黒い細粒が入っている。23は見込みに段を有し、器肉は厚い。釉調は乳白色を呈する。25は器肉が薄く、黄色味がかっている。25は白磁皿で、わずかに削り出した高台を有する。見込みに沈線を入れ、内底にヘラによる草花文様が施されている。外底は焼成前に釉をカキ取ったものと思われる。大宰府分類の皿VII類と思われる。26は同安窯系の青磁皿である。内面見込みにヘラによる片彫りと櫛描によるジグザグ文様を施している。外底は施釉されない。大宰府分類 I 類に相当する。27は椀の底部で、幅狭だがしっかりとした高台をもつ。胎土は灰色、釉調は



第16図 1区出土遺物実測図(1:3)②

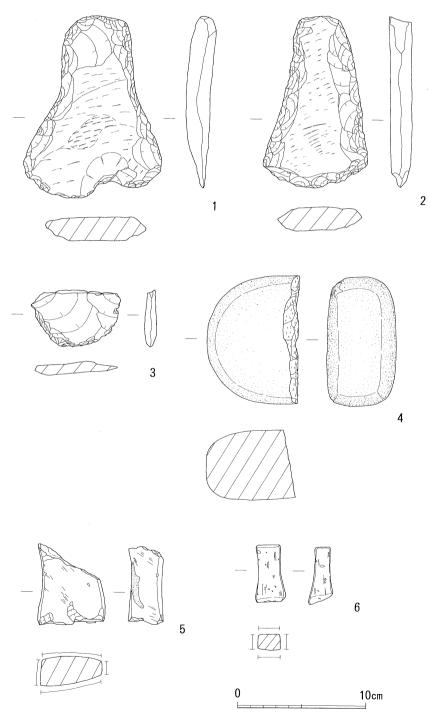


第17図 1区出土遺物実測図(1:3)③



第18図 1区出土遺物実測図(1:3)④

青味がかっている。これらの時期について大宰府跡出土の輸入陶磁器の編年  $^{(5)}$  によると、白磁椀  $\mathbb N$  類、  $\mathbb M$   $\mathbb M$ 



第19図 1区出土遺物実測図(1:3) ⑤

向に入る。

## 2. 2区の調査

1区の北10m、道路をはさんだ水田に調査地はある。水田の標高は9.97mを測る。水田下2.8mまで掘り下げ、土層の堆積状況をみた。水田下2.2mまでは褐色砂土、暗灰黄色砂質土などの砂層が堆積し、その下に黒褐色粘質土(I)、オリーブ黒色シルト層(II)、オリーブ黒色粘質土(II)、黒色粘質土(IIV)が堆積している。I 層~IV層中に炭化米が少量含まれていた。IV層の下面で溝状遺構や小ピット群が検出された。

遺物の出土量は少なく、縄文土器、須恵器、土師質土器がわずかに出土している。

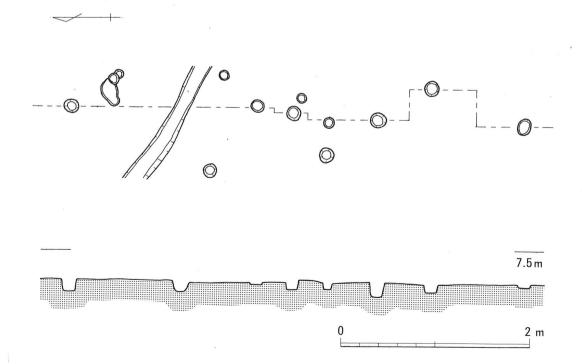
## (1) 検出遺構(第20図)

### SD03 (溝状遺構)

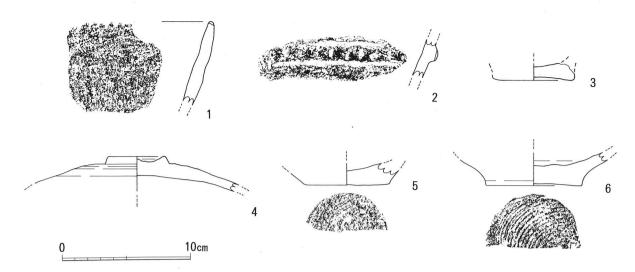
2区の北寄りで南東から北西方向にかけて検出された溝状遺構である。溝はほぼ直線的で、長さ  $1.35\,\mathrm{m}$ 、幅 $0.18\,\mathrm{m}$ 、深さ $11\,\mathrm{cm}$ を測り、断面U字状を呈している。溝の主軸方向は $N60\,\mathrm{cm}$  を測る。 溝内から遺物等は検出されなかった。

## 小ピット群

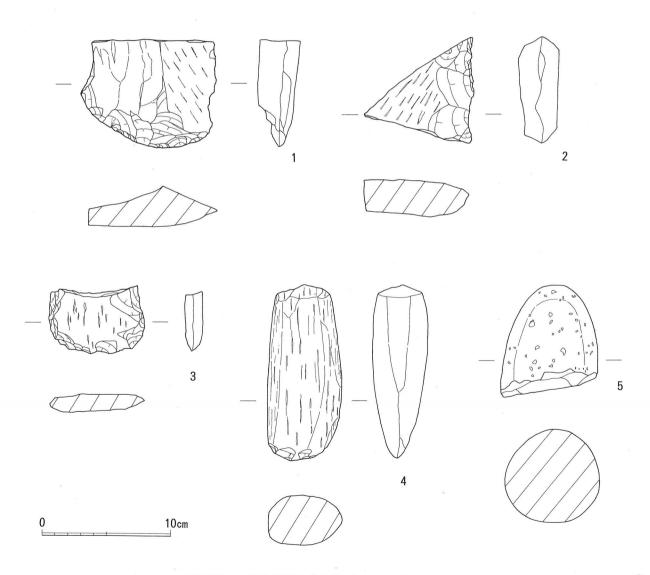
検出された小ピットの数は14穴で、平面形は不整形な1穴を除き、他は円形を呈している。



第20図 2区遺構実測図(1:40)



第21図 2区出土遺物実測図(1:3)①



第22図 2区出土遺物実測図(1:3)②

ピットの径は上端で $10\sim17\,\mathrm{cm}$ 、下端で $7\sim10\,\mathrm{cm}$ 、深さ $2\sim15\,\mathrm{cm}$ を測り、断面はU字形を呈している。ピットの配置が不揃いなため建物や柵列などの遺構を確認することはできなかった。

# (2) 出土遺物(第21図~第22図)

第21図  $1 \sim 3$  は縄文土器である。 1 は外傾する頸部をもつ浅鉢で、口唇部は先細りを呈し、端部に刻目を施す。 2 は突帯文土器の深鉢で、突帯上に浅い刻目を施し、断面は蒲ぼこ形を呈する。 3 は鉢の底部であろうか。いずれも胎土は  $1 \sim 2$  mm大の白色細砂粒を含み、暗褐色を呈する。晩期であろう。 4 は中央がわずかに隆起する輪状つまみをもつ須恵器の蓋である。天井部はヘラケズリ後、回転ナデが施される。 7 世紀後半から 8 世紀前半であろうか。 5 、 6 は土師質土器の底部である。いずれも底部に回転糸切りが認められる。

第22図  $1 \sim 3$  は打製石斧である。いずれも流紋岩製で、1 は刃部のみ、2 は側部の破片、3 は小形品で刃部のみの破片である。4、5 も流紋岩製で、4 は完形の磨製石斧、5 は敲石の欠損品である。

## 3. 3区の調査

1区同様、道路敷地部分で大きな礎石やぎっしりと敷きつめられた中小の石が検出されたため、 調査区域を一部北側へ拡張して調査を行った。調査地は1区の東方120m地点の水田で、標高は8.6 mを測る。

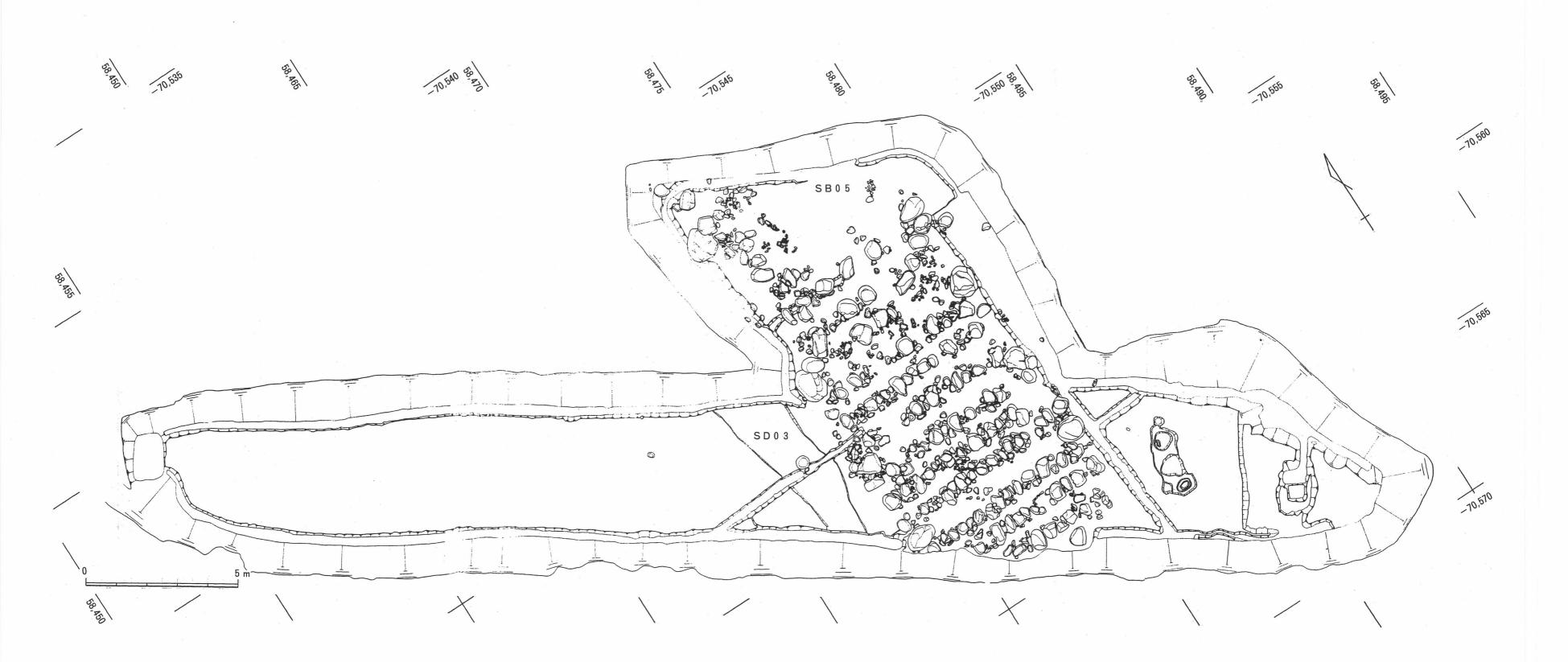
基本的な層序は、耕作土(I)、黄灰色土(II)、灰オリーブ色土(III)、オリーブ灰色土(IV)、褐灰色土(V)、灰色土(VI)、黒色土(VII)の順に堆積している。礎石といっしょに多量の炭化米がVII層から検出された。VII層は水田下1.1m、厚さ20cmで均一に堆積し、標高は上面で7.6mを測る。出土遺物は調査面積が広いわりには少なく、須恵器や土師質土器などが出土している。

検出された遺構は、礎石建物跡1、溝状遺構1である。

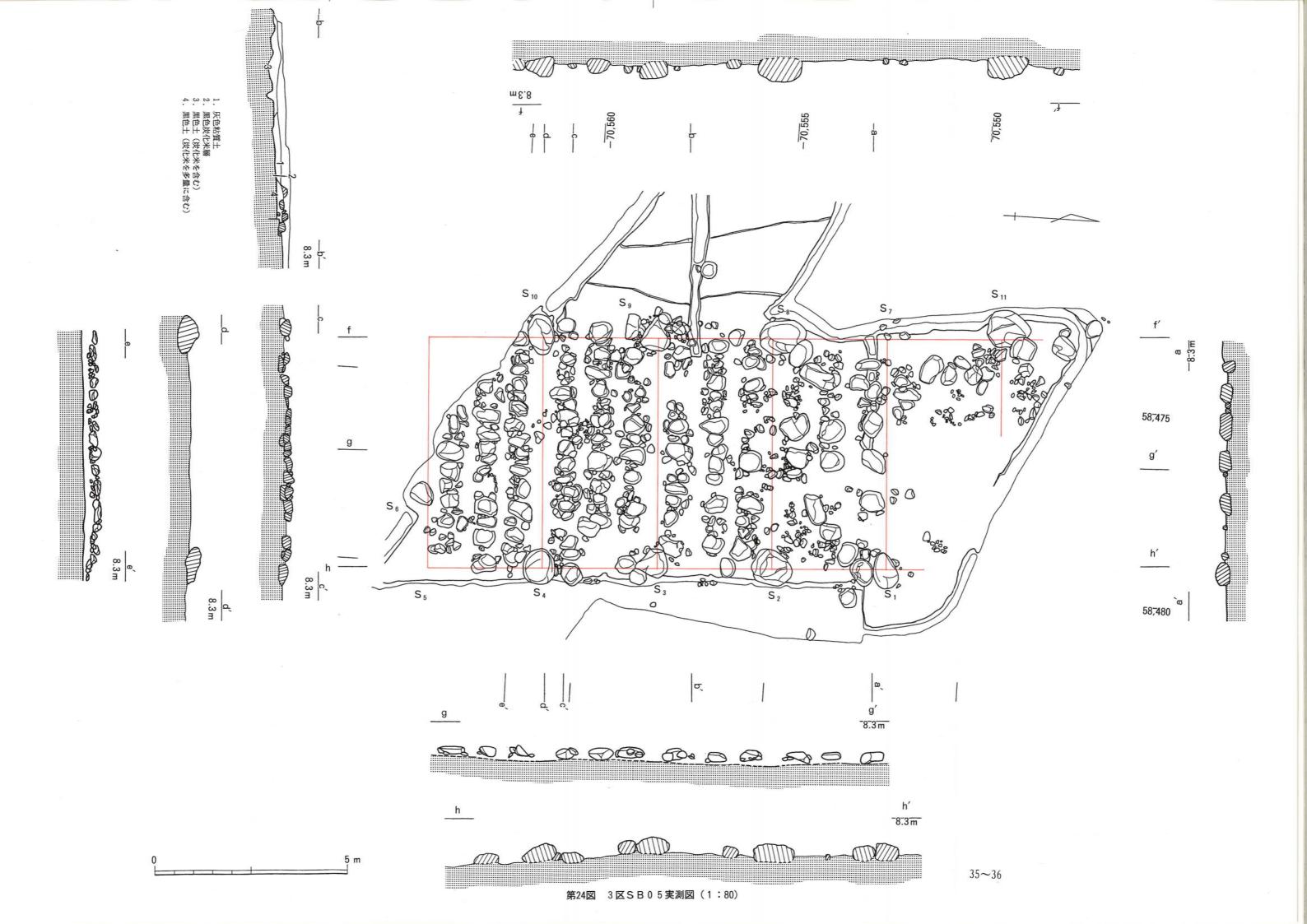
### (1) 検出遺構(第23図~第24図)

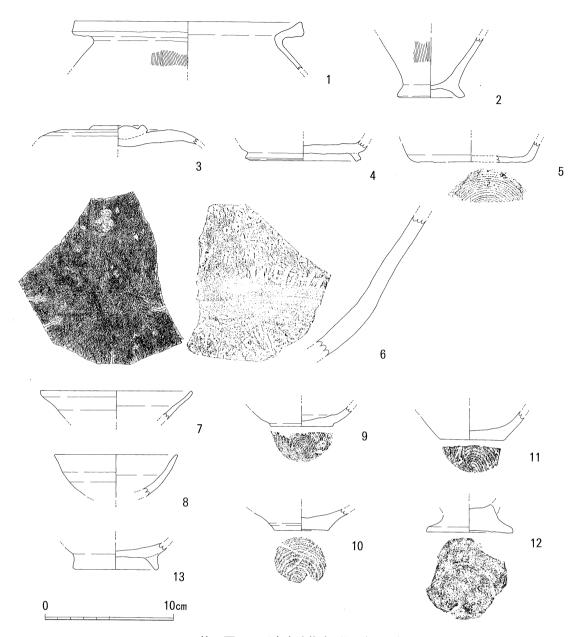
### SB05 (礎石建物)

3区の中央部で検出された桁行 4 間以上(11.88m)、梁行 3 間(5.94m)の南北に細長い礎石建物跡である。北西隅の礎石が失われているが、さらに北側をみると等間隔の位置に大きな礎石があり、周囲にも中小の石がみられることから、北側へは 5 間ないし 6 間以上に及ぶことも考えられる。しかし、別棟の建物の可能性もあるのでここでは一応桁行 4 間として捉えておきたい。柱間寸法は桁行297cm(10尺)等間、梁行は南辺礎石列で208cm(7尺)、178cm(6尺)、208cm(7尺)である。床面積は88.2cmを測り、主軸方向はN 4 °Wとなる。1 区で検出された建物の方向とは 5 °近く異るが、誤差の範囲内と捉えてもよいと思われる。礎石は径55~121cmのもの 8 個と礎石の可能性のあるもの 1 個( $S_{14}$ )が検出された。礎石が失われているものは  $2 \, r$  所( $S_{5}$ 、 $S_{10}$ )、未検出の礎石 3 r 所( $S_{6}$ 、 $S_{8}$ 、 $S_{9}$ )である。礎石はほとんどが円形か楕円形を呈し、隅丸三角形状のものも



第23図 3区遺構平面図(1:100)





第25図 3区出土遺物実測図(1:3)

2個ある。礎石の標高は7.43~7.76mを測る。

この建物は総柱構造ではなく側柱のみの建物であるが、一見してわかるように、その礎石間にも 深行列に沿って、小は径10cm前後、大は径50cm前後の石を直線的に敷並べていることが大きな特徴 である。石列は3 列ずつ12 列あり、中小の石をうまく組み合わせて置かれている。石列の間隔は北から45-30-60(礎石ライン)-40-46-50(礎石ライン)-16-30-70(礎石ライン)-35-38 cmとなり、礎石ラインだけはやや広く開いている。ほとんどの石は礎石より浮いた位置にあり、覆土中に炭化米が多量に検出された。このような遺構は全国的に例がないため建物構造を具体的に知ることができないが、炭化米が多量に出土することから穀物を貯蔵した建物であることは間違いないところである。

建物の西側には西辺礎石列から西へ1mのところでSD04(溝状遺構)が検出された。SB0

5と同時期と考えられる。

### SD04 (溝状遺構)

3区の中央でSB05の西辺に沿って南北方向に検出された溝状遺構である。北側が広く、南に向かって少しずつ狭まる形状を呈している。検出された溝の長さは5 m、幅は $1.1\sim1.9$ mを測り、深さは15cmと浅く断面U字状を呈している。溝内から多量の炭化米、炭化物が検出された。土層断面からみて、SB05に関係ある溝と考えてもよいであろう。

#### (2) 出土遺物 (第25図)

調査区が広いわりには出土した遺物は非常に少ない。その中で図示し得た土器を以下に示す。

第25図1、2は弥生土器である。1は中期の甕で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部はやや肥厚する。調整は外面にハケメが施される。2は底部で、外面はハケメ、内面はナデ調整である。3~6は須恵器である。3は輪状つまみをもつ蓋。5は高台の付かない坏で、底部に回転糸切りを残す。4は低く外傾する高台を有する坏である。6は甕の胴部で、外面は上からタテ方向のタタキ、ヨコ方向のタタキ、不定方向のタタキが施される。須恵器は古墳時代後期末から奈良時代に属すであるう。7~13は土師質土器である。7、8は坏ないし椀の口縁部、9~11は皿あるいは坏の底部、12は脚付き、13は高台を有する坏の底部である。12は底径7.4cmを測り、裾部がかなり広がる形態である。平安時代末から鎌倉時代初期のころの土師質土器であろう。

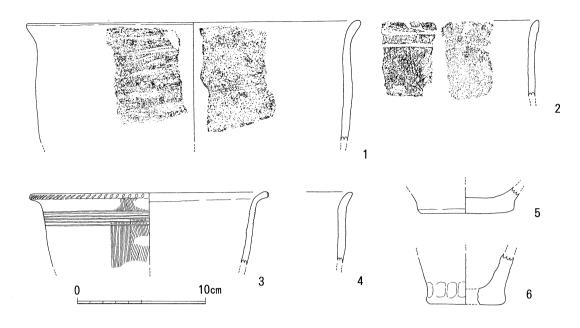
# 4. 4区の調査

1区の東45m、後谷川をはさんだ畑地に調査地はある。調査地は道路敷地部分で、畑地の標高10mを測る。表土下3mまで掘り下げたが、明確な遺構を検出することはできなかった。

基本的な層序は、耕作土(I)、明黄褐色土(II)、黄褐色土(II)、明褐色土(IV)、黄橙色土(V)、暗オリーブ灰色土(VI)、オリーブ褐色土(VII)、暗オリーブ灰色砂質土(VII)、オリーブ黒色土(IX)、暗緑灰色土(X)、オリーブ黒色土(XI)が順に堆積している。IX層から炭化米、炭化物がわずかに出土した。XI層から土師器、XII層から縄文土器が出土した。

### (1) 出土遺物(第26図)

第26図1、2、5は縄文土器である。1は晩期の深鉢で口縁部はゆるく反外し、端部はまるい。2も深鉢で、外面の口縁部近くにヘラによる沈線が2条入る。5は底部である。いずれも1㎜前後の白色細砂粒を含み、暗褐色を呈する。3、4、6は弥生土器である。3は前期の甕で、口縁部は強く外反する。端部に刻目が施される。外面はハケメ調整の後、口縁部近くにヘラによる沈線が6条施される。4も甕と思われるが、調整は不明である。6は底部である。いずれも3㎜大の白色砂粒を含み、淡褐色を呈する。



第26図 4区出土遺物実測図(1:3)

## 5. 5区の調査

調査区は 1 区の南方48mの地点の畑地にあり、標高10.4mを測る。西側は後谷丘陵のすぐ裾野に達する。ここは第 1 次調査(1 区の調査)で電気探査を行ったところ、高い抵抗値を示すデータが得られたところである。

基本的な層序は、耕作土(I)、灰色土(II)、暗青灰色土(III)、暗オリーブ灰色土(IV)、暗緑灰色土(V・VI)、暗灰色土(VII)、灰色土(VIII)、茶褐色(IX)の順に堆積している。VIII層からは少量の炭化米と礎石が検出され、柱穴や小ピットがIX層から検出された。IX層より下は流木まじりの砂礫層にあたり、かつては氾濫源であったことを窺わせる。遺物の出土量は少なく、弥生土器、須恵器、土師質土器が若干出土した。

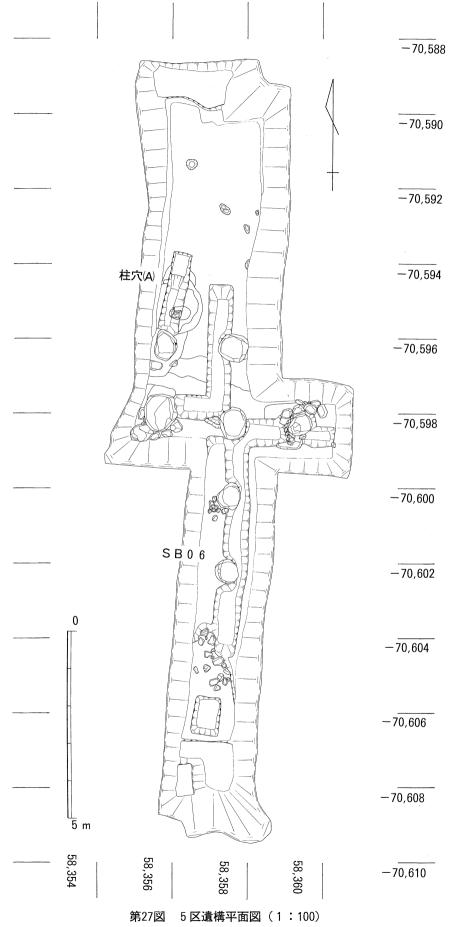
検出された遺構は、礎石建物跡1、柱穴1、小ピット2である。

### (1) 検出遺構(第27図~第29図)

### SB06 (礎石建物)

5区の中央で検出された総柱構造の礎石建物跡である。検出された礎石は7個であるが、簡易貫入試験によって周囲の未調査地も礎石の有無を確認した。さらに後述する7区検出の礎石(A)を確認したことによって、桁行4間(7.72m)、梁行3間(6.24m)の東西棟であることが判明した。柱間寸法は桁行193cm(6.5尺)、梁行208cm(7尺)である。床面積は48.2cmを測り、主軸方向はN45°Eとなる。

礎石は径53~100cmで大半は円または楕円形を呈している。ほとんどの礎石は上面を平らにするが、 $S_1$ 、 $S_4$ 、 $S_5$  は東側に傾いた状態で検出された。 $S_1$ 、 $S_7$  は多くの根石をめぐらすが、 $S_2$ 、 $S_3$ 、 $S_5$  は全く根石はなかった。周囲から炭化米が多く出土したが、礎石が焼けた痕跡は認められなかった。

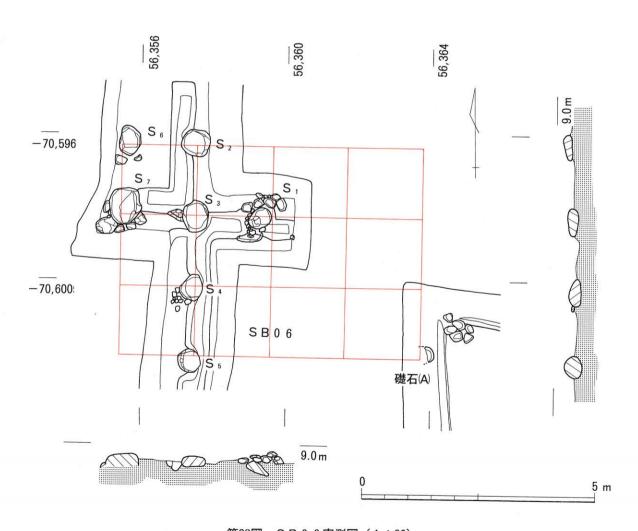


# 柱穴(A)

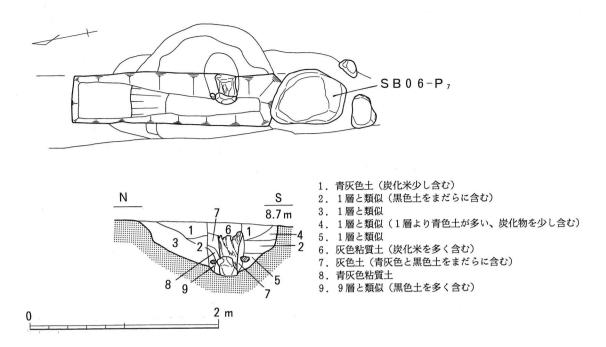
SB06のS $_6$  の北側に接して径150cmの掘り方をもつ柱穴(A)を検出した。掘り方の中で長さ45cm、径20cmの柱根が検出され、柱根の上部には灰色粘質土が堆積し、この中に多くの炭化米が出土した。掘り方内の埋土は炭化米を含んだ青灰色土や、黒色土を少し含んだ青灰色土がすり鉢状に堆積していた。柱根の底には径20cmの石が敷かれていた。この柱穴は他に対応するものが検出されていないが、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。

## (2) 出土遺物 (第30図)

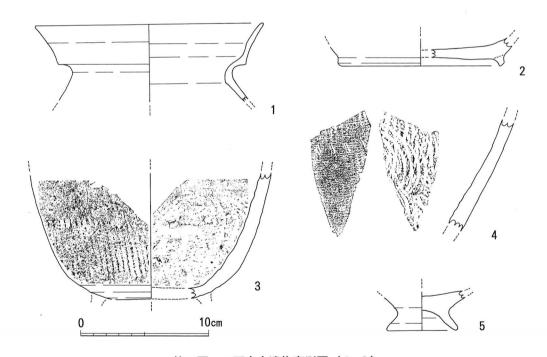
第30図1は弥生時代終末期の甕である。複合口縁の端部は鋭り気味である。2~4は須恵器である。2は高台を有する坏で、高台は低くやや外傾する。3は壺の胴部であろうか、胴下半部の外面にタタキが、内面に同心円当具痕が認められる。底部には高台がつく。2、3は奈良時代前半に属すであろう。4は甕胴部の破片であろうか、外面に刺突文が1条入る。5は土師質土器の高台を有する坏で、高台は「ハ」の字状に開く。



第28図 SB06実測図(1:80)



第29図 柱穴(A)実測図(1:40)



第30図 5区出土遺物実測図(1:3)

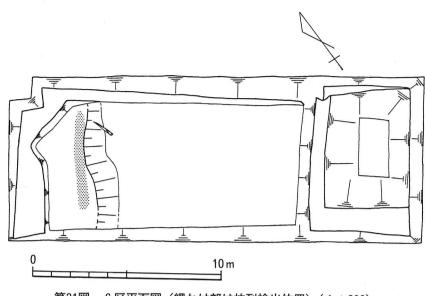
# 6. 6区の調査

調査地は後谷公民館南側の標高10.7mの水田に位置し、5区の南方90mの距離にあたる。このあたりは「後谷」の中央部に位置し、谷筋が南東方向と南西方向に分かれる分岐点にあたる。

土層の堆積状況をみると、耕作土(I-①,②)、攪乱土(II-③)、土地改良土(II-④,⑤,⑥)、自然堆積層(粘質土層)(IV-⑦,⑧,⑨,⑩,⑪,⑫,③)、自然堆積層(IV-⑪層より下層)(V-⑩,⑤)、溝状の浅い落ち込み(VI-⑥,⑪,⑧)、溝状の落ち込み(VI-⑩,②)、礫層

の上層(WII-②、②)、礫層(短期間)(IX-②、②)、遺構面下層(X-②、③、②、②、②、②、②、②、②、②、②、②、②、②、②、公にIV-⑦層より下層は土砂くずれや洪水による氾濫などによる自然堆積層が幾層も重なり合っている。こうした中でI-②、III-⑤層から須恵器、IV-⑦、⑨、X-②、②から弥生土器が

出土した。IV-⑦層の上面



第31図 6区平面図(網かけ部は杭列検出位置)(1:200)

の標高は10m、V-26層の上面の標高は9.5mを測る。

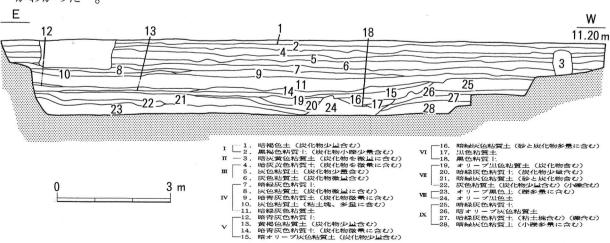
旧地形は調査区の西端から東へ4m寄ったところで、60cm以上の段差をもって東側が低く落ち込む地形となっている。この段の上端部で杭列遺構が南北方向に検出された。

### (1) 検出遺構(第31図~第33図)

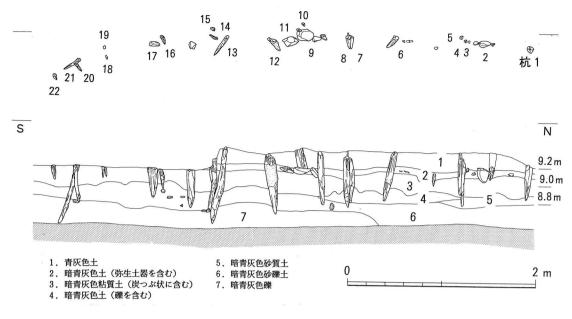
#### 杭列遺構

杭列は調査区の西寄りで、地形が段状に高くなる部分の端で南北方向に向かって20本が検出された。おそらく南北方向にさらに杭列が延びるものと思われる。杭は丸杭と角杭で構成され、樹皮が付いたものもある。杭の長さは $11\sim86$ cm、太さは $2\sim12$ cmを測り上部が欠損したものもある。杭先はほとんどが尖らしてあり、杭頭の標高は $9.13\sim9.41$ m、杭先は $8.56\sim9.17$ mを測る。杭列は青灰色土層から打ち込まれたものと思われ、この層と上層から多くの弥生土器が出土した。

杭の樹種は鑑定の結果、杭7はスダジイ、杭9、12、18はサクラ属、杭22はミズキ属であることがわかった $^{(7)}$ 。



第32図 6区南壁土層図(1:100)

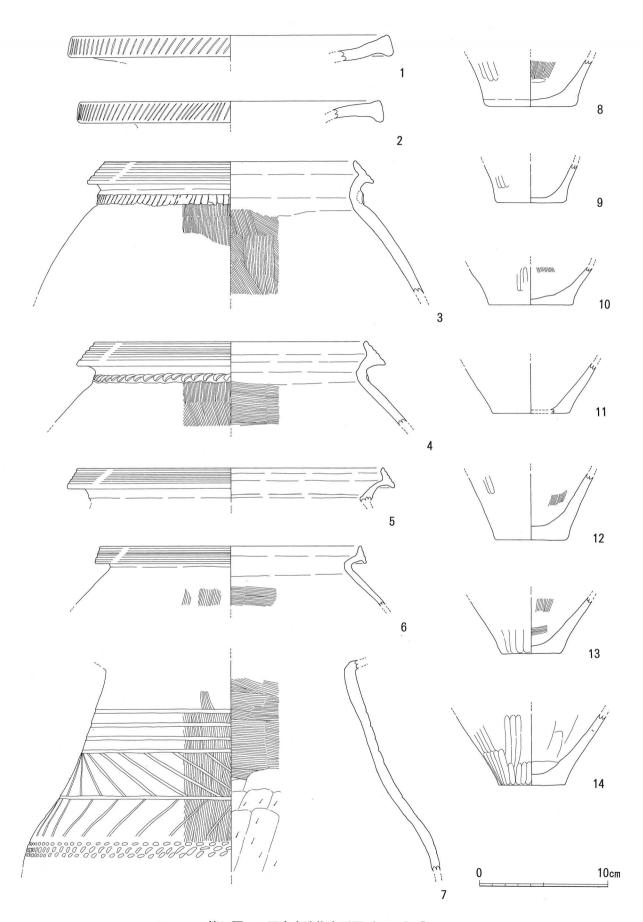


第33図 杭列遺構実測図(1:40)

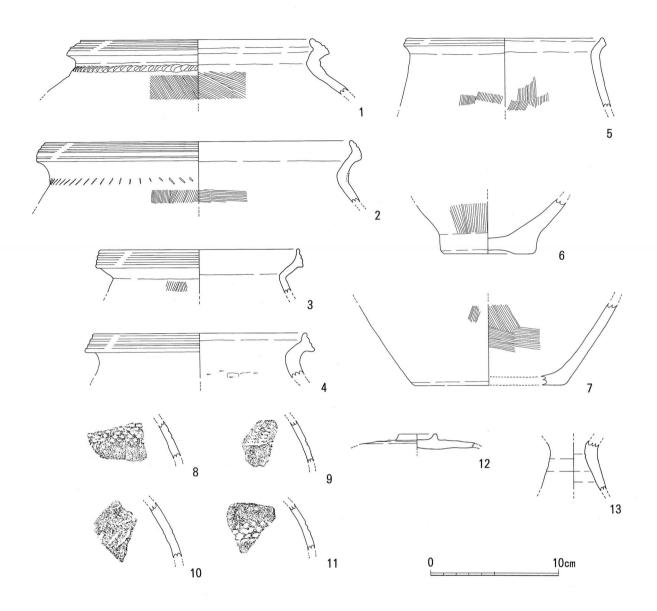
### (2) 出土遺物(第34図~第35図)

第34図・第35図1~11は弥生土器である。第34図1、2は壺形土器の口縁部である。逆「ハ」の 字状に開く口縁部で、端部はやや肥厚する。口縁部外面にヘラによる斜行文が施される。第34図3 ~6、第35図1~5は甕形土器の口縁部から肩部にかけてのものである。第34図3~6の口縁部は 「く」の字状に屈曲し、端部が上下に拡張するもので、外面に 4 条の凹線文が施される。 3 、 4 の 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらす。調整は内外面ともにハケメが施される。第32図1 ~3はゆるく外反する頸部をもち、口縁端部は主として上方に拡張する。外面には3~4条の凹線 文が入り、頸部には指頭圧痕を施すもの(1)と刺突文が施されるもの(2)がある。調整は内外 面ともハケメが施される。3、4は屈曲する口縁部がやや拡張し、外面に凹線文が3条施される。 4は内面にケズリが施される。5の口縁部はゆるく外反し、端部は拡張せず、逆に器壁がやや薄め になる。外面に1条の浅い凹線文が入る。内外面ともハケメ調整が施される。第35図8~11は壺形 土器か、甕形土器の胴部である。8は外面に6段以上の粒状の刺突文が施され、内外面はハケメ調 整が施される。9は外面に6段の刺突文が施される。10の外面は刺突文が斜行状に施され、内外面 にハケメが施される。11は外面にD字状の刺突文が4段入るものである。7は壺形土器の頸部から 胴部にかけてのものである。頸部はやや内傾気味に長く立ち上がり、そこへ凹線文が5条入る。最 下段の凹線を軸として上下に羽状文様に斜めに凹線が入る。胴部との境あたりに米粒状の刺突文を 3段入れる。調整は外面がハケメ、内面の頸部はハケメ、胴部はケズリが施される。第34図8~14、 第35図6、7は底部である。8~14は甕の底部と考えられる。外面はヘラミガキ、内面はハケメ (8、10、12、13)、ケズリ(14)が認められる。6は大形器種の底部で内外面ハケメが施される。 7 は上げ底気味の壺底部であろうか。弥生土器はいずれも中期末から後期初頭に入るものと思われ る。

第35図12、13は須恵器である。12は輪状つまみを有する蓋、13は高坏の筒部である。



第34図 6区出土遺物実測図(1:3)①



第35図 6区出土遺物実測図(1:3)②

# 7. 7区の調査

調査地は5区の東側に隣接する標高10mの水田である。ここは第2次調査(5区の調査)で電気 探査を行い、東西方向に高い抵抗値を示す部分があったところである。

基本的な層序は、耕作土(I)、灰色粘質土(II) [①砂少量含む(床土)、②砂少量含む(イ. 粒荒い、ロ. 粒細かい、ハ. ロより少量、ニ. 炭化物少量含む)、③やや粘質、④白いつぶ状のものブロック状に入る、⑤炭化米少量含む]、緑灰色粘質土(III)の順に堆積し、II -⑤層から礎石が検出された。II -⑤層は水田下1.3m、15cmの厚さで均一に堆積する。標高は上面で8.7mを測る。調査面積が広いため出土した遺物はかなり多く、縄文土器、土師器、須恵器、石器、柱根1 (カヤ)等がある。

検出された遺構は、礎石2、溝状遺構1、土坑3、柵列1、小ピット多数である。

### (1) 検出遺構(第37図~第42図)

#### 礎石(A)

L字状の調査区のちょうど角、北西隅の西壁面で検出された。礎石は径40cm、上面の標高8.7mを測り、根石はなく丸みのある礎石である。5区で検出されたSB06は簡易貫入試験によって、4×3間の東西棟であることが確認されたが、本礎石は位置関係からみてSB06の南東隅の礎石にあたるものと考えられる。

### 礎石(B)

L字状の調査区の北壁沿いで多くの根石とともに検出された。礎石は径60cm、標高8.6mを測る。 上面は平坦で比較的角ばった礎石である。

これ以外にも礎石になりそうな石が多く検出されたが、すべて堆積土中に浮いた状態であったため、定位置と考えられる礎石はないと判断した。従って、本礎石は新たに存在すると思われるSB 0 7 の南西隅にあたる礎石ではないかと考えられる。SB 0 6 とSB 0 7 との空間距離は7.8mを測る。

#### SD05 (溝状遺構)

SB06の南東隅にあたる礎石(A)から南へ12mの位置で東西方向に走る溝状遺構が検出された。溝の長さは2.83m、幅は1.85m、下端幅は0.82m、深さは76cmを測り、断面U字状を呈する深い溝である。溝は後述するSA01(柵列)と同じ青灰色砂質土から掘り込まれ、溝内には暗緑灰色粘質土、灰色粘質土などが互層となって堆積している。ほとんどの層に小礫が多数含まれている。埋土の上方で炭化米が少し、中ほどで土師器片(第36図1)が出土した。主軸方向はN0°Eとなる。

## SA01 (柵列)

SD05の北2.7mの位置で検出された柵列である。柱穴は東西方向に3穴(2間分)が検出された。掘り方は径48~60㎝を測り、柱間寸法は135㎝(4.5尺)等間を測る。1列のみの検出で対応する柱列が認められないため柵列とみられる。主軸方向はN2°Eを測る。

### SK01 (土坑)

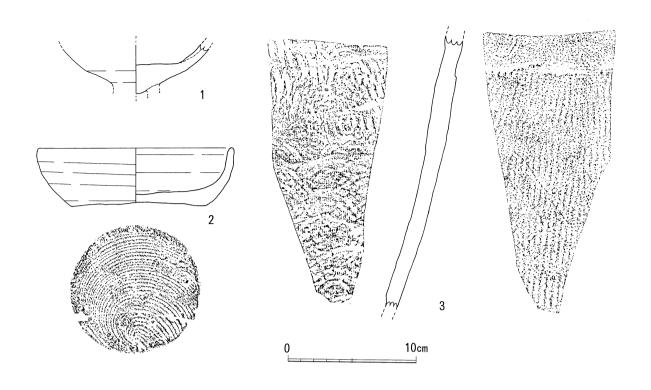
SD05の南3.8mの位置で検出された土坑である。北北東から南南西方向に長く延びるが、北側の端は不明である。土坑の長さは205cm、幅は38cmを測り、深さ10cmと浅い土坑である。溝内にはこぶし大の礫がぎっしり敷かれ、須恵器の完形の坏(第36図2)が1点出土した。

#### SK02 (土坑)

SK01の北に近接して検出された土坑である。やはり北北東から南南西方向へ延びるが、中央部で「く」の字状に曲がり、南側はやや狭くなる。土坑の長さは $140\,\mathrm{cm}$ 、幅は $20\sim35\,\mathrm{cm}$ を測り、深さ $10\,\mathrm{cm}$ と浅い土坑である。遺物は出土していない。

### SK03 (土坑)

SB07の礎石(B)の南西で検出された土坑である。径1.7~2.4m、深さ31㎝のやや楕円形を呈する。土坑内には暗緑灰色粘質土の上に暗オリーブ灰色粘質土が堆積し、この層の中に炭化米と炭化物が多量に含まれていた。溝底で須恵器の甕片(第36図3)が1点出土した。



第36図 SD05(1)、SK01(2)、SK03(3)出土遺物実測図(1:3)

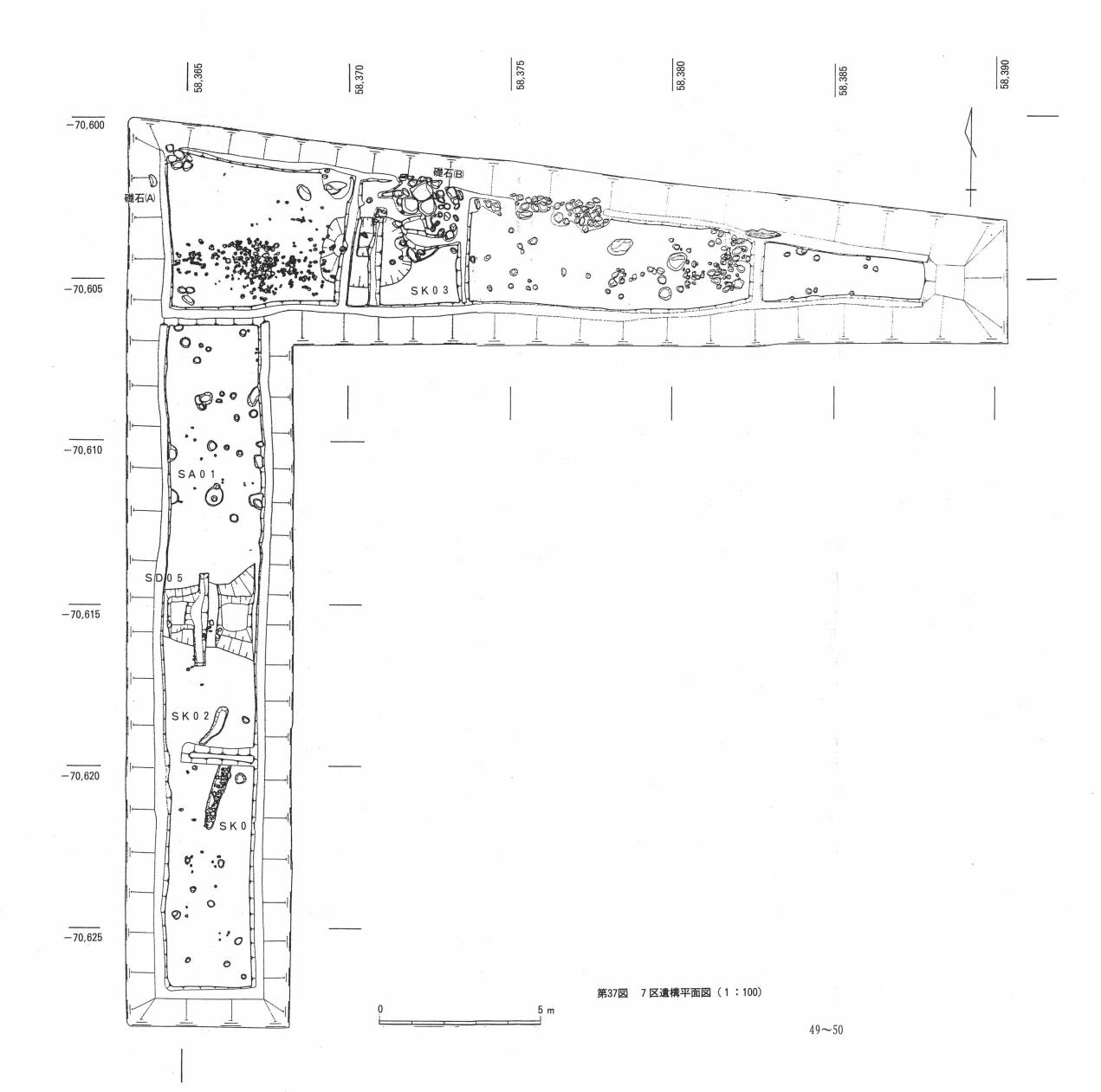
# (2) 出土遺物(第43図~第44図)

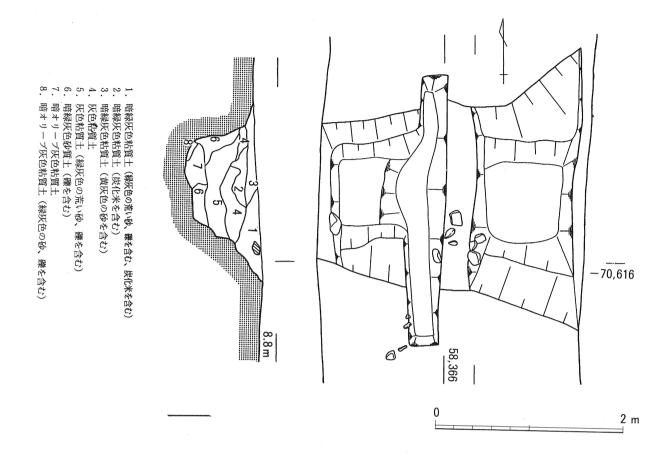
7区は多くの遺物が出土したが、遺構から出土したSD05出土の土師器片、SK01出土の須恵器坏、SK03出土の須恵器甕片以外は、堆積土中から出土した遺物である。

第43図1は縄文時代晩期の突帯文土器で、口縁部は先細りを呈し、直下に突帯が貼り付く。突帯上に浅い刻目が入り、断面は蒲ぼこ形を呈する。2~5は弥生土器である。2は前期の甕で、口縁部近くで強く外反し、端部は丸い。内外面ともにハケメ調整が施される。3は中期の壺で、口縁部が逆「ハ」の字状に開き、端部は平坦をなす。外面に2条の平行沈線文が入る。4、5は底部である。

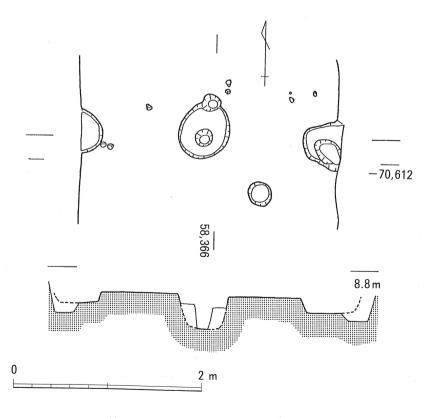
6、7は古墳時代中期の土師器である。6は高坏、7は低脚坏である。8~21は古墳時代後期末から平安時代の須恵器である。8~12は蓋である。8は天井部から口縁部にかけて丸みを帯び、境に浅く凹線を入れる。後期の後半であろう。9は輪状つまみをつけた蓋で、口縁端部は垂下する。10は低い輪状つまみがつく。11、12は平らな天井部のつまみは失われ、口縁端部はあまり垂下しない。奈良時代後半から平安時代前半頃であろう。13~15は回転糸切りを残す皿である。13の口縁部は短く外傾する14は13より外方に口縁部が開く。16は低い高台を有する坏、17は低い高台を有する皿である。13~17は奈良時代後半に属するものであろう。18は壺の底部と考えられる。19は「く」の字状の口縁をもつ甕で、頸部に浅い沈線が入る。肩部外面にヘラ描きがある。20、21は甕の破片で、20は上から沈線文2条、波状文9条、沈線文3条、21は沈線文2条、波状文6条、沈線文3条が施される。

22~25は土師質土器の底部である。22~24は皿あるいは坏、25は「ハ」の字状の高台を有する坏

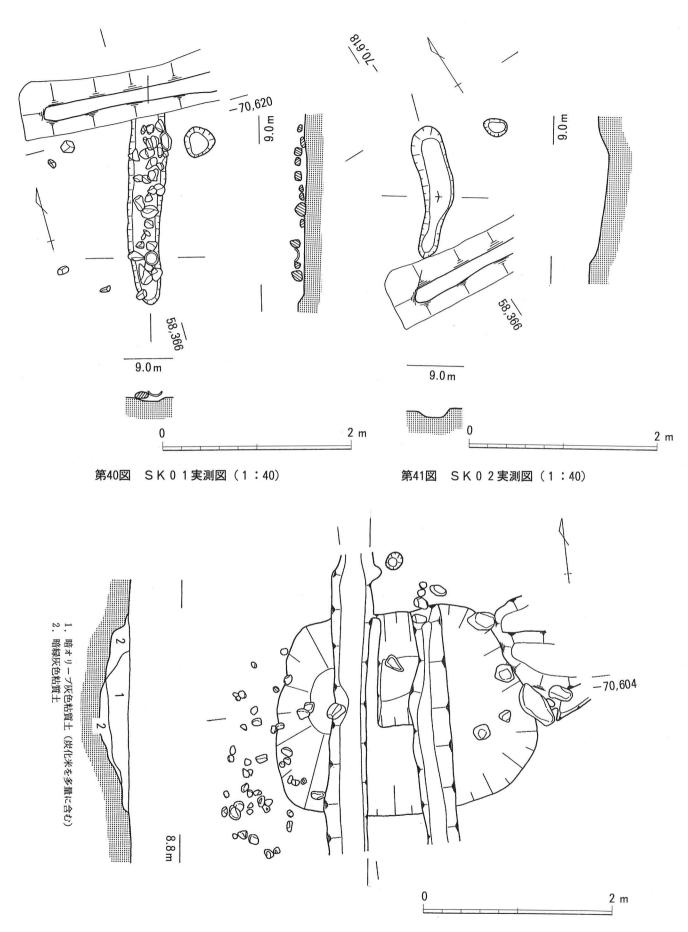




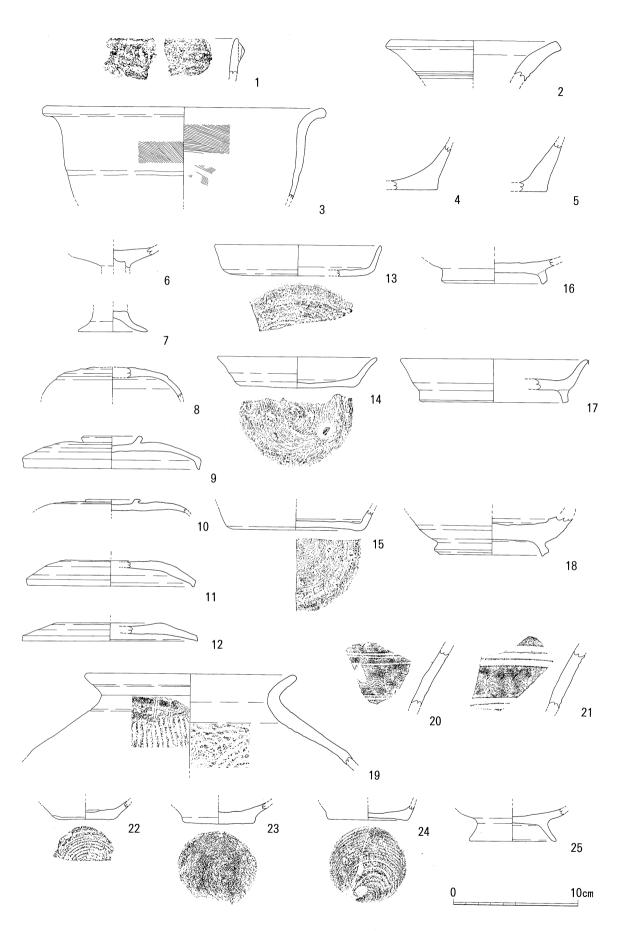
第38図 SD05実測図(1:40)



第39図 SA01実測図(1:40)



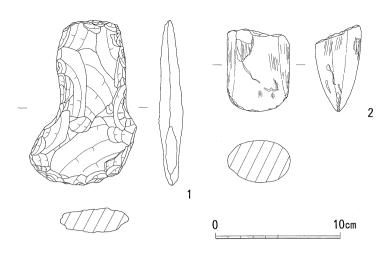
第42図 SK03実測図(1:40)



第43図 7区出土遺物実測図(1:3)①

である。

第44図1は打製石斧、2は 磨製石斧である。いずれも流 紋岩製で、1は長さ16cm、重 さ540gの大形品である。2 は刃部のみの破片で、重さ425 gを測る。



第44図 7区出土遺物実測図(1:3)②

# 8. 8区の調査

調査地は7区の東方75m地点の水田で、標高9.3mを測る。7区で検出されたSD05は、東西方向に延びることがわかっている。この溝が東側でも確認されれば、建物群の南側を区画する溝となるのではないかとして調査を行った。

基本的な層序は、耕作土(I)、灰褐色土(II)、灰色粘質土(III)、茶褐色土(IV)、暗灰色粘質土(V)、灰黒色土(VI)、灰色粘質土(VII)、暗灰色粘質土(VIII)、暗緑色砂礫土(IX)の順に堆積し、遺構面はIX層の上面になる。IX層は水田下1.3m、標高は7.5mを測る。出土した遺物はごくわずかで縄文土器、須恵器、土師質土器がある。

検出された遺構は、溝状遺構3、小ピット数穴である。

### (1) 検出遺構(第45図~第47図)

# SD06 (溝状遺構)

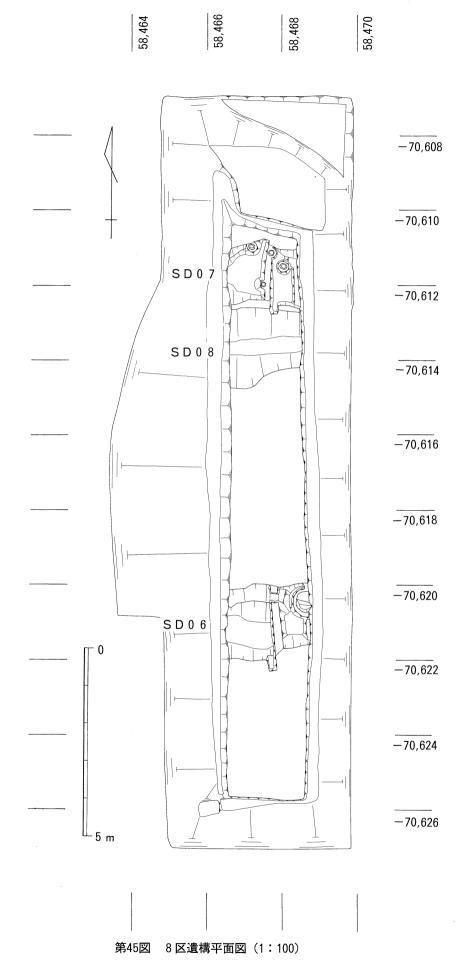
調査区の南寄りで検出された東西に走る溝状遺構である。溝の長さは2.05m、幅は上端2.10m、下端0.7m、深さ45cmを測る。溝底はU字状を呈し、斜面は南側が深く、北側はゆるい傾斜をもつ。 溝内の埋土は青灰色砂礫層が堆積し、遺物は出土していない。溝の主軸方向はN8°Eとなる。

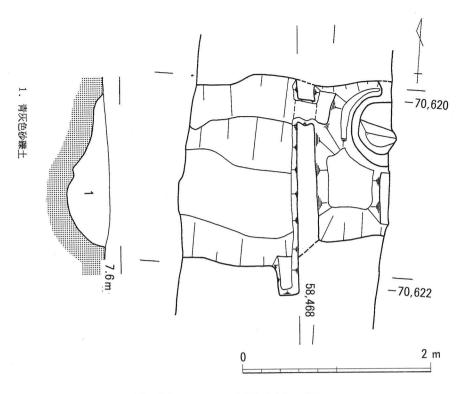
### SD07 (溝状遺構)

調査区の北端で検出された東西に走る溝状遺構である。溝の長さは1.9m、幅は上端1.5m、下端0.75m、深さ38cmを測り、溝底はやや平らで、南側斜面の急傾斜で北側へ向かってゆるく傾斜する。溝内の埋土はSD06と同様青灰色砂礫層が堆積し、遺物は出土していない。溝の主軸方向はN1°Wとなる。SD06との空間距離は7.5mを測る。

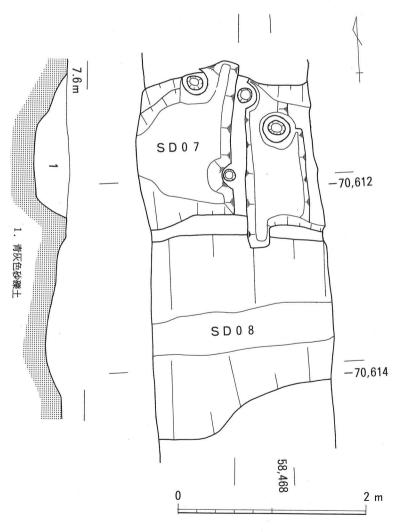
#### SD08 (溝状遺構)

SD07の南側50㎝ほどで検出された浅い溝状遺構である。溝の長さは1.93m、幅は上端1.8m、下端0.4m、深さ35㎝を測る。溝内の埋土は黒色土で、SD06とSD07の埋土とは様相を異にしている。遺物は出土していない。





第46図 SD06実測図(1:40)



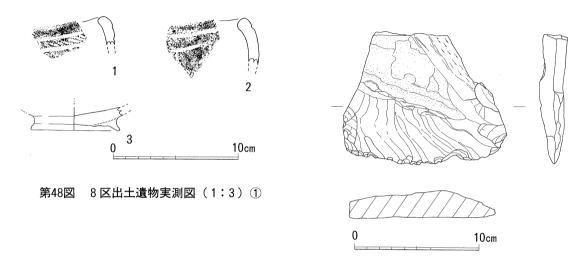
第47図 SD07・SD08実測図(1:40)

## (2) 出土遺物(第48図~第49図)

第48図1、2 は磨消縄文を施す後期前葉の縄文土器である  $^{(8)}$ 。 1、2 とも深鉢で同一個体であると思われる。口縁部下に沈線を5.5mmの幅で2条施し、その中を縄文が充填する。ともに、沈線が次第に右上がりになるところから波状口縁になるであろう。内面は、横位に細かいミガキが施される。安来市島田黒谷  $\mathbf{I}$  遺跡  $^{(9)}$  や湖陵町奥ノ谷遺跡  $^{(10)}$  に出土例があり福田K  $\mathbf{2}$  式第1段階に位置づけられている。

3は土師質土器で、高台を有する坏である。

第49図4は打製石斧である。刃部のみの大形品で、刃こぼれが著しい。流紋岩製である。



第49図 8区出土遺物実測図(1:3)②

#### 註

- (1) 三宅博士氏(安来市教育委員会)のご教示による。
- (2) 光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)の鑑定による。
- (3) 島根県教育委員会『石台遺跡』1986年
- (4) 宍道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』1983年
- (5) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について 型式分類と編年を中心として」(『九州 歴史資料館研究論集 4 』九州歴史資料館1978年)
- (6) 石材については、伊藤瑞章氏(斐川砿業)の鑑定による。
- (7) (2)に同じ。
- (8) 磨消縄文については、野坂俊之氏(湖陵町教育委員会)のご教示を得た。
- (9) 島根県教育委員会『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷 I 遺跡』1995年
- (III) 湖陵町教育委員会『一般廃棄物処理施設管理道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 奥ノ谷遺跡』 1995年

#### 参考文献

- ・宍道正年「島根県の縄文土器の研究 ― 編年を中心として」(『松江考古第3号』松江考古学談話会1980年)
- ・島根県教育委員会『石台遺跡Ⅱ』1993年
- ・島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1987年
- ・広江耕史・片岡詩子「島根県における古代末~中世にかけての須恵器について」(『中近世土器の基礎研究IV』 日本中世土器研究会1988年)
- 島根県教育委員会「天満谷遺跡」(『北松江幹線新設工事 松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年

表 2 礎石計測表(1)

建物番号	区	礎石番号	径(cm)(短~長)	平面形	根 石	備考
SB01	1	S <sub>1</sub> ·	75 <b>~</b> 85	半円		標高8.15 m
	1	S 2	90~92	隅丸三角	11以上	8.19
	1	S <sub>3</sub>	70~103	楕円	7以上	8.22
	1	S 4	77~95	楕円	5以上	8.11
	1	S 5			1以上	
	1	S 6	73~80	方		8.27
	1	S 7	65~105	楕円	10以上	8.19
	1	S <sub>8</sub>		_	2以上	
	1	S 9	70 <b>~</b> 135	楕円	6以上	8.30
	1	S <sub>10</sub>	68~112	楕円	13以上	8.11
SB02	1	S <sub>1</sub>	99~125	楕円	15以上	8.93
	1	S 2	109~140	楕円	11以上	8.97
	1	S <sub>3</sub>	100~148	楕円	5以上	8.97
	1	S 4	90~116	楕円	5以上	8.90
	1	S 5	83~87	楕円	3以上	8.94
	1	S 6	90~124	楕円	2以上	9.00
	1	S 7	_		4以上	
	1	S <sub>8</sub>	129~138	円	3以上	9.04
	1	S 9	113~114	隅丸方	?	8.97
	1	S <sub>10</sub>	96~120	楕円	10以上	9.01
	1	S <sub>11</sub>	45~76	楕円	9以上	8.96
	1	S <sub>12</sub>	61~80	円?	3以上	9.01
	1	S <sub>13</sub>		_		
	1	S <sub>14</sub>			3以上	
	1	S <sub>15</sub>	50~69	隅丸三角	4以上	8.92
	1	S <sub>16</sub>			10以上	
	1	S <sub>17</sub>	54~64	隅丸三角	3以上	9.02
	1	S <sub>18</sub>	_		10以上	
	1	S <sub>19</sub>	86~87	隅丸方	13以上	9.07
	1	S <sub>20</sub>	64~90	円	8以上	8.99
	1	S <sub>21</sub>	79~86	楕円	16以上	9.03
	1	S <sub>22</sub>	65~68	楕円	6以上	9.05

表 3 礎石計測表(2)

建物番号	区	番号	径 (cm)	形	根石	備考
SB05	3	S <sub>1</sub>	55 <b>~</b> 72	円	?	標高7.67 m
	3	$S_2$	88~107	円	?	7.74
	3	S <sub>3</sub>	73~77	方	3以上	7.76
	3	S 4	80~95	円	3以上	7.73
	3	S 5				
	3	S 6	55~60	隅丸三角	?	7.62
	3	S 7			4 以上	
	3	S <sub>8</sub>	82~121	楕円	4以上	7.71
	3	S 9	70~90	隅丸三角	8以上	7.43
	3	S <sub>10</sub>	68~107	楕円	4以上	7.64
	3	S <sub>11</sub>	95 <b>~</b> 115	楕円	?	7.62 礎石か
SB06	5	$S_1$	53 <b>~</b> 66	楕円	17以上	8.45
	5	S 2	72 <b>~</b> 75	円		8.61
	5	S 3	71~83	円		8.61
	5	S 4	60 <b>~</b> 74	楕円	9以上	8.50
	5	S 5	60~65	円		8.63
	5	S 6	60~80	楕円	2以上	8.66
	5	S 7	90~100	楕円	7以上	8.69
礎石(A)	7		19以上~39	円		SB06 8.60
礎石(B)	7		55 <b>~</b> 65	隅丸方	17以上	SB07 8.63

表4 柱穴計測表

		17-44	掘り	方		柱痕跡	柱 根	
建物番号	区	柱穴 番号	長さ(南北×東西) 又は径 (cm)	深 さ (cm)	平面形	径 (cm)	径 (cm)	備考
SB03	1	P 1	$146 \times 132$		方	60	_	
	1	P 2	99×110		方	60	18	
	1	P 3	$107 \times 105$		方	50		
	1	P 4	108× 80以上	49	方?			
	1	P 5	107× 51以上	58	方?	55		
	1	P 6	118×124以上	57	長方	65 ?	50	
	1	P 7	105× 68以上	57	方?	50	_	
NAME OF THE PARTY	1	P 8	83以上×54以上	71	方?	50		
	1	Р9	$93 \times 142$		長方	60	30	
	1	P <sub>10</sub>	$130 \times 141$		不整方	55	25	
SB04	1	P 1	—×20以上	66		_		
	1	P 2	$147 \times 153$	78				
	1	Рз	44以上×一	80			11以上	
	1	P 4	116×—	70		42		
	1	P 5	90以上×—	66			8以上	
	1	P 6	$-\times171$	76		58	_	
	1	P 7	—×20以上	80				
柱穴(A)	5		146	57	円	37	20	

# 表 5 出土遺物観察表(1)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土•焼成•色調	備考
第14図	14 10	1 ⊠ SB04-P <sub>5</sub>	須恵	壺か	底径 12.6	底部なら胴部によばてみみるを・夢び低い胴部を見るとと、 はあるを である という はい	胎土:1.5mm以下の砂粒を少し 含む。 焼成:良好、色調:暗灰色	底部内面に自 然釉付着
第36図 1	24 35-1	7 ⊠ SD05	土師	高坏		坏部はやや丸味をおびる 調整不明	胎土:2mm以下の砂粒を少し含 た。 焼成:良好、色調:灰褐色	
第36図 2	24 35-2	7⊠ SK01	須恵	坏	口径 12.6 器高 3.55	口縁部は内湾気味 底部外面: 回転糸切り、底部内 面: ナデ、他の内外面: 回転ナデ	胎土: 4 m以下の砂粒を少し含 洗成:良好、色調:黄灰色	
第36図 3	24 35-3	7区 SK03	須恵	甕		外面: 平行タタキ 内面: 同心円当具痕	胎士:1mm以下の砂粒を少し含む。 焼成:良好、色調:暗灰色、外 面に自然釉付着	

以上、遺構に伴う遺物

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第15図 1	15 11– 1	1区 サブトレンチ	縄文	深鉢	口径 21.5	突帯文土器、刻目 外血:条痕 内面:ナデ	胎土:1~3mm大の白色細砂粒 を多く合む 焼成:良好、色調:褐色	
第15図 2	15 11-2	1区 整地層及び サプトレンチ	縄文	深鉢	口径 24.7	胴部外面:ケズリ後ミガキ 内面:ミガキ	胎士:1~3mm大の白色細砂粒 を多く含む 焼成:良好、色調:暗褐色	
第15図 3	15 11-3	1 <u>区</u> 整地層及び サブトレンチ	縄文	鉢		口縁部を体部との境は明瞭に屈曲 頸部外面:ミガキ 外面胴部:ケズリ後ミガキ	胎士:1~3 mm大の白色細砂粒 を多く含む 焼成:良好、色調:暗褐色	
第15図 4	15 11-4	1区 サブトレンチ	縄文	深鉢		突带文土器、刻目	胎土:1 mm大の白色細砂粒を多 含む 焼成:不良、色調:灰白	
第15図 5	15 11-5	1 区 整地層	縄文	深鉢		突帯文土器、刻目	胎士:1~2 mm大の白色細砂粒 を多く含む 焼成:良好、色調:褐色	
第15図 6	15 11-6	1区 整地層及び サブトレンチ	縄文	深鉢		突帯文土器、刻目	胎士:1~3㎜大の白色細砂粒 を多く含む 焼成:やや不良、色調:灰白	
第15図 7	15 11-7	1 区 整地層	須恵	蓋	口径 14.8	口縁端部はかえりが残る 天井部内面:ナデ 他の内外面:回転ナデ	胎土:密、2.5mm以下の砂粒を 少し含む 焼成:良好、色調:暗赤灰色	擬宝珠つまみ か
第15図	15 11-8	1区 3層	須恵	蓋	口径 13.6	口縁端部は垂下 内外面:回転ナデ	胎士:密 焼成:良好、色調:灰色	
第15図 9	15 11– 9	1 区 黒色土層 (4 層)	須恵	蓋	口径17.8	口縁端部は垂下 大井部外面: ヘラケズリ後回転ナデ 天井部内面: ナデ 他の内外面: 回転ナデ	胎土: 3 mm以下の砂粒を多く含 が 焼成:良好、色調:灰色	擬宝珠つまみ か
第15図 10	15 11–10	1区 黒色土及び サブトレンチ	須恵	坏		底部外面: 回転糸切り 底部外面: ナデ 他の内外面: 回転ナデ	胎士:密。 焼成:やや不良、色調:灰色	
第15図 11	15 11–11	1区 SB02整地層	須恵	坏	口径 12.6 器高 3.1	口縁部内面に稜を持つ。 体部内外面: 回転ナデ 底部外面: ナデ	胎士:密、5 mm以下の砂粒を少 しさむ。 焼成:良好、色調:青灰色	
第15図 12	15 11–12	1 区 黒色土層 (4 層)	須恵	高台付 环	底径 9.4	高めの高台 底部内面:ナデ 外面:回転ナデ	胎土: 1 mm以下の砂粒を少し含 党 焼成:普通、色調:暗灰色	
第15図 13	14 11–13	1 区 整地層	須恵	高台付 环	底径 10.4	高台は低く、やや上げ底。 底部外面: 回転糸切り、底部内面 :ナデ、他の内外面: 回転ナデ	胎士:密、2mm以下の砂粒を少 しさむ 焼成:普通、色調:灰色	墨書土器(底 部外面)
第15図 14	15 11–14	1 区 整地層	須恵	Ш	口径 15	口縁部は逆「ハ」の字状に開く 内外面:回転ナデ	胎土: 2 mm以下の砂粒を少し含 が 焼成:良好、色調:暗灰色	
第15図 15	15 11–15	1区 SB02整地層	須恵	Ш	口径17.2	口縁部は短く外反 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:密。 焼成:やや不良、色調:内面は 赤茶色、外面は黄灰色	
第15図 16	15 11–16	1区 黒色土層 (4層)	須恵	<u>高</u> 台付	口径 19.4 底径 12.6 器高 4.95	太い高台、器壁は厚い。 内外面:回転ナデ	胎土: 1 mm以下の砂粒を少し含 む。 焼成:やや不良、色調:黄灰色	転用硯(底部 外面)
第15図 17	15 11–17	1区 SB03整地層	須恵	高台付 盤	底径 25	大型の盤で高台は高い。 底部内面:ナデ 他の内外面:回転ナデ	胎士:密、2mm以下の砂粒を少し合む。 焼成:良好、色調:灰色	
第15図 18	15 11-18	1区 SB02整地層	須恵	高坏	口径 25.2		胎土:密、2 mm以下の砂粒を少し含 焼成:やや不良、色調:外面と天井 部内面は灰白色、他は灰色	
第15図 19	15 11–19	1 区 黒色土層 (4層)	須恵	長頸壺頸部	底径 12.6	頸部内面下半: ヘラケズリ後回転ナデ 他の内外面: 回転ナデ	胎土: 4 mm以下の砂粒を少し含 が 焼成:良好、色調:暗灰色	自然釉うすく 付着
第15図 20	15 11-20	1区 SB02整地層	須恵		口径 14	端部は上方につまみ上げる。 肩部内外面: タタキ 他の内外面: 回転ナデ	胎土:密、2 m以下の砂粒を含 むた焼成:良好 色調:外面は 暗灰色、内面は灰色	外面に自然釉 付着
第15図 21	15 11-21	1区3層	須恵	甕		端部は上下につまみ出す。外面 に波状文4条以上。 内外面:回転ナデ	胎士:密。 焼成:良好、色調:灰色	

# 表 6 出土遺物観察表(2)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備	考
第15図 22	15 11–22	1区 黒色士 (4層)	須恵	甕		上から波状文7条以上、沈線2 条、波状文5条以上。 内外面:回転ナデ	胎士:密。 焼成:良好、色調:灰色		
第15図 23	15 11–23	1区 サブトレンチ	須恵	甕		上から波状文8条以上、沈線3 条、波状文9条以上。 内外面:回転ナデ	胎土:密 焼成:良好、色調:灰色		
第16図 1	16 12-1	1 区 黒色士 (4 層)	土師質	甕	口径 5 器高 1.15	体部は短く外方へ立ち上がる。 底部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰白色	皿形I	
第16図 2	16 12-2	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 6.6 器高 2	体部は内湾気味に立ち上がる。 体部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎士: 1 門以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: にぶい橙色	皿形Ⅱ8	ì
第16図 3	16 12-3	1 区 黒色十 (4 層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 1.7	体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎士:密 焼成:良好、色調:灰白色	皿形Ⅱ8	ì
第16図 4	16 12-4	1 区 黒色士 (4 層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 1.7	体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎土:1 艸以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄白色	皿形Ⅱ᠄	ì
第16図 5	16 12-5	1 区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 2.1	体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄橙色	皿形Ⅱ8	ì
第16図 6	16 12-6	1 区 黒色士 (4 層)	土師質	Ш	口径 8.4 器高 2.1	体部は斜上方に立ち上がる。 底部外面:回転系切り、他の内 外面:回転ナデ	胎士:密(10.5mm以下の砂粒を 僅かに含む) 焼成:普通、色調:灰黄褐色	皿形Ⅱ 1	)
第16図 7	16 12-7	1 区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 7.7 器高 2.6	体部は斜上方に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎士: 2 m以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: にぶい橙色	皿形Ⅱ 1	)
第16図 8	16 12-8	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 2.45	体部は内湾気味に立ち上がる 底部外面:調整不明、他の内外 面:回転ナデ	胎士:1 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黒褐色	皿形Ⅱ(	2
第16図 9	16 12-9	1 区 黒色士 (4 層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 2.05	体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:調整不明、他の内外面:回転ナデ	胎士:2 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄白色	皿形Ⅱ(	2
第16図 10	16 12-10	1 区 黒色士 (4 層)	土師質	Ш	口径 7.6 器高 2.2	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎士:1 <u>┉</u> 以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄白色	皿形Ⅱ(	3
第16図 11	16 12-11	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 8.85 器高 2.05	体部は斜上方に立ち上がる。 底部外面:回転系切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:密(0.5mm以下の砂粒を 僅かに含む) 焼成:良好、色調:灰白色	皿形Ⅱ(	2
第16図 12	16 12-12	1区 黒色土 (4層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 2.3	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎士:1 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄白色	皿形Ⅱ(	3
第16図 13	16 12–13	1区 黒色土 (4層)	土師質	Ш	口径 7.8 器高 2.2	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰褐色	皿形Ⅱ(	:
第16図 14	16 12-14	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 8.4 器高 2.3	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:2 買以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	皿形Ⅱ♂	l
第16図 15	16 12–15	13層	土師質	Ш	口径 8.2 器高 1.75	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄灰色	皿形Ⅱ(	i
第16図 16	16 12-16	1区 黒色土 (4層)	土師質	Ш	口径 7.6 器高 2.1	体部は逆への字状に立ち上がり、 口縁部は外反。底部外面:回転 糸切り、他の内外面:回転ナデ	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	皿形Ⅱ(	i
第16図 17	16 12-17	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 8.8 器高 2	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:密(2 mm以下の砂粒を少量含む)焼成:普通、色調: 外灰白色、内淡黄色	皿形Ⅱ(	1
第16図 18	16 12-18	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 8.8 器高 2.1	体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転メ切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:密 焼成:良好、色調:淡茶色	皿形Ⅱ(	i
第16図 19	16 12-19	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 9 器高 2.45	体部は斜上方に立ち上がる。 底部外面:調整不明 他の内外面:回転ナデ	胎土:2 買以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄橙色	皿形皿	
第16図 20	16 12-20	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 9.2 器高 2.5	体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:密(1 mm以下の砂粒を含 むい 焼成:良好、色調:内灰 白色、外淡赤橙色	皿形皿	
第16図 21	16 12-21	13層	土師質	Ш	口径 8.2 器高 1.75	体部は斜上方に立ち上がる。 底部外面:回転系切り、他の内 外面:回転ナデ	胎土:1 買以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	皿形皿	
第16図 22	16 12-22	1区 黒色士 (4層)	土師質	Ш	口径 11 器高 2.6	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土: 1 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調:淡茶色	皿形 I	
第16図 23	16 12-23	13層	土師質	Ш	口径 11.2 器高2.7	体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転メ切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:密(3 mm以下の砂粒を少量含む)、焼成:良好、色調: 灰白色	皿形 I	
第16図 24	16 12-24	1区 黒色十 (4層)	土師質	Ш		体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り、他の内 外面:回転ナデ	胎土: 1 買以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶褐色	皿形底部	ß
第16図 25	16 12-25	1区 黒色十 (4層)	土師質	Ш		体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	皿形底部	ß

# 表 7 出土遺物観察表(3)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第16図 26	16 12–26	1区 黒色士 (4層)	土師質	ш		体部は斜上方に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:1 買以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡黄色	皿形底部
第16図 27	16 12-27	1 区 黒色士 (4 層)	土師質	ш		体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄橙色	皿形底部
第17図 1	17 13-1	1区 黑色土 (4層)	土師質	椀	口径 12.4 器高 5.4	体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転チ切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:密(砂粒をほとんど含まない)、焼成:普通、色調:内にぶい橙色、外橙色	坏形 I
第17図 2	17 13- 2	1区 黒色士 (4層)	土師質	椀	口径 16	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。 内外面:回転ナデ	胎土:1㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰白色	坏形Ⅱ
第17図 3	17 13-3	1区 黒色土 (4層)	土師質	椀	口径 16	体部は逆「ハ」の字状に立ち上 がる。 内外面:回転ナデ	胎土: 1 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外浅黄橙、 橙色、内浅黄橙色	坏形Ⅱ
第17図 4	17 13-4	1区 黒色士 (4層)	土師質	坏	口径 6.7 器高 4.2	体部は内湾気味に立ち上がり、口 縁部は外反する。底部外面:回転 糸切り、他の内外面:回転ナデ	胎土:2㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:にぶい橙色	椀形I
第17図 5	17 13- 5	1区2層	土師質	椀	口径17.8	体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁部は外反、内外面:回転ナ デ	胎士:1 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外灰白、橙、 褐灰、内浅黄橙、褐灰	椀形Ⅲ
第17図 6	17 13-6	1区 黒色士 (4層)	土師質	椀		体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:1 …以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	椀形底部
第17図 7	17 13-7	1区2層	土師質	椀	口径 11.6 器局 4.5	体部は内湾気味に立ち上がり、口 縁部はやや外及、底部外面:回転 糸切り、他の内外面:回転ナデ	胎土:密(砂粒1.2㎜以下を少量に含む)、焼成:良好、色調 ・外灰白色~淡黄色、内淡黄色	椀形Ⅱ
第17図 8	17 13-8	1区 黒色土 (4層)	土師質	椀	口径17.4	体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁部は外反、内外面:回転ナ デ	胎土:2㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外浅黄橙、 褐灰、内にぶい橙、黒褐、褐灰	椀形Ⅲ
第17図 9	17 13-9	1区 黒色土 (4層)	土師質	底部		体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎土:3 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	椀形底部
第17図 10	17 13–10	1区 黒色士 (4層)	土師質	椀		体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎土:密(0.5 m以下の砂粒を 僅かに含む)焼成:普通 調:内灰黄褐色、外浅黄橙色	椀形底部
第17図 11	17 13–11	1区 黒色士 (4層)	土師質	椀		体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎土:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄白色	椀形底部
第17図 12	17 13–12	1区 黒色士 (4層)	土師質	椀		体部は内湾気味に立ち上がる。 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:密(0.5㎜以下の砂粒を 含む、焼成:良好、色調:内 灰白色、内灰白色	椀形底部
第17図 13	17 13–13	1区 黒色士 (4層)	土師質	脚付皿	口径 8 底器高 2.8	柱状の脚、皿部はやや浅く、斜 上方へ開く。底部外面:回転糸 切り、他の内外面:回転ナデ	胎土:密(0.5 m以下の砂粒を 僅かに含む)焼成:良好、色 調:内浅黄橙色、外灰白色	脚付き皿形 a
第17図 14	17 13–14	1区 黒色土 (4層)	土師質	脚付皿	口径 7.6 底器高 2	柱状の脚、皿部はやや浅く、斜 上方へ開く。底部外面:回転糸 切り、他の内外面:回転ナデ	胎士:1以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰白色	脚付き皿形b
第17図 15	17 13-15	1区 黒色土 (4層)	土師質	脚付皿	口径 8.1 底径 4.7 器高 2.9	柱状の脚、皿部は浅く、外方へ 直線的に開く。底部外面:回転 系切り、他の内外面:回転ナデ	胎土:密(1 mm以下の砂粒を僅かに含む) 焼成:普通、色調:淡黄色	脚付き皿形b
第17図 16	17 13–16	1 区SB01 里色土 (4 層)	土師質	脚付皿	口径 8.4 底径 4.6 器高 2.6	柱状の脚、皿部は浅く、斜上方へ開く。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎土:密(2mm以下の砂粒を少量含む) 焼成:普通、色調:灰白色	脚付き皿形b
第17図 17	17 13-17	1区 黒色士 (4層)	土師質	脚付坏	底径 4.2	柱状の脚 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:1 …以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	脚付き坏形a
第17図 18	17 13–18	1区 黒色士 (4層)	土師質	脚付坏	口径 7.4 底径 4.65 器高 4.4	柱状の脚で、坏部は内湾して立ち上が る。口縁端部は肥厚する。底部外面: 回転糸切り、他の内外面:回転ナデ	胎土:密(1 mm以下の砂粒を僅 かに含む) 焼成:良好、色調:灰白色	脚付き坏形 b
第17図 19	17 13-19	1区 黒色士 (4層)	土師質	脚付坏	底径 4.9	柱状の脚 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士: 1 m以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 浅黄橙色	脚付き坏形 b
第17図 20	17 13-20	1区 黒色士 (4層)	土師質	脚付坏	底径 5.35	脚部は短くて太い。坏部は内湾 する。底部外面:回転※切り、 他の内外面:回転ナデ	胎土: 1 皿以外の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄橙色	脚付き坏形 b
第18図 1	18 14-1	1区 黒色士 (4層)	土師質	<u>高</u> 台付	口径 8.6	皿部は浅く、外方へ直線的に開 内外面:回転ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:橙色	高台付き皿形 I
第18図 2	18 14-2	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付	口径 9.7	皿部はやや浅く斜上方へ開く。 内外面:回転ナデ	胎土:2㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:橙色	高台付き皿形Ⅱ
第18図 3	18 14-3	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付	口径 10.8 底径 6.3 器高 3.2	高台は「ハ」の字状、皿部は浅く斜上方へ開く。 内外面:回転ナデ	胎土:密(1 mm以下の砂粒を少量含む) 焼成:良好、色調:灰白色	高台付き皿形 II
第18図 4	18 14-4	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付	口径 11 底径 6 器高 3.1	高台は「ハ」の字状、皿部は浅くやや斜上方へ開く。 内外面:回転ナデ	胎土:密(1 mm以下の砂粒を僅 かに含む)焼成:良好、色調 :にぶい黄橙色	高台付き皿形Ⅱ
第18図 5	18 14- 5	1区 黒色士 (4層)	土師質	脚付坏	口径 7.9	坏部は深く、内湾気味に立ち上 がる。 内外面:回転ナデ	胎土:密(0.5m以下の砂粒を 僅かに含む)焼成:普通、色 調:内淡黄色、外灰白色	高台付き坏形 I

# 表 8 出土遺物観察表(4)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第18図 6	18 14-6	13層	土師質	豪 <sub>台付</sub>	口径 7.8 底径 4.8 器高 2.9	高台は低く、「ハ」の字状、坏 部は内湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎士:密(3 mm以下の砂粒を少 量含む)、焼成:普通、色調: にぶい橙色	高台付き坏形 II a
第18図 7	18 14- 7	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付 环	口径 8.2 底径 5.4 器高 3.5	高台は「ハ」の字状、坏部は内 湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎士:密(1mm以下の砂粒を僅かに含む)焼成:良好、色調 ・内灰黄色、外淡黄色	高台付き坏形 II a
第18図 8	18 14-8	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付 环	口径 9 底器高 2.5	高台は低く、「ハ」の字状、坏 部は内湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎土:密(1mm以下の砂粒を僅 かに含む)、焼成:普通、色調 :灰白色	高台付き坏形 II a
第18図 9	18 14- 9	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付 环	口径 8.7	坏部は内湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎土: 2 mm以下の砂粒を僅かに 含む。 焼成:良好、色調:灰白色	高台付き坏形 II b
第18図 10	18 14-10	1区 黒色土 (4層)	土師質	豪 <sup>台付</sup>	口径 10.2 底径 6.8 器高 3.7	高台は「ハ」の字状、坏部はや や浅く斜上方へ開く。 内外面:回転ナデ	胎士:密(1mm以下の砂粒を僅 かに含む)、焼成:普通、色調 :灰白色	高台付き坏形 II b
第18図 11	18 14-11	1区 SB02黒色土 (4層)	土師質	豪 <sup>台付</sup>	口径11.6	坏部は内湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎土:密(0.5mm以下の砂粒を 火量含む) 焼成:普通、色調:灰白色	高台付き坏形
第18図 12	18 14–12	1区 黒色土 (4層)	土師質	高台付 环	口径15.4	坏部は斜上方へ立ち上がる。 内外面: 回転ナデ	胎土:3 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰白色	高台付き坏形 IV
第18図 13	18 14-13	1区 黒色土 (4層)	土師質	高台付 环	口径 15 底径 6.5 器高 5.6	坏部は斜上方へ立ち上がる。 内外面: 回転ナデ	胎土:密(1 mm以下の砂粒を僅かに含む)、焼成:良好、色調 ・橙色	高台付き坏形 IV
第18図 14	18 14-14	1区 SB02 整地層	土師質	高台付	口径 11.2 底径 8.2 器高 7.3	高台は「ハ」の字状、坏部は深 人内湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎土:密(0.5 m以下の砂粒を 僅かに含む)、焼成:良好、色 調:橙色	高台付き椀形 I
第18図 15	18 14-15	1区 黒色土 (4層)	土師質	高台付	口径 13	坏部は内湾して立ち上がり、口 縁部は外区する。 内外面:回転ナデ	胎土:2以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄橙色。	高台付き椀形 II
第18図 16	18 14–16	1区 黒色士 (4層)	土師質	高台付 椀		坏部は内湾して立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎土:4 皿以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:浅黄橙色。	高台付き椀形 II
第18図 17	18 14-17	1区 黒色士 (4層)	土師質	底部	高台径 6.7	「ハ」の字状に開く高台	胎土:1 …以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	高台付き底部
第18図 18	18 14-18	1区 黒色士 (4層)	土師質	底部	高台径 6.1	「ハ」の字状に開く高台	胎土:1 mm以下の砂粒を少し含 な。 焼成:普通、色調:灰黄褐色	高台付き底部
第18図 19	19 14–19	1区4層	白磁	椀	口径 18	玉縁状口縁	胎土:密、灰白色粘土。 焼成:良好、色調:薄黄緑色	
第18図 20	19 14–20	1区3層	白磁	椀		玉縁状口縁	胎土:密白色粘土。 焼成:良好、色調:乳白色	
第18図 21	19 14–21	1 区	白磁	椀		玉縁状口縁	胎土:密、白色粘土。焼成:良好、色調:乳白色	
第18図 22	19 14–22	1 区	白磁	椀	底径 7.9	幅広の低い高台、器肉は厚い。 見込みに段がつく。底部は無釉	胎土:密、灰白色粘土、黒い細 粒含む。 焼成:良好、色調:乳白色	
第18図 23	19 14-23	1 区	白磁	椀	底径 6.9	幅広の低い高台、器肉は薄い。 底部は無釉	胎土:密、灰白色粘土、黒い細 粒含む。 焼成:良好、色調:薄黄緑色	
第18図 24	19 14-24	1区 黒色士 (4層)	白磁	Ш	口径 11.2 底径 3.8 器高 2.8	体部は内湾して立ち上がる。削り出した低い高台、見込みに沈線入る。外底の釉はカキ取る	胎土:2 mm以下の砂粒を含む、 白灰色 焼成:良好、色調:薄黄緑色	水裂がみられる。 内底にヘラによ る草花文様
第18図 25	19 14-25	1区 サブトレンチ	青磁	Ш	口径 7.4 底径 4.65 器高 4.4	体部は下位で屈曲、外底は無釉	胎土:密、灰色粘土 焼成:良好、色調:薄緑色	内底にへ ラによ に を が が ず が ず を し る し り が ず で り で り で り る り で り る り る り で り で り で り
第18図 26	19 14-26	1区 サブトレンチ	磁器	椀	底径 4	高台は低くやや外へふんばる。 底部は無釉	胎土:密、灰白色粘土 焼成:良好、色調:薄青色	
第21図 1	20 17-1	2 <u>区</u> 排水用 トレンチ	縄文	浅鉢		口痕に刻目 内外面:ナデ	胎土:1~2 mm大の白色、細砂 粒を多く含む。 焼成:良好、色調:暗褐色	
第21図 2	20 17- 2	2区 黒色土	縄文	深鉢		突帯文土器、刻目	胎土:1~3 mm大の白色、細砂 粒を多く含む。 焼成:良好、色調:暗褐色	
第21図 3	20 17-3	2 <u>区</u> 排水用 トレンチ	縄文	鉢か		内外面:ナデ	胎士:1~2 mm大の白色、細砂粒を多く含む。 焼成:良好、色調:褐色	
第21図 4	20 17- 4	2 区 オリーブ 黒色土	須恵	蓋		輪状つまみ、天井部外面:ヘラ ケズリ後回転ナデ 他の内外面:回転ナデ	胎士:2mm以下の砂粒を少し含 む。 焼成:良好、色調:灰色	
第21図 5	20 17- 5	2区 オリーブ 黒色土 9層	土師質	底部		底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:密 焼成:良好、色調:外面は黄橙 色、内面は灰褐色	皿形か
第21図 6	20 17- 6	2 区 オリーブ 黒色土	土師質	底部		やや上げ底、体部にかけて外反 する。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎士:密 焼成:良好、色調:黄橙色	坏形か

# 表 9 出土遺物観察表(5)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第25図 1	21 21-1	3区 整地層の下層	弥生	. 甕	口径19.4	口縁部は「く」の字状に屈曲し 端部は上方にやや肥厚、胴部外 面:ハケメ	胎土: 1 mm以下の砂粒を少し含む。 焼成:良好、色調:淡黄色	
第25図 2	21 21-2	3区 整地層の下層	弥生	底部	底径 5.8	上げ底の小さい底部 胴部外面:ハケメ 他の内外面:ナデか	胎土:1.5㎜以下の砂粒を多く 含む。焼成:良好、色調:淡黄 色、部分的に黒色。	
第25図 3	21 21-3	3区 礎石西側の 地山直上	須恵	蓋		輪状つまみ 大井部外面:ヘラケズリ 他の内外面:回転ナデ	胎土:2 mm以下の白色砂粒を多 た合む。 焼成:良好、色調:暗灰色	
第25図 4	21 21-4	3区9層	須恵	<del>真</del> 台付	底径 10	高台は低い。底部外面:回転糸 切り後ナデ、底部内面:ナデ、 他の外面:回転ナデ	胎土:密 焼成:やや不良 色調:暗灰色	
第25図 5	21 21-5	3区9層	須恵	坏		底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:1.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰色	
第25図 6	21 21-6	3区 礎石西側の 地山上層	須恵	甕		外面;上からタテ方向のタタキ、ヨコ方向の上から月で大力向のタタキ、八口である日のようない。 大口では、一口である。 大口でなる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。 大してる。	胎士:3 mm以下の白色砂粒を少し合む。 焼成:良好、色調:暗灰色	
第25図 7	21 21- 7	3区 炭化米包含 層上層	土師質	坏か	口径 13	体部は逆「ハ」の字状に開く。 内外面:回転ナデ	胎土:密 焼成:良好 色調:淡茶色	
第25図 8	21 21-8	3区 礎石西側の 地山上面	土師質	椀か	口径 10.6	体部は内湾気味に立ち上がる。 内外面:回転ナデ	胎土:密 焼成:良好 色調:淡黄色	
第25図 9	21 21-9	3区 礎石西側の 地山上面	土師質	皿か	底径 5.4	低い高台状の底部体部は内湾気味 に立ち上がる。底部外面:回転糸 切り、他の内外面:回転ナデ	胎土: 1 ㎜以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡黄色	
第25図 10	21 21-10	3区 炭化米包含 層上層	土師質	皿か		体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部外面:回転糸切り、 他の内外面:回転ナデ	胎土: 0.5 mm以下の砂粒を少し 含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄色	
第25図 11	21 21–11	3区 礎石西側の 地山上面	土師質	坏か		体部はやや内湾して立ち上がる。 削り出した低い高台、見込みに 沈線入る。外底の釉はカキ取る	胎士:密好 焼成:淡黄色	
第25図 12	21 21–12	3区 礎石内炭化米 包含層上層	土師質	関付か	底径 7.4	脚部は太く広がる。 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:2 mm以下の白色砂粒を多 く合む。 焼成:良好、色調:淡茶色	
第25図 13	21 21–13	3区 礎石西側の 地山直上	土師質	高 京 京 京 京 京	底径 7	「ハ」の字状の高台。 底部外面:回転糸切り後ナデ 他の内外面:回転ナデ	胎土: 0.5mm以下の砂粒を少し 含む。 焼成: 良好、色調: 褐灰色	
第26図 1	22 22- 1	4区 青灰色 砂質王	縄文	深鉢	口径 29.6	口縁はゆるく外反 外面:強いナデ	胎士: $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{2}{2}$ mm大の白色細砂粒を多くな。 焼成:良好、色調:暗褐色	
第26図 2	22 22- 2	4区 青灰色 砂質土	縄文	深鉢		口縁はわずかに外反、外面に沈 線2条 外面:ナデか	胎士: 1~2 mm大の白色細砂粒 を多くされ。 焼成:良好、色調:褐色	
第26図 3	22 22-3	4区 青灰色 砂質土	弥生	甕	口径 21.2	口縁は強く外反、端部に刻目、 外面にヘラ描き、沈線6条 外面:ハケメ、内面:ナデか	胎士:2~4 m大の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡褐色	
第26図 4	22 22- 4	4区 青灰色 砂質土	弥生	甕		口縁はゆるく外反、胴部下半外 面:ナデか、他の内外面:ナデ	胎士:3 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:茶褐色	
第26図 5	22 22- 5	4 区 青灰色 砂質土	縄文	底部	底径 8.5	底部は平底。 内外面:ナデか	胎士: 1~2 mm大の白色細砂粒 を多く含む。 焼成: 良好、色調: 暗褐色	
第26図 6	22 22- 6	4区 青灰色砂質 土下層	弥生	底部	底径 7	底部は平底   外面:ナデ	胎土:2 m大の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色	
第30図 1	22 26- 1	5 区 2 ∼ 6 層	弥生	甕	口径 16	複合口縁端部は鋭い	胎土:密焼成:やや不良、色調:淡黄色	磨滅のため調 整不明
第30図 2	22 26- 2	5区 2~6層	須恵	豪台付 菜	底径11.7	高台は低く、外方に張り出す。 底部 火血:回転ナデ 底部内面・ナデ、他の内外面:回転 ナデ	胎土:密、1.5mm大の砂粒を少 含む。 焼成:良好、色調:灰色	
第30図 3	22 26- 3	5 区 7 層	須恵	壺		底部から胴部にかけて、丸みを帯びる。高台が剥離した跡がある。 胴部外面下半:平行タタキ 胴部内面下半:同心円当具痕 他の内外面:回転ナデ	胎士:2 mm以下の砂粒を多く含む。 焼成:良好、色調:外面は暗火色、 内面は灰色、断面はセピア色。	
第30図 4	22 26- 4	5 区 7 層	須恵	甕		胴部の一部、外面に刺突文、横 方向にカキメ状の沈線 内面:同心円当具痕	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰色	
第30図 5	22 26- 5	2~6層	土師質	高台付 駅か	底径 5	「ハ」の字状に高台がつく。内 外面:回転ナデ	胎土:密、2mm以下の砂粒を少 含む。 焼成:良好、色調:暗黄色	
第34図 1	23 30- 1	6区 10・11層	弥生	壺	口径 26	口縁端部は肥厚し、刻目を施す。 内外面:ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外面は赤褐 色、内面は淡黄色	
第34図 2	23 30- 2	6 区 10・11層	弥生	壺	口径 25	口縁端部は肥厚し、刻目を施す。 外面:ハケメ、内面:ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡黄色	
第34図	23 30- 3	6区 10·11層	弥生	甕	口径 20.8	日縁部は「大小の字状に屈申し入端 調は下れるで表文書 開設はお内田:ナクタ 同談はお内田:ナクタ	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:液黄色	

# 表10 出土遺物観察表(6)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備	考
第34図 4	23 30- 4	6区10・11層	弥生	甕	口径 22.6	□縁部は「く」の字状に屈曲、端部 は上れに拡張、凹線4条、頸部に指 頭形で支盤: ハケメ □縁部内面: ナデ	胎士: 1 頭以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄色		TOTAL STATE OF THE
第34図 5	23 30- 5	6 区 13層上層	弥生	甕	口径 25.2	口縁部は「く」の字状に屈曲、 端部は上下に拡張、凹線 4 条口 縁部内面:ナデ	胎士:1 頭以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色。		
第34図 6	23 30- 6	6区 13層上層	弥生	甕	口径 22.2	口縁部は「く」の字状に屈曲、端部は上下に拡張、凹線4条 胴部内外面: ハケメ	胎士: 1 mm以下の砂粒を多く含む。 焼成: 良妊、色調: 外面は淡赤 褐色、内面は黒灰色		
第34図 7	23 30- 7	6区 10・11層	弥生	壺		間部外面:全面に分析が後上沈線1 デ、光線の3項では1950年の1950年 開新内面:上方はハケメ、大方はケ	胎士:3.5m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外面は黒茶 色、内面は黒褐色		
第34図 8	23 30-8	6区 7層	弥生		底径 7.6	平底 外面: ヒラケズリ 内面: ハケメ	胎士:2 m以下の砂粒を含む。 焼成、良好、色調:外面は暗茶 色、内面は淡茶色		
第34図 9	23 30- 9	6 区 10•11層	弥生		底径 5.6	平底 外面:ヘラミガキ	胎土:1 mm以下の砂粒を少し含 だ。 焼成:良好、色調:淡茶色		
第34図 10	23 30-10	6区 10•11層	弥生		底径 7	平底 外面: ヘラミガキ 内面: ハケメ	胎士:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外面は暗茶 色、内面は淡茶色		
第34図 11	23 30-11	6区 10•11層	弥生		底径 6.4	平底調整不明	胎士:2.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成:やや不良、色調:赤褐色	-	
第34図 12	23 30-12	6区 10•11層	弥生		底径 6	平底 外面:ヘラミガキか 内面:ハケメ	胎士: 1 mi以下の砂粒を少し含む。 焼成:良好、色調: 外面は黒黄 色、内面は淡茶色		
第34図 13	23 30-13	6区 10•11層	弥生		底径 5	平底 外面:ヘラミガキ 内面:ハケメ	胎土: 1 mm以下の砂粒を含む。 焼成: やや不良、色調: 赤褐色		
第34図 14	23 30–14	6区 10•11層	弥生		底径 5.8	平底 外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキか	胎土:2以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外面は暗褐 色、内面は黒色		
第35図 1	24 31-1	6 区 7 層	弥生	甕	口径 19	日縁報は出線3条5人 第二線部内面: ナタメ	胎士: 1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外面は暗黄 色、内面は淡黄色		
第35図 2	24 31-2	6区 10•11層	弥生	甕	口径 12.6	口縁部はゆるく外反し、端部は上方に拡張、凹線4条、頸部に刺突文 胴部内外面:ハケメ 口縁部内面:ナデ	胎士:1mm以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色		
第35図 3	24 31-3	6 区 7 層	弥生	甕	口径16.6	□縁部は「く」の字状に屈曲、端部は上方に拡張、凹線3条 胴部外面・ハケメ □縁部内面・ナデ	胎土:1以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色		
第35図 4	24 31- 4	6区 10•11層	弥生	甕	口径17.5	口縁部は「〈」の字状に屈曲、端部は上方に拡張、凹線3条 側部内面・ケズリ 口縁部内面:ナデ	胎士:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:外面は黒色、 内面は茶褐色		
第35図 5	24 31- 5	6区 10•11層	弥生	甕	口径 16.2	口縁部は短く外反、端部は凹線 1 条 胴部内外面下半:ハケメ 他の内外面:ナデ	胎土:2㎜以下の砂粒を多く含む、焼成:良好、色調:外面は 茶褐色、内面は暗茶褐色		
第35図 6	24 31-6	6 区 7 層	弥生		底径 7.3	やや上げ底の平底 外面:ハケメデ	胎土: 3 mm以下の砂粒を多く含 成: やや不良、色調: 淡黄色		
第35図 7	24 31-7	6区 10•11層	弥生		底径 13	平底 八ケメ	胎土:1以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:暗茶褐色		
第35図 8	24 31-8	6 区 7 層	弥生			外面:全面ハケメ後粒状の刺突 文6段以上 内面:ハケメ	胎士:密。 焼成:良好、色調:淡茶色		
第35図 9	24 31-9	6区 10•11層	弥生			外面: 刺突文 6 段 内面: ハケメ	胎士:1 皿以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:暗茶色		
第35図 10	24 31-10	6区 13層上層	弥生			外面:ハケメ、刺突文(斜行状)	胎土:1 皿以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡黄色		
第35図 11	24 31-11	6区 10·11層	弥生.			外面:口字状の刺突文4段	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄褐色		
第35図 12	24 31–12	6 区 2 層(耕作土)	須恵	蓋		輪状つまみ、天井部外面:ヘラ ケズリ後回転ナデ 内面:回転ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰色		
第35図 13	24 31-13	6区 5層	須恵	高坏		内外面:回転ナデ	胎土:密 焼成:良好、色調:灰色		
第43図 1	25 39- 1	7区 サブトレンチ 2	縄文	深鉢		突帯文器、刻目 内面:チデ	胎土: 2 mm大の白色細砂粒を含 だ。 焼成:良好、色調:灰褐色		
第43図 2	25 39- 2	7区 溝(青灰色層) (南北トレ)	弥生	壺	口径14.4	口縁部は逆「ハ」の字状に開く。 端部はやや肥厚、沈線2条以上。 内外面:ナデ	胎士:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡茶色。		
第43図 3	25 39-3	7区 サブトレンチ 1	弥生	甕	口径 24.6	口縁部は強く外反、外面:ハケメの後頸部のみナデ、胴部内面:ハケメ、口縁部内面:ナデ	胎士: 2 mu以下の白色砂粒を含む。 焼成: 良妊、色調: 外面は暗茶 褐色、内面は茶褐色		

# 表11 出土遺物観察表(7)

挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第43図 4	25 39- 4	7区 東西トレンチ 青色層の上	弥生	. 壺		平底 調整不明	胎士:2㎜以下の砂粒を多く含む。 焼成:良奸、色調:外面は暗茶 色、内面は淡茶色	
第43図 5	25 39- 5	7区 南北トレンチ 青色層の上	弥生			平底 調整不明	胎土: 2 mm以下の砂粒を多く含 む。 焼成:良好、色調:茶褐色	
第43図 6	25 39- 6	7区 南北トレンチ 青色層の上	土師	高坏		調整不明	胎土:2mm以下の砂粒を少し含 だ。 焼成:良好、色調:黄灰色	
第43図 7	25 39- 7	7区 南北トレンチ 青色層の上	土師	低脚坏	底径 6	調整不明	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:淡黄色	
第43図 8	25 39-8	7区 南北トレンチ	須恵	蓋		丸みのある天井部で口縁部との境に 沈線、天井部外面:ヘラケズリ後回 転ナデ、他の内外面:回転ナデ	胎土:1 mm以下の砂粒を多く含 む。 焼成:良好、色調:灰色	黒色粒子含む
第43図 9	25 39- 9	7区 東西トレンチ	須恵	蓋	口径 15.2 器高 2.8	輪状つまみ、口縁端部は垂下天井部 水面:ヘラケズリ後間転ナデ 天井部内面: 回転ナデ、他の内外面 :回転ナデ	胎士:3㎜以下の砂粒を少し含む。 焼成:良好、色調:灰色	
第43図 10	25 39-10	7区 東西トレンチ	須恵	蓋		低い輪状つまみ 天井都外面: ヘラケズリ後回転ナデ 天井部内面: ナデ、他の内外面: 回 転ナデ	胎土: 2 mm以下の砂粒を少し含 だ。 焼成:良好、色調:黄灰色	
第43図 11	25 39-11	7 区 東西トレンチ	須恵	蓋	口径 14.4	口縁部端部は垂下 大井部外面: ヘラケズリ後回転 ナデ、他の内外面: 回転ナデ	胎土:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:暗灰色	
第43図 12	25 39–12	7区 東西トレンチ	須恵	蓋	口径 14.4	つまるの有無は不明、端部はわずか とまるの有無は不明、端部はわずか とままが、一般の内外面:回 転ナデ、他の内外面:回	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:黄灰色	
第43図 13	25 39–13	7区 東西トレンチ 青色層の上	須恵	Ш	口径 14.4 器高 2.7	口縁部は短く外傾、底部外面: 回転糸切り、他の内外面:回転 ナデ	胎土:2 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:暗灰色	
第43図 14	25 39–14	7区 東西トレンチ 青色層の上	須恵	Ш	口径 13.8 器高 2.7	口縁部は外傾、底部外面:回転 糸切り、底部内面:ナデ 他の内外面:回転ナデ	胎土: 2 mm以下の砂粒を少し含 が 焼成:良好、色調:黄灰色	
第43図 15	25 39-15	7区 東西トレンチ	須恵	坏		上げ底気味、底部外面:回転糸切り、底部内面:ナデ、他の内外面:回転ナデ	胎土: 1.5㎜以下の砂粒を少し 含む。 焼成: 良好、色調: 灰色	
第43図 16	25 39-16	7区 東西トレンチ	須恵	高 京 京 が	底径 9.7	高台は低くやや外傾、底部外面 ・回転糸切り、底部内面:ナデ、 他の内外面:回転ナデ	胎士:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:暗灰色	
第43図 17	25 39-17	7区 耕作土	須恵	<u></u> 高台付	口径 16.3 底径 12.9 器高 3.7	口縁部は外反、高台は高め 内外面:回転ナデ	胎土: 2 mm以下の砂粒を少し含 が 焼成:良好、色調:暗灰色	
第43図	25 39–18	7区 東西トレンチ	須恵	壺か	底径 10	胴部は大味を帯びてからしていました。 はは大味を帯びてからしていました。 はなったが、胴部外面・ によるナデ、大内面・ 回転ナデ、大内面・ 回転ナデ、大内面・	胎土:1 mm以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:灰色	
第43図	25 39-19	7区 東西トレンチ	須恵	甕	口径 18.2	口縁部は「く」の字状屈曲、胴部外面:平行タタキ、胴部内面:同心円 当具痕、他の内外面:回転ナデ	胎土:2 皿以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:暗灰色、外 歯に自然釉付着	胴部外面に ++」のへら 描き
第43図 20	25 39-20	7区 東西トレンチ 青色層の上	須恵	獲		外面:上から沈線2条、波状文6条沈線3条、全体回転ナデ、 内面:回転ナデ	胎土:密 焼成:良好、色調:外面は暗灰 色、内面は灰色	
第43図 21	+	7区 東西トレンチ	須恵	甕		外面:上から沈線2条、波状文9条沈線3条、全体回転ナデ、 内面:回転ナデ	胎士:密 焼成:艮好、色調:灰色	
第43図 22	+	7区 東西トレンチ	土師質	Ш		底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:密 焼成:良好、色調:黄褐色	
第43図 23	-	7区 東西トレンチ	土師質	ш	底径 6.1	高台気味の底部 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎士:密 焼成:良好、色調:淡赤色	
第43図 24		7区 南北トレンチ	土師質	Ш		底部は上げ底 底部外面:回転糸切り 他の内外面:回転ナデ	胎土:1 m以下の砂粒を含む。 焼成:良好、色調:褐色	
第43図 25	+	7区 東西トレンチ	土師質	豪 <sub>台付</sub>	底径 7.4	細長い高台が「ハ」の字状に開く。底部外面:回転糸切り後ナデ、他の内外面:回転ナデ	胎土: 1 mm以下の砂粒を少し含 な。 焼成:良好、色調:黄褐色	
第48図 1		8区 西側排水トレ ンチ削土中	縄文	深鉢		波状口縁、外面に沈線2条 外面:磨消縄文、内面:ミガキ	胎士: 1.5mm以下の砂粒を多く 合む。 廃成: 良好、色調: 灰褐色	
第48図	_	8区 西側排水トレンチ削土中	縄文	深鉢		波状口縁、外面に沈線 2 条 外面:磨消縄文、内面:ミガキ	胎土: 1.5mm以下の細砂粒を含 が。 焼成:良好、色調:灰褐色	
第48図		8区8層	土師質	豪 <sub>台付</sub>	底径 7.3	高台は低く、「ハ」の字状。 底部内面:回転ナデ	胎士:1mm以下の砂粒を少し含む。 焼成:良好、色調:外面は淡黄 色、内面は黒色	

以上、遺構に伴わない遺物

# 表12 石器一覧表

	挿図 番号	図版 番号	出土地点 層 位	種類	材質	遺存状態	法量	(cm)	重さ (g)	備考
1	第19図 1	19 15- 1	1区 サブトレ整地 層及び下層	打製石斧	流紋岩	完形品	長 <b>:</b> 15.8 幅 <b>:</b> 11.9	厚: 2	重:400	
2	第19図 2	19 15- 2	1区 トレンチ 整地層下層	打製石斧	流紋岩	完形品	長 <b>:</b> 14.9 幅 <b>:</b> 9	厚:2	重:366	
3	第19図 3	19 15-3	1区 南北トレンチ	打製石斧	流紋岩	½欠損	長 <b>:</b> (4.9) 幅 <b>:</b> 7.7	厚:0.85	重:40.7	小形
4	第19図 4	19 15– 4	1区 南北トレンチ	磨石	玄武岩	% 欠 損	長:(11.1) 幅:7.8	厚:6	重:891	
5	第19図 5	19 15– 5	1区 3層	砥石	流紋岩	破片	長:(7) 幅:5.8	厚:2.5	重:142	研ぎ面4
6	第19図 6	19 15- 6	1区 南北トレンチ 4層下層	砥石	流 紋 岩 (微粒)	完形品	長:5 幅:2.65	厚:1.35	重:30.6	研ぎ面4
7	第22図 1	20 18- 1	2 区 黒色土	打製石斧	流紋岩	½欠損	長:(6.8) 幅:8.4	厚:2.5	重:158	
8	第22図	20 18- 2	2 区 黒色土	打製石斧	流紋岩	破片	長:(6.7) 幅:(6.6)	厚:2.2	重:112	
9	第22図	20 18-3	2 区 黒色土	打製石斧	流紋岩	½欠損	長:(4.2) 幅:6	厚:1.1	重:37.3	小形
10	第22図 4	20	2 区 黒色土	磨製石斧	流紋岩	完形品	長:11 幅:4.7	厚:3.2	重:274	
11	第22図 5	20 18- 5	2区 黒色粘土層	敲石	流紋岩	%欠損	長:(6.5) 幅:5.9	厚:5.9	重:281	
12	第44図 1	26 40- 1	7 区 黒色土	打製石斧	流紋岩	完形品	長:16 幅:10.6	厚:2.5	重:540	
13	第44図 2	26 40- 2	7 区 黒色土	磨製石斧	流紋岩	½欠損	長 <b>:</b> (8.6) 幅 <b>:</b> 6.7	厚:4.5	重:425	
14	第49図 1	26 45- 1	8区 8層	打製石斧	流紋岩	%欠損	長:(11.2) 幅:14	厚:2.3	重:381	

# Ⅳ 自然科学・物理学的調査

# 1. 後谷V遺跡の炭化米特性と稲作起源

和佐野 喜久生

本遺跡は島根県東部の斐川町大字出西地内に所在し、仏経山を中心とした南部の丘陵地帯と斐伊川流域北部の簸川平野に接する小さな谷合の入り口の標高10mに位置する。遺跡は奈良時代から平安時代に稲籾を貯蔵した4棟の倉庫跡で、倉庫跡南側のU字溝から須恵器と共に大量の炭化米が出土した。古代の稲粒に関する調査・報告は、大正12年(1923)の中山平次郎による福岡県八女郡長峯村岩崎遺跡出土の炭化籾の記述に始まるが、計測は大小の2粒が安田貞雄によって行われた。その後、古代稲の形態調査は九州大学の関係者及び佐藤敏也によって行われたが、内容は当該遺跡の稲粒調査の結果を報告し、結論にはジャポニカの稲であることを述べるに終始した。中世の稲粒(米と籾)については、盛永俊太郎(1957)が「日本の稲」に狭・長粒型稲のいくつかの資料を紹介している。

本報告の著者の1人である和佐野(1993、1995)は、北部九州、韓国及び中国の古代稲の粒形質を接写写真によって精密調査し、粒特性が遺跡間で異なること、及び北部九州の玄界灘沿岸域と筑後川流域の地域間で特徴的な差異がみられることを報告し、日本古代稲の多元起源論を主張した。和佐野(1995)は、日本に稲作が伝わった古代には、異なる国・地方から持ち込まれた起源を異にするいくつかの稲品種が存在し、それらの起源・ルーツは中国大陸に求められるとした。それは、北部九州の玄界灘沿岸域の古代遺跡及び韓国・南西沿岸の松菊里遺跡の短粒と類似した稲が長江下流域の崧沢遺跡(B.C.4000年)及び銭山漾遺跡(B.C.3300年)にみられること、及び筑後川流域の中長粒のそれは江蘇省北部の焦庄遺跡のものによく類似していることによったものである。さらに、松菊里遺跡及び縄文晩期の菜畑遺跡の稲はいずれも、中国大陸から直接海路によって両地域にほぼ同時代に伝播したであろうと推論した。

本報告は、以上のような和佐野(1990、1991、1993、1995)による報告資料・考え方に基づいて、 日本最古の稲作遺跡である菜畑遺跡のものを中心に、北部九州及び韓国の古代稲と本遺跡の稲資料を 比較し、本遺跡の古代稲の特性及びその稲作起源について解析と考察を行ったものである。

# (1) 材料及び方法

本報告に供試された炭化米資料(1つの単位集団としてまとまったものを資料と略称する)は、斐 川町教育委員会によって1991年から1995年にわたって発掘されたものである。資料の計測は、約100 粒を任意抽出し、スケール付きの板におよそ2ミリ深の碁盤目の条溝を掘り、その交点に並べた米粒 の平面(長・幅)及び側面(厚さ)写真を接写撮影し、約4倍大の印画像によって行った。米粒の形

<sup>\*</sup> 佐賀大学農学部

態的特性の項目は、従来からの方法に従って、粒長、粒幅及び粒厚の測定値と、さらに計算によって 求めた長/幅比、長・幅積及び長・幅・厚積のそれぞれを粒形、粒大及び粒重の指数値として用いた。 稲粒の接写写真(第50図-1)は、遺構資料の全体像を反映するように、正形に近いものから大小・ 長短粒などを選んで、上段右肩から14粒を順次に配列して示した。

## (2) 結果及び考察

本遺跡の稲粒特性の特徴を理解し、さらにその稲作起源を考察するために、まず比較の対象としてして、和佐野(1993、1995)による北部九州、韓国及び中国の古代稲に関する報告から、代表的遺跡の粒形質の平均値と標準偏差及び粒特性の分類・記述法(表13,14,15,16)を抜粋し、その概略と解釈の要約を以下に示した。比較の基準遺跡としては、北部九州の14遺跡から6遺跡の7資料(縄文晩期から弥生中期)及び韓国の松菊里遺跡(紀元前5世紀)の8資料(表15,16)を選出した。

## ① 北部九州及び韓国の古代稲の粒特性と分類法

- 1) 古代稲の粒特性は、稲粒の長・幅・厚・長/幅比それぞれの変異幅を4-6階級に分けて指数化した(表13)。粒形質変異の指数化は、東アジアの古代稲(和佐野、1995)の粒形質について、それぞれの平均値を含む階級値を指数5とし、階級幅を0.6として小方向に3、1、大方向に7、9、10とした。粒形質の指数それぞれに対する階級値は表13に示した通りであるが、指数値の内容の記述表現は、指数5には形質名に中を付し、その両側の指数7、3は長・短、広・狭、厚・薄及び細・円のような熟語的表現に統一した。
- 2) 粒幅及び粒長指数を組み合わせたものを粒型とし、全体をインディカ・タイプとジャポニカ・タイプの2群に分類した(表14)。なお、このような分類(和佐野、1995)は、加藤(1930)による粒型を類別の重要な1形質としたジャポニカ(日本型)・インディカ(インド型)の分類法、及び松尾(1951)によるA型(ジャポニカ)及びC型(インディカ)への分類基準(長/幅比の2.07を境界とした)に準じて、それぞれの分類型に相当するタイプ(類似型)としての2群とした。すなわち、粒型分類でおよそ長/幅比の2を越える粒型のもの、1・1型及び3・1型を除くすべての極狭粒と狭粒、及び中幅粒と広粒の粒長指数が粒幅指数を1ランク以上越える粒型(5・7型、5・9型、7・9型など)ものをインディカ・タイプとし、それ以外のものをジャポニカ・タイプとした。幅広・大粒の陸稲型のものについては、適切な資料がなかったことから、特に分類型は設けなかった。
- 3) 北部九州の古代稲は、粒長が3.9-4.1mmの短粒群と4.5-4.7mmの中長粒群の2群に分かれ、短粒群は玄海灘に面した九州北部沿岸域に限られ、中長粒群は筑後川流域を中心として北部沿岸最西端、北東内陸部及び周防灘沿岸部に広く分布した。
- 4) 同時代の近接した遺跡の資料間でも、粒特性値が顕著に、あるいは統計的に有意に異なるものがみられたことから、北部九州の古代(縄文晩期から弥生時代)には異なるいくつかの稲品種が存在していたと考えた。

- 5) 古代稲が地域で異なった品種群に分かれること、及び遺跡間で米粒特性が明かに異なるものが存在することは、日本への稲の渡来史を語るものでもある。その理由は、古代の異なる地域に特徴的な異品種が存在していたことは、外部からの品種の伝来・持ち込み(導入育種と言われる)以外には考えられないからである。例えば、短粒品種からその粒長の変異幅を越えて、長粒品種を純系選択(遺伝的に異なる個体・品種の混合集団から特定のものを選び出して品種を育成する)することは不可能である。
- 6) 特徴的に異なる2つの品種群の分布域が、九州北部沿岸域と筑後川流域を中心とした地域に 分かれたことは、それぞれの地域に異なる民族によって独自の稲作文化が持参されたことにも 連なる。すなわち、縄文晩期から弥生時代にかけて九州北部の複数の地域に、外部の異なる国・ 地方から何回かの稲と稲作文化の伝来があり、それぞれが異なる地域独自の稲作文化(玄界灘稲 作文化圏、有明海稲作文化圏など)を形成しながら日本の稲作地域を拡大していったと考えられる。 このことから、九州北部沿岸に上陸した稲作が九州を南下して九州全域に、東伝して本州全 土に広まったとする日本の古代稲一元論には矛盾があり、日本古代稲多元論を主張した。
- 7) 粒形質の遺跡資料内での変異の大きさ・分布形態の違いは、品種の遺伝的固定度(遺伝的分離・異質性・混種の有無・大小を示す)を表すものであり、そのことによって当時の稲作の状況・栽培レベルが推測できる。すなわち、粒形質の変異幅が小さく粒揃いが良いことは、稲品種に対する正しい認識があり、進歩した栽培技術と適切な種子の維持・管理が行われていたことを示すものである。ただし、資料の稲粒が1穂からのものではなく、多くのものから任意に抽出されていることが条件になる。
- 8) 粒形質としては粒長・粒幅・粒厚の3つの基本的形質を対象としたが、これらの3形質のうち、形態形成に長期間を要する粒厚が外部環境の影響を最も受けやすくなることから、粒厚平均値の大小によって当時の地域環境や栽培条件などの違いが推定できるとした。しかし、ジャポニカ(日本型)とインディカ(インド型)では、前者が粒厚が厚いという品種的(遺伝的)な違いは含まれる。
- 9) 粒特性の類似性から品種の異同を論ずることについては、粒特性が顕著に違うものを異品種と判断することには問題はないが、同じような粒特性を有するものを同一品種であると断定することはできない。しかし、類似した粒特性をもつものが同じ品種である(あるいは共通祖先をもつ)確率は存在し、少なくともその確率は、粒特性の異なる品種の場合よりもはるかに高いことは当然である。
- 10) 粒型分類については、菜畑遺跡のものを一例として次に示す。 菜畑遺跡(縄文晩期): 粒幅は狭粒(15%)を含む中幅粒(80%)で、

菜畑遺跡 (縄文晩期): 粒幅は狭粒 (15%) を含む中幅粒 (80%) で、粒長は短粒 (57%) を主として、極短粒 (22%) と中長粒 (22%) が含まれる。粒型は、5・3型 (47%) を主として、他に5・5型 (19%) と5・1型 (14%) などを含むジャポニカ・タイプ93%の中幅の短粒種である。

#### ② 後谷V遺跡の古代稲の粒特性

本遺跡の炭化米資料 (V-1, 2, 5, 7, 10) の粒特性 (表17, 18) は、上述の松菊里遺跡及び北部九州の6遺跡・7資料の粒特性 (表15, 16) との比較を行った。なお、例えば菜畑遺跡 (縄文時代) の粒型特徴を示すものは菜畑縄文型などと呼ぶことにした。

本遺跡の粒形質の平均値は、全体的には菜畑縄文型と立岩型の中間的特性を示したが、V-2と V-10は菜畑縄文型に、V-1とV-5は立岩型にそれぞれ類似した。しかし、V-7はかなり狭粒であり、両粒型とはやや異なるものであった。

- 1) 菜畑縄文型は、中幅・短粒の5・3型(47%)を中心に中幅・極短の5・1型(14%)と中幅・中長粒の5・5型(19%)を含み、さらに狭粒15%と広粒6%がみられる。ジャポニカ・タイプ93%の中幅・短粒種で、多型的粒型変異を示す。この粒型にはV-2とV-10が類似したが、両者はいずれも菜畑縄文型に比べて粒型変異が大きくより多様性を示す。粒型分布をみると、V-2とV-10には菜畑遺跡にはみられなかった中幅・長粒の5・7型(5-6%)が含まれ、狭・短粒の3・3型(10-11%)が多く、また、インディカ・タイプの粒型(18-20%)をもかなり含まれる。このような多型的粒型変異から、V-2とV-10は、短粒品種に立岩型に類似した中長粒品種(米粒写真V2,及びV10の①,②,③,④,⑤)が混入したような混合品種と考えられる。
- 2) 立岩型は、ほとんどが中幅・中長粒の5・5型(62%)と中幅・短粒の5・3型(34%)より成る粒揃いの良いものである。この粒型にはV-1とV-5が類似するが、両者はいずれも5・3型と5・5型を中心にした多型的粒型変異を示す。この両資料は、前資料のV-2及びV-10に比べて中長粒以上の長粒(34%と48%)がより多く含まれ、前資料と同様に混合品種と考えられるが、短粒品種に中長粒品種がより多く混入したものであろう。米粒写真(第50図-2)では、それぞれの上段に配列したものがほぼ中長粒型に属するものである。
- 5) 菜畑縄文型と立岩型の中間的な大きさで狭・短粒を多く含むV-7は、両品種の混合集団から島根県の山陰型気候に適応したものが選択されて、新しい地方品種に分化した可能性が高いが、あるいは、全く北部九州とは別系譜の起源をもつものかも知れない。今後の周辺域の古代稲の調査が必要であろう。
- 6) 粒長/幅比は1.74-1.81でやや大きく、インディカ・タイプの粒型を20%近く含むやや狭粒型の傾向を示した。粒厚は1.64-1.78mmで、立岩遺跡のものと同程度の薄粒であった。
- 7) 粒型変異が大きく粒厚がやや薄粒であったことから、この地方の中世の稲の栽培条件・技術はまだ十分に改良されたものではなかったと考えられる。
- 8) 本遺跡の5資料の粒特性が、全体的傾向としては、より大きな多型的粒型変異を示し、短粒の菜畑遺跡のものと遠賀川上流に所在する立岩遺跡の狭粒性の中長粒種との中間的なものであったことは、本遺跡の稲作起源を示唆するものと考えられる。すなわち、日本の稲作が北部九州に始まったとするならば、本遺跡が所在する島根県斐川町一帯には、玄海灘に面する九州北岸から響灘を経て日本海を沿岸沿いに海路によって、または沿岸沿いの陸路によって古代稲作が伝わったことは十分に考えられる。

また、立岩遺跡が玄海灘と響灘の間に河口を開く遠賀川の上流に所在し、さらに立岩遺跡の古代稲に類似するものが、峠を1つ越えた鳥栖市の安永田遺跡と八女市の岩崎遺跡にみられることは、古代の稲作起源と地域間交流を考える上で甚だ興味あることである。

もちろん、本遺跡が所在する斐川町が日本海に北流する斐伊川流域の簸川平野北部に位置することも、上記のような稲作起源には重要な要素になるものであろう。

9) 以上のように、本地域への古代稲作の最初の伝播は九州北部沿岸域からの日本海沿いの東伝であった可能性が高いが、九州からの伝播・普及の過程のなかで、時代とともに産地の異なる品種が持ち込まれて混合して地方特有の混合品種になったものと、人為的選択と品種の地域的適応によって新たな地方品種が誕生したものとが混在していたと考えられる。

(炭化米資料の分析にあたっては、金築 基氏と宍道年弘氏に大変お世話になった。)

## (3) 要約

- 1) 奈良時代から平安時代の後谷V遺跡(島根県斐川町)から出土した炭化米の5資料(V-1, 2, 5, 7, 10)について、その粒形質の接写写真による精密調査を行い、北部九州及び韓国の7遺跡・8資料の粒特性を基準として、本遺跡の稲粒特性を比較し、本遺跡の稲の系譜と稲作起源についての考察を行った。
- 2) 本遺跡の炭化米の5資料は、唐津市の菜畑遺跡のものと遠賀川上流の立岩遺跡のものの中間 的な粒特性を有し、より大きな多型的粒型変異を示した。このことから、本遺跡の稲作は両遺 跡から伝播したが、稲品種は両遺跡の古代稲品種が混合した可能性が十分に考えられるとした。 さらに、稲の伝播ルートとして、海岸沿いの海路と陸路の可能性について論じた。

# 参 考 文 献

- 1. 稲作史研究会 1954. 出土古代米. 盛永俊太郎監修, 農林協会.
- 2. Kato, S. 1930. On the affinity of the cultivated varieties of the rice plants, *Oryza sativa* L. J.Dep.Agr., Kyushu Imp.Univ. 2: 241-276.
- 3. 松尾孝嶺 1952. 栽培稲に関する種生態学的研究. 農技研報 D3: 1-111.
- 4. 盛永俊太郎 1957. 日本の稲. 養賢堂, 東京.
- 5. 中山平次郎 1923. 焼米を出せる竪穴址. 考古学雑誌 14 (1).
- 6. 佐藤敏也 1971. 日本の古代米. 雄山閣, 考古学選書 1, 東京, 346pp.
- 7. 和佐野喜久生 1990. 江南行-日本稲のルーツを求めて. 稲-その源流への道. 29-33. 東アジア文化交流史研究会.
- 8. 和佐野喜久生 1992. 稲粒からみた日本稲作の源郷. 考古ジャーナル 337.: 12-18.
- 9. 和佐野喜久生 1992. 鴨都波遺跡の炭化稲穀粒. 鴨都波12次概報・奈良県御所市教育委員会 70-78.
- 10. 和佐野喜久生 1993. 九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究. 育種学雑誌 43: 589-602.
- 11. 和佐野喜久生 1995. 稲作の江南起源説. 講座・文明と環境 第3巻 農耕と文明. 朝倉書店, 東京. 143-167.
- 12. 和佐野喜久生 1995. 東アジアの古代稲と稲作起源. 東アジアの稲作起源と古代稲作文化. 文部省科学研究費による 国際学術研究、報告・論文集(和佐野喜久生・研究代表・編集). 1-52, 331pp.
- 13. 安田貞雄 1927. 日本太古の米. 農業及園芸 2: 981-982.

表13 稲粒 (米、籾) 特性の指数、指数別階級値及び特性の表現法 (和佐野、1995)

	- 4					
八八水子中土小牛			特性指数	(階級値)		
米粒特性	1	3	5 *	7	9	10
粒長(mm)	(3.5) 極短粒	(4.1) 短粒	(4.7) 中長粒	(5.3) 長粒	(5.9) 極長粒	(6.5) 極大長粒
粒幅 (mm)	(1.3) 極狭粒	(1.9) 狭粒	(2.5) 中幅粒	(3.1) 広粒	(3.7) 極広粒	
粒厚 (mm)	(0.7) 極薄粒	(1.3) 薄粒	(1.9) 中厚粒	(2.5) 厚粒	(3.1) 極厚粒	
長/幅比		(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	
籾粒特性	1	3	5	7	9	10
粒長 (㎜)	(5.3) 極短粒	(5.9) 短粒	(6.5) 中長粒	(7.1) 長粒	(7.7) 極長粒	(8.3) 極大長粒
粒幅 (mm)	(1.9) 極狭粒	(2.5) 狭粒	(3.1) 中幅粒	(3.7) 広粒	(4.3) 極広粒	<del></del>
粒厚 (mm)	(1.3) 極薄粒	(1.9) 薄粒	(2.5) 中厚粒	(3.1) 厚粒	(3.7) 極厚粒	
長/幅比	_	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	

<sup>\*: 4.4</sup>nm \( \) 中長粒 (4.7nm) \( \) < 5.0mm, 2.2nm \( \) 中幅粒 (2.5nm) \( \) < 2.8mm \( \) 1.6nm \( \) 中厚粒 (1.9nm) \( \) < 2.2nm, 1.4nm \( \) 中形粒 (1.7nm) \( \) < 2.0nm

表14 稲粒 (米, 籾) の粒長・粒幅指数による粒型分類 (和佐野、1995)

		· · · · · · · · · · · · · · · · · ·	- (11)	- 1			•,	
				粒 長	指 数			粒幅表現
		1	3	5	7	9	10	似怕衣况
الحال	1	1・1型	1・3型			_		極狭粒
粒痘	3	3•1型J*	3・3型	3・5型	3•7型	3•9型	3 •10型	狭 粒
幅 指	5	5•1型J	5 • 3 型 J	5•5型J	5•7型	5・9型	5 •10型	中幅粒
数数	7	7・1型J	7•3型J	7 • 5 型 J	7•7型J	7•9型	7 •10型	広 粒
女人	9	**	_	_		Name of Street, Street	_	極広粒
粒長	表現	極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒	

<sup>\*</sup> J: 従来の分類法による長/幅比・2.0以下のジャポニカ・タイプにほぼ相当する。

表15 北部九州及び韓国の比較・対照遺跡の炭化米粒特性(和佐野、1995)

遺跡名	松菊里	菜畑	菜畑	板 付	瑞穂	立 岩	川の上	吉野ケ里
時 代	B.C. 5	縄文晩期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生中期
所在地	忠清南道	唐津市	唐津市	福岡市	福岡市	飯塚市	豊津 町	佐 賀 県
長 (mm)	4.02	4.11	3.93	4.19	4.17	4.46	4.58	4.60
S.D.*	0.37	0.35	0.28	0.24	0.24	0.21	0.27	0.19
幅 (mm)	2.34	2.45	2.38	2.64	2.77	2.49	2.68	2.83
S.D.	0.27	0.23	0.20	0.18	0.19	0.14	0.17	0.13
厚 (mm)	1.59	1.93	1.95	1.80	1.86	1.74	2.01	1.98
S.D.	0.23	0.22	0.24	0.13	0.15	0.12	0.15	0.13
長/幅比	1.73	1.69	1.66	1.59	1.51	1.80	1.71	1.63
S.D.	0.12	0.17	0.12	0.11	0.11	0.13	0.14	0.10
長幅積	9.5	10.1	9.4	11.1	11.6	11.1	12.3	13.0
S.D.	1.71	1.5	1.29	1.14	1.20	0.80	1.12	0.83
長幅厚積	15.5	19.6	18.5	19.9	21.6	19.3	24.6	25.8
S.D.	4.08	4.24	4.25	2.82	3.33	2.16	3.30	2.60
調査粒数	122	155	38	120	100	100	100	180

<sup>\*</sup>S.D.: 生標準偏差

<sup>\*\*-:</sup>本報告の資料中にはみられなかった。

表16 北部九州及び韓国の比較・対照遺跡の炭化米粒の粒型分布表(和佐野、1995)

		松菊里	(122	粒) 粒:	長指数		計	瑞穂	(100	粒) 粒	長指数		計
		1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)
J. I.	1	3					3						
粒帽	3	14	6				20	1					1
幅指	5	6	60	13			79	4	45	8			57
数									35	7			42
計	(%)	23	66	13			102	5	80	15			100
		菜畑縄	文(155	粒)				立岩	( 99	粒)			
	1												
粒幅	3	8	5	2			15		1			W182-12-1	1
幅指	5	14	47	19			80		34	62			96
数	7		5	1			6	-	1	1			2
	9										23-1111		
計	(%)	22	57	22			101		36	63			99
		菜畑弥生	生 (38	粒)				川の上	(100	粒)			
W-L	1												
粒幅	O	13	3				16						
指	9	18	53	11			82		21	54	3		78
数	7		3				3		2	21			23
	9												
計	(%)	31	59	11			101		23	75	3	-	101
		板付	(120	粒)				吉野ケ	里(180	粒)			
粒	1 3												
幅	5	5	58	15			78		6	33	1		40
指数			13	. 8			21		7	54			61
XX	9												
計	(%)	5	71	23			99		13	87	1		101

表17 後谷 V 遺跡の炭化米粒特性表

発掘 No.	V-1	V-2	V - 5	V-7	V-10
時 代	奈良平安	奈良平安	奈良平安	奈良平安	奈良平安
No.	1	2	3	4	5
長 (mm)	4.30	4.23	4.40	4.27	4.18
S.D.*	0.439	0.379	0.378	0.383	0.402
幅 (mm)	2.47	2.43	2.47	2.37	2.41
S.D.	0.228	0.239	0.230	0.178	0.217
厚 (mm)	1.74	1.71	1.78	1.64	1.70
S.D.	0.167	0.165	0.168	0.126	0.171
長/幅比	1.75	1.76	1.80	1.81	1.74
S.D.	0.234	0.233	0.248	0.177	0.197
長幅積	10.61	10.26	10.87	10.11	10.10
S.D.	1.45	1.35	1.31	1.33	1.47
長幅厚積	18.66	17.65	19.48	16.69	17.24
S.D.	3.66	3.51	3.57	2.94	3.60
調査粒数	100	90	102	106	114

\*S.D.: ±標準偏差

表18 後谷 V 遺跡の炭化米の粒型分布表

		V-1	(100粒)	) 粒長	指数		計	V-7	(106粒	) 粒長	指数		計
		1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)
	1												
粒幅	3	5	2	3			10	2	16	4			22
幅指	5	6	45	25	5		81	6	39	27	5		77
指 数	7	1	7	1			9		1	1			2
	9												
計	(%)	12	54	29	5		100	8	56	32	5		101
	S	V-2	(90粒)	)				V - 10	)(114粒	)			
باداء	1												
粒幅	3	3	10	2			15	5	11	4			20
指	5	9	51	12	6		78	7	50	15	5		77
数	7		6	1			7		4				4
	9												
計	(%)	12	67	15	6		100	12	65	19	5		101
		V - 5	(102粒)	)									
ᄱᅩ	1												
粒幅			4	5			9						
幅指	5	5	39	34	7		85						
数	7		4	2			6						
	9												
計	(%)	5	47	41	7		100						



第50図-1. 遺構 V-1, 2, 5 の炭化米粒写真

縮尺1目盛:1ミリ



第50図-2. 遺構V-7, 10の炭化米粒写真

# 2. 後谷 V遺跡出土炭化米の1℃ 年代測定結果について

柴 田 せつ子・川 野 瑛 子

## (1) 測定試料

① 後谷V遺跡 炭化米

## (2) 測定原理及び測定方法

試料の年代はメタノール・液シン法により測定した。使用機種はパッカード社製2260XL型を用いた。

## (3) 試料調整

試料は、IN-塩酸処理を行い、管状電気炉を用い窒素気流中で $600^{\circ}$ C、6 時間処理した炭化物を、反応に供した。炭化物試料からメタノールの合成は燃焼により $CO_2$ とし、この $CO_2$ をLiAIH $_4$ と反応させメタノールを合成した。

#### (4) 年代測定結果

試 料 名	当方コード	年代值 B.P.	測定時間(分)
後谷V遺跡	OR - 106	$1\ 3\ 3\ 0\ \pm\ 4\ 0$	4 0 0 0
炭 化 米			

 $A_0$ としてはNISTシュウ酸(SRM4990C)の実測値から算出した値(13.404  $\pm$  0.036dpm/gC)を用いた。

また、年代値における誤差は液シン測定におけるもののみとした(誤差は1シグマで表示)。

#### (5) 曆年代(較正年代)

Libbyによって確立された "C年代測定法は、近年詳細にみると宇宙線の強度変化による" C生成量の変動や生物体内に取り込む炭素の同位体分別などによりその前提条件が完全には満たされていないことが報告されている。アメリカ、ドイツ、アイルランド等において、年輪およびサンゴを10~20年単位で精度よく測定することによって、現在から約2万年前に遡って過去の大気中の"C農度が明らかにされている。最近、これらの測定データを用いて、"C年代から暦年代を求める較正曲線計算ソフトが開発された。(CALIB rev 3.03, Stuiver, M. and Reimer, P. J., 1993, Radiocarbon, 35, p.215–230)。

<sup>\*</sup> 大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター

また、"C年代値には必ず測定誤差が伴い、その相対誤差1%は80年となる。誤差は、通常1標準誤差(1シグマ)で表示、繰り返し測定を行った場合測定値が誤差の範囲に入るものが全測定の68%であることを意味する。2標準誤差(2シグマ)をとる場合は誤差の範囲は2倍になるが95%がその範囲に入る。最後に前述のCALIB rev. 3.03の較正曲線を用いて"C年代から暦年代(範囲と確率)を算出した。

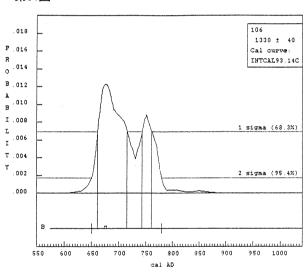
表19および図51、図52に測定結果を示す。

表19

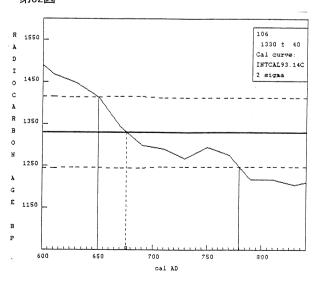
Calibration file (s): INTCAL93. 14C

% area enclosed	cal AD age ranges	relative area under
		probability distribution
68.3 (1シグマ)	cal AD 661-715	.79
	743-761	.21
95.4 (2 シグマ)	cal AD 650-780	1.00





## 第52図



# 3. 後谷 V 遺跡発掘調査にかかる電気探査

浜崎 晃

#### (1) はじめに

平成4年から後谷V遺跡発掘調査に先立ち、地盤の堆積状況、礎石、住居跡等の概略を事前に把握することを目的とした高密度電気探査を行った。

その結果得られたデーターを遺跡発掘の参考資料とした。

これまで行った後谷V遺跡に関する高密度電気探査結果を以下にまとめる。

## (2) 高密度電気探査

電気探査とは地盤を構成している土、地下水、岩石の電気的抵抗の差異に着目して人工または自然に発生した電解を地表で測定し、そのデーターから地下構造、特に断層・破砕帯及び地下水脈を推定する探査方法である。

一般的に使用され、今回も使用したのは人工的に地盤に電気を流し、比抵抗を測定する比抵抗法 である。

地盤の比抵抗を測定するには2本の電位電極と更に2本の電流電極を使う。これらの電極の配置からいろいろな測定方法が考え出され、中でも代表的なものにWenner法があり一般的によく使用されている方法である。

その電極配置及び測定方法を第53図に示す。

また、電流電極 $C_1$ 、 $C_2$ 間に流れる電流をI、電位電極 $P_1$ 、 $P_2$ 間の電位をVとするとその時の大地抵抗は次式により求まる。

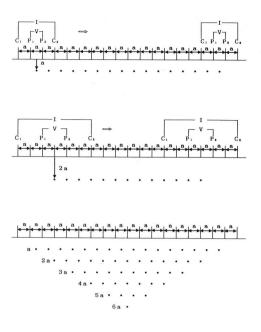
$$\rho_a = 2 \pi a \frac{V}{1}$$
 (a:電極間隔)

この測定によって得られた見掛け比抵抗値によって比抵抗図及び比抵抗区分図を作成し、地下内 部構造を推定する。

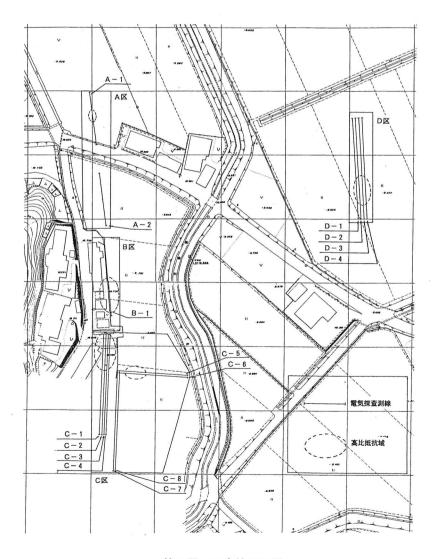
## (3) 調査結果と解釈

第54図 調査地平面図に示すように4地区で高密度電気探査を行った。 各区毎に代表的な比抵抗図を示し、結果の解釈をまとめる。

<sup>\* (</sup>株)日本海技術コンサルタンツ



第53図 測定結果の表示



第54図 調査地平面図

#### A区

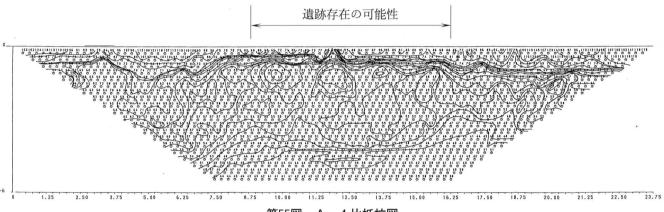
当区においては道路を挟み南北方向に2本の電気探査を行った。

これら2本の電気探査結果から遺跡存在の可能性がある反応が見られたのは図中に示すA-1測線である。

A-1測線について比抵抗図を示す(第55図)。

比抵抗図に示すように測線中央付近に見掛け比抵抗値が $50\Omega$ -m以下となっており、比抵抗等値線がリング状になっている。

通常、礎石等周りの地盤より比抵抗値が高い場合、リング状の比抵抗値の高まりが見られるが今回は逆に低くなっており、礎石等の可能性は低い。しかし、周りの地盤とは比抵抗値の違いが見られることから何らかの遺跡が存在している可能性がある。



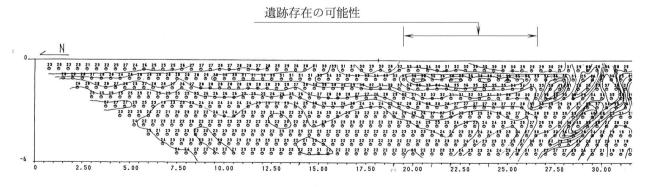
第55図 A-1比抵抗図

## B区

当区においては調査地平面図に示すように南北方向に1本の電気探査を行った。 この測線について比抵抗図を示す(第56図)。

図中に示すように見掛け比抵抗値の高まり( $35\Omega$ -m以上)がリング状に分布しており、周りの地盤との違いが見られる。

この事から、図に示す位置での遺跡存在の可能性があげられる。



第56図 B-1比抵抗図

#### • C区

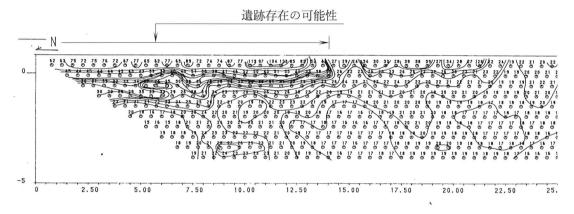
当区においては南北方向に 4 本、東西方向に 2 本の電気探査を行った。

これらの中で代表的な測線について比抵抗図を示す(第57図)。

比抵抗図に示すように起点(N方向)側から約15m付近までの表層部の比抵抗値が高く、凹状の形状を示している。この範囲外では全体的に比抵抗値が $20\Omega$ -m前後の一様な地盤であると考えられる。

この事から遺跡存在の可能性がある位置としては起点側から約15m付近までの地盤内であると考えられる。しかし、現地においてはこの比抵抗値が高くなっている位置は畑となっている事から表層部の比抵抗値が高くなることが考えられるため、比抵抗図に示すような比抵抗の高まりはその影響である可能性もある。

何れにしても遺跡存在の可能性があるとしてこの地点をあげる。



第57図 C-3比抵抗図

#### • D区

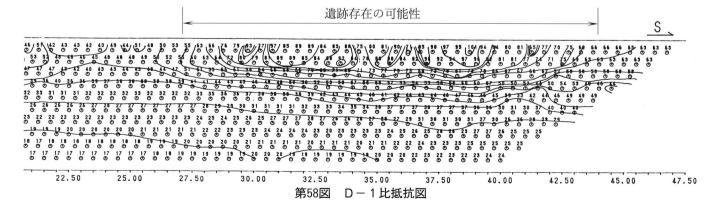
当区においては調査地平面図に示すように南北方向に4本の電気探査を行った。

これらの中で代表的な測線について比抵抗図を示す(第58図)。

比抵抗図に示すように一見きれいな層状を示しているが起点側(N方向)より27m付近で比抵抗等値線が密になり、周りに比較して比抵抗値が高くなっている。

この事はその付近の地盤の状況が周りとは異なる事を示している。

ここでこの地区の南側で行われていた発掘現場を見るとあまり大きくない礎石が数多く発掘 されており、その状況が一種の砂礫層と考えることができる。



83

この場合リング状の高比抵抗域が現れずに比抵抗等値線が密になる変化が見られると考えられる。

したがって、比抵抗図に見られる変化は遺跡存在の可能性があると考えられる。

# (4) ま と め

以上のように各地区の代表的な測線について比抵抗図を示しその結果を簡単にまとめた。 当初、この電気探査の目的としては礎石の存在箇所の特定であった。しかし、電気探査を行った結果、礎石の存在箇所の特定は非常に困難であることがわかった。

電気探査である程度把握する事ができるのは地下の堆積構造であり、比抵抗等値線の変化から遺跡存在の可能性がある地層、範囲を推定する事ができると考える。

したがって、発掘調査に入る前に電気探査を行い、遺跡存在のある範囲をある程度推定し、その データーを基に発掘調査ができると考える。

特に調査地のように地表の大部分が水田となっており地下の状態が全く推定できない場合には遺 跡発掘の事前資料となるのではないだろうか。

# V 出雲国風土記の正倉

関 和彦

## 1. はじめに

斐川町後谷 V 遺跡は、1991年度の県道木次直江停車場線改良事業の事前調査で確認され、翌年以降の本格的調査で、その姿を現した。確認された大形倉庫群は、立地の上からも、周囲の歴史的環境からみても、当該地域における重要な遺構と考えられた。当遺跡の所在地は、前々から出雲郡家の推定地とされていた場所であり、発見された大形倉庫群は出雲郡家付設の正倉として認定されるに至った(1)。

当遺跡の所在地は、『出雲国風土記』によれば、出雲郡出雲郷に属すことが明らかであり、その『出雲国風土記』には数少ない奈良時代の正倉を語る記事が集積しており、考古学・文献古代史の両面から考察が可能な遺跡である。それ故、古代の地域社会における郡レベルでの律令行政の浸透、その具体的あり方を考察する上で貴重な事実を提供すると思われる。

この小論は、文献史学の立場から、『出雲国風土記』の正倉記事を検討し、発掘で明らかになった出雲郡家正倉像に幾つかの補足的な知見を提供することを目指し、ひいては奈良時代の正倉のあり方について一言することを目的とする。

# 2. 『出雲国風土記』の正倉記事

本論が検討対象とする『出雲国風土記』にみえる正倉記事を示そう(2)。

#### [意宇郡条]

①山國郷 郡家の東南のかた卅二里二百卅歩なり。布都努志命の國巡りましし時、此處に來まして 詔りたまひしく、「是の土は、止まなくに見まく欲し」と詔りたまひき。故、山國といふ。即ち正 倉あり。

②舎人郷 郡家の正東廿六里なり。志貴嶋宮御宇天皇の御世、倉舎人君等が祖、日置臣志毗、大舎人供へ奉りき。即ち是は志毗が居める所なり。故、舎人といふ。即ち正倉あり。

③山代郷 郡家の西北のかた三里一百廿歩なり。所造天下大神、大穴持命の御子、山代日子命坐す。 故、山代といふ。即ち正倉あり。

<sup>\*</sup> 共立女子第二中 · 高等学校

④拜志郷 郡家の正西廿一里二百一十歩なり。所造天下大神命、越の八口を平けむとして幸しし時、 此處の樹林茂り盛りき。その時、詔りたまひしく、「吾が御心の波夜志」と詔りたまひき。故、林 といふ。(神龜三年、字を拜志と改む。) 即ち正倉あり。

⑤賀茂神戸 郡家の東南のかた卅四里なり。所造天下大神命の御子、阿遲須枳高日子命、葛城賀茂社に坐す。此の神の神戸なり。故、鴨といふ。(神龜三年、字を賀茂と改む。)即ち正倉あり。

## [嶋根郡条]

⑥手染郷 郡家の正東一十里二百六十歩なり。所造天下大神命、詔りたまひしく、「此の國は、丁寧に造れる國なり」と詔りたまひて、故、丁寧と負せ給まひき。しかるに、今の人猶誤りて手染郷と謂へるのみ。即ち正倉あり。

#### 〔出雲郡条〕

⑦漆沼郷 郡家の正東五里二百七十歩なり。神魂命の御子、天津枳比佐可美高日子命の御名を、又、 薦枕志都沼値といひき。此の神、郷の中に坐す。故、志刀沼といふ。(神龜三年、字を漆沼と改む。) 即ち正倉あり。

⑧美談郷 郡家の正北九里二百卅歩なり。所造天下大神命の御子、和加布都努志命、天地の初めて 判れし後、天の御領田の長仕へ奉りましき。即ち、彼の神、郷の中に坐す。故、三太三といふ。 (神龜三年、字を美談と改む。)即ち正倉あり。

#### [飯石郡条]

⑨三屋郷 郡家の東北のかた廿四里なり。所造天下大神の御門、即ち此處にあり。故、三刀矢といふ。(神龜三年、字を三屋と改む。)即ち正倉あり。

⑩須佐郷 郡家の正西一十九里なり。神須佐能袁命、詔りたまひしく、「此の國は小さき國なれども、國處なり。故、我が御名は石木には著けじ」と詔りたまひて、即ち、己が命の御魂を鎭め置き給ひき。然して即ち、大須佐田・小須佐田を定め給ひき。故、須佐といふ。即ち正倉あり。

①來嶋郷 郡家の正南卅六里なり。伎自麻都美命、坐す。故、支自眞といふ。(神龜三年、字を來嶋と改む。)即ち正倉あり。

#### [仁多郡条]

⑩三澤郷 郡家の西南のかた廿五里なり。大神大穴持命の御子、阿遲須枳高日子命、御須髪八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通はざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を

率て巡りてうらがし給へども、猶哭き止みまさざりき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎませば、その夜、御子み辭通ふと夢見ましき。則ち、寤めて問ひ給へば、その時「御澤」と申したまひき。その時、「何處を然いふ」と問ひ給へば、即て御祖の前を立ち去り出でまして、石川を度り、坂の上に至り留まり、「是處」と申したまひき。その時、其の澤の水活れ出でて、御身沐浴みましき。故、國造、神吉事奏しに朝廷に參向ふ時、其の水活れ出でて、用る初むるなり。此に依りて、今も産める婦は、彼の村の稲を食はず、若し食ふ者あらば、生るる子已に云はざるなり。故、三澤といふ。即ち正倉あり。

⑬横田郷 郡家の東南のかた廿一里なり。古老の傳へていへらく、「郷の中に田あり。四段ばかりなり。形聊か長し。遂に田に依りて、故、横田といふ。即ち正倉あり。

⊕飯石郡の堺なる漆仁川邊に通るは、廿八里なり。即ち、川邊に藥湯あり。一たび浴すれば、則ち身體穆平らぎ、再び濯げば、則ち萬の病消除ゆ。男も女も、老いたるも少きも、夜晝息まず、駱驛なり往来ひて、験を得ずといふことなし。故、俗人號けて藥湯といふ。即ち正倉あり。

#### 〔大原郡条〕

⑮屋代郷 郡家の正北一十里一百一十六里なり。所造天下大神の垜立てて射たまひし處なり。故、 矢代といふ。(神龜三年、字を屋代と改む。)即ち正倉あり。

この15に及ぶ正倉記事は幾つかの問題を提起している。その点に関しては、すでに加藤義成氏が「律令出雲の正倉」において3点指摘している $^{(3)}$ 。

- 1 出雲国では郡家の近くに正倉を置いた例があるだろうか。
- 2 出雲国以外でも郷庁の近くに正倉を置いた例があるであろうか。
- 3 出雲国の正倉設置には特別な事情があったのであろうか。

『出雲国風土記』の正倉記事を通覧していくと、正倉は確かに郷に設置され、郡家にはその記述はみえない。加藤氏の1の疑問が起こる所以である。今回の後谷 V 遺跡は、『出雲国風土記』が語らない出雲郡家付設の正倉の存在を示す貴重な事例である。

『出雲国風土記』は秋鹿・楯縫・神門郡の正倉について言及しない。しかし、それは「即、その三郡に正倉がなかったことを意味しない」ということが、後谷V遺跡で証明されたのである。秋鹿・楯縫郡はともに4郷からなる「下郡(戸令定郡条・四里以上を下郡と為す)」であり、後谷V遺跡の出雲郡正倉のように郡家に正倉が付設され、事足りていたのであろう。当然、神門郡の場合も8郷余の「中郡(戸令定郡条・八里以上を中郡と為す)」であり、神門郡家に正倉が付設されていたものと考えられる。

# 3. 『陸奥国風土記』逸文の正倉

古代出雲の正倉を考える上で、後谷 V 遺跡とともに重要なのが松江市山代町の団原遺跡である。 それは史料③の山代郷の正倉跡とされている。『出雲国風土記』によれば、山代郷の「郷家」は意 宇郡家の「西北のかた三里一百廿歩」、すなわち西北1.8キロの地点であり、団原遺跡は、その「郷 家」の近くに位置し、郷家近接設置の正倉の具体例として注目されている。

郷に置かれた正倉を理解する上で重要な史料は、延暦14(795)年7月15日の太政官符である4。

諸国、郡の倉を建てるに元一倉を置く。百姓の居、郡を去る僻遠にして、山川を跋渉し、納貢に 労あり。倉舎を以て比近に加ふべし。甍宇相接し、一倉失火せば、百倉共に焼け、其の弊言念ず。 公私に損あり。すべからく郷毎に一院を置くべし。以て百姓済われ、兼ねて火祥を絶つ。

これによれば正倉は郡家に唯一置かれ、その為、貢納の「百姓」に労が多く、また火災の類焼での損失も多かったことがうかがえる。そこで太政官は、公私 2 点から郷毎に正倉を作れという布告を出すのである。

しかし、郷に置かれた正倉は明らかに『出雲国風土記』に確認できるのであり、事情により、同様の施策はすでになされていたのであろう。それは出雲国に限定されるものではなく、全国的な現象であったと思われる。

ここで注目されるのが『陸奥国風土記』逸文の八槻郷の記事である。この逸文は福島県東白河郡棚倉町八槻の都々古別神社別当大善院に伝わるものであり、奈良時代の古『風土記』と考えられるものである<sup>(5)</sup>。

陸奥国風土記に曰はく、八槻と名づくる所以は、巻向日代宮御宇天皇の時、日本武尊、東夷を征伐ちて、此の地に到りまし、八目の鳴鏑を以て、賊を射て斃したまひき。其の矢の落下ちし處を矢着と云ふ。即ち正倉あり。(神龜三年、字を八槻と改む。)古老の傳へて云へらく(以下、略)。

以下、古老伝承がつづくが、注目したいのは「即ち正倉あり。(神龜三年、字を八槻と改む。)」の部分である。神亀3年の郷名改名は『出雲国風土記』総記の「其の郷の名の字は、神龜3年の民部省の口宣を被りて、改めぬ」に対応する表記である。加藤義成氏は『出雲国風土記』の神亀3年民部省の口宣に言及し、「こんな口宣が伝達されたことも他書に全く見えない」とするが<sup>(6)</sup>、『陸奥国風土記』逸文は、その存在を示す貴重な史料と評価できよう。

またその神亀3年の郷名改名と同時に本論が課題とする「即ち正倉あり」の記述がみえる点も『出雲国風土記』に対応し、興味深いところである。

『陸奥国風土記』の成立年代は不明であるが、秋本吉郎氏は、八槻郷が磐城「国」内であること

をおさえ「磐城国は養老二年に初めて置かれたが延喜式・和名抄では陸奥国に属している。本条は 養老以前磐城国分置以前か、再び陸奥国の合併後か明らかでない」とする<sup>(7)</sup>。

神亀3 (726) 年の郷名改名記事の存在は、当然のこととして養老2 (718) 年以前『陸奥国風土記』成立説は消えることになろう。磐城国の陸奥国再統合が神亀元年頃とする見解によるならば、その成立は、『出雲国風土記』の成立時期前後に求めることができよう。両『風土記』の記述の類似性がそれを暗示していると考える。

八槻郷は律令制下においては陸奥国白河郡に属していた。その白河郡家址は西白河郡泉崎村の関和久遺跡とされており、郡家址の南側には3棟の正倉の存在を示す溝に囲まれた建物の柱穴が確認されている。白河郡家付設の正倉院である<sup>(8)</sup>。延暦14年の先の太政官符によれば、白河郡には郡の正倉院が「一元」として存在していたはずであるが、それとは別に白河郡八槻郷に正倉が設置されていたのである。

後谷 V 遺跡の出雲郡家付設の正倉と史料⑦の漆沼郷・⑧の美談郷の正倉の関係を、そこにみることができよう。陸奥・出雲と東西に離れた 2 地域で確認されるこの現象を 2 地域の特殊性と規定することは出来ないであろう。郡家以外に正倉が置かれたのは、その数は別として、『出雲国風土記』にみるように一般的であった、と考えられる。

# 4. 正倉記事の検討 ――「即ち」考 ――

郷所在の正倉は、山代郷正倉の例などから「郷家」の近くに設けられていると考えられている<sup>(9)</sup>。 しかし、史料⑭の正倉は、飯石郡堺の漆仁川邊の薬湯付近にあったとする。1例とはいえ、貴重な 知見である。その点をふまえると、他の13例の正倉がすべて郷家の近くであったという根拠は何も ないといえよう。

ここで「正倉は郷家付設」という認識を植えつける言葉、「即ち」に注目してみたい。『出雲国風 土記』の正倉はすべて、地名起源伝承の後に「即ち正倉あり」という形式でその存在が語られてい る。では「即ち」とはどういう意味で使用されているのであろうか。

われわれは、「即ち」を一般的には、前の文章で述べたことを、別の文章で言い直す時に使ったり、前にあげたものと、続けてあげるものが一致する場合などに使う用語として多用している。 ここで試みに『出雲国風土記』楯縫郡楯縫郷条の記事を見てみたい。

楯縫郷 即ち郡家に属けり。(名を説くこと、郡の如し。)即ち、北の海の濱の業利磯に窟あり。

この後出の「即ち」は前文と直接関係ないところで使用されていることがわかるであろう。『時代別国語辞典(上代編)』は「すなはち」に、〔即座に、直ぐに〕・〔そこで〕・〔さて〕の3 用法があることを事例をもって示す (10)。 楯縫郷の後出の「即ち」は〔さて〕に相当する「ところで」に近い用法といえるであろう。意字郡条の安来郷伝承の「故、安来といふ。即ち、北の海に毘売埼あ

り」も同様の事例である。『時代別国語辞典』はこの安来の事例を挙げ、「話題を転じて次の文を引き起こす、接続詞的」な用法とする。

「楯縫郷 即ち郡家に属けり」の「即ち」の用法は、『時代別国語辞典』にはない事例であり、 「それは」の意で用いられているのであろう。

正倉史料15例を概観すると、前文と「即ち正倉あり」が結びつきそうなのは、田地に言及する®の美談郷、⑩の須佐郷、⑬の横田郷に限定され、他の事例は「付記」の域を出ないようである。

「即ち正倉あり」を十分な検討をせず、「即ち」を雰囲気的な理解にとどめ、郷家に付設する形で正倉があったとするのは⑭の事例をもってしても問題を含むであろう。郷名起源伝承を受けて、「即ち正倉あり」とするのは直ちに正倉が郷家に付設しているということを示しているのではなく、その郷域に存在しているという意と理解すべきと考える。

ここで参考になるのが、延暦14年の先の太政官符の「百姓の居、郡を去る僻遠にして、山川を跋 渉し、納貢に労あり。倉舎を以て比近に加ふべし」である。百姓の「納貢」の困難さをふまえての 政策であるならば、その正倉の設置場所は交通の便のよいところということになろう。

⑭の飯石郡堺の漆仁川邊の仁多郡の藥湯は、現在の木次町湯村の出雲湯村温泉であり、「駱驛なり往来ひ」交通の要地であったことが判明する。⑭の事例、そして「即ち」の用法を考慮するならば、郷家付設のケースの存在も認めつつも、基本は交通路にあったと考えるべきではなかろうか。ここに正倉を考察する一つの観点が見いだせたのである。

## 5. 交通路と正倉 —— 個別的検討 ——

飯石郡では⑨三屋郷、⑩須佐郷、⑪來嶋郷に正倉が置かれていた。飯石郡内には河川に沿って波 多径、須佐径、志都美径が整備されていた。須佐郷、波多郷は須佐径・波多径に沿い、飯石郡家の 所在する多禰郷とは山を隔てた地域空間を構成している。道を中心に正倉を位置づけるならば、備 後国への道沿いの来嶋郷・多禰郷は飯石郡家付設の正倉、また飯石郷・熊谷郷・三屋郷は三屋郷内 の正倉、須佐郷、波多郷は須佐郷の正倉と割り振りがなされていたのではなかろうか。

仁多郡には⑫三澤郷、⑬横田郷、⑭飯石郡堺の漆仁川邊藥湯の三正倉がみえる。問題は⑭の漆仁川邊藥湯の所在郷であるが、岡部春平の『出雲神社考(天保4年序・弘安3年跋)』は明確に三澤郷内とする<sup>(11)</sup>。加藤義成氏作成の『出雲国風土記』地図でも三澤郷内に位置づけている<sup>(12)</sup>。

その比定に間違いがないとするならば、三澤郷には2つの正倉があったことになろう。三澤郷の領域は広大(『和名抄』では三澤・阿位・漆仁郷の三郷に分立、郷里の「里」が人口の増加により「郷」となったのか)であり、三澤郷家は郡家からの距離を勘案すると阿位付近と考えられる。

仁多郡家から備後国恵宗郡への比市山をとおる道沿いには、⑫三澤郷の正倉が、伯耆国日野郡へ

の阿志毗縁山をとおる道沿いには⑬横田郷の正倉が、郡家所在郷の三處郷には郡家付設正倉が想定 される。また、飯石郷への漆仁川沿い道には薬湯の正倉があり、道沿いの布施郷、そして三澤郷の 一部(里)の正倉として使われていた可能性が強い。

大原郡の場合は⑮屋代郷の正倉が認められる。大原郡家は当初、屋裏郷に所在していたが、『出雲国風土記』編纂段階では郡の西端の斐伊郷に移っている。屋代郷は出雲郡の多義村への道沿いにあったと考えられ、屋代郷の正倉は屋代郷とその隣郷の神原郷が使用していたと思われる。郡家から最も遠い海潮郷は、阿用郷・佐世郷・来次郷・斐伊郷とともに斐伊郷所在の大原郡家付設正倉が割り与えられていたのであろう。もと郡家が屋裏郷に所在していた段階では隣郷であったのが、郡家の移動により労を多く背負う形になったのである。飯石・仁多がそれぞれ3つの正倉を抱えているのを考慮すると、郡家移転の時期が『出雲国風土記』編纂時期に近く、正倉対策が整っていなかったからとも考えられる。

本論の出発点である出雲郡の場合は、⑦漆沼郷、⑧美談郷の正倉がみえる。ここでは出雲郡家から東への山陰道沿いに⑦漆沼郷の正倉が、郡家から北への楯縫郡への道沿いに⑧美談郷の正倉が設置されたと考えられる。漆沼郷の正倉は漆沼郷・健部郷、美談郷の正倉には美談郷・宇賀郷・伊努郷・杵築郷、出雲郡家付設正倉は出雲郷・神戸里が対応すると考えられる。

島根郡には⑥手染郷の正倉がみえる。島根郡は東西に長く、郡家から一番離れた美保郷は実に「二十七里」の距離を測る。手染郷の正倉は美保郷への道沿いに設置され、手染郷・美保郷・片江郷・千酌駅家の正倉であり、郡家正倉は郡家所在郷と考えられる山口郷、そして加賀郷・法吉郷・生馬郷・朝酌郷・余戸里に対応すると考えて間違いないであろう。

#### 6. 意宇郡・神門郡の正倉

秋鹿郡・楯縫郡には正倉はみえないが、両郡とも4郷からなる下郡であり、その郡域の狭さから 百姓の「納貢」の労は考慮されず、郡家所在正倉で処理されたのであろう。

問題は意宇郡・神門郡の正倉である。意宇郡には5つの正倉が確認できる。意宇郡をとおる基幹 道路は山陰道であり、国府・意宇郡家の位置は両隣の伯耆国、出雲郡から測るにほぼ中間の絶好地 を占めていることがわかる。意宇郡家から西の出雲郡界までの意宇郡諸郷は南北の領域が狭く、大 草郷・忌部神戸・拝志郷・宍道郷・宍道駅家と直線状に並んでおり、「納貢」の労を吸収する正倉 は、多くを必要とせず中間の拝志郷に1つ置かれたものと考えられる。

問題は意宇郡家である。何故なら、意宇郡家の正確な位置は史料上不明だからである。確かに各郷への距離は意宇郡家を中心に報告はされているが、起点の意宇郡家については何ら語ることがないからである。それは編纂主体の出雲国造が居を構えている場所であり、出雲世界の中心だったことに他ならない。しかし、意宇郡家の所在地は次の一文で垣間見られるのである。

黒田驛 郡家と同じき處なり。郡家の西北の方二里に黒田村あり。土の體、色黒し。故、黒田と

いふ。舊、此處に是の驛あり。即ち號けて黒田驛といひき。今は郡家の東に属けり。今も猶、舊の黒田の號を追へるのみ。

意宇郡家は『出雲国風土記』による限り、「郡家と同じき處なり」なりをふまえれば、行政区分では黒田駅に属していたことになろう。では意宇郡大領出雲臣廣嶋の家族の戸籍は黒田駅に登録されていたのであろうか。そこで注目したいのは、黒田駅の移動である。元は黒田駅は「郡家の西北の方二里」の地にあった。しかし、『出雲国風土記』編纂段階では「郡家と同じき處」に移動したという。注目すべきは、「郡家と同じき處」という表現は「同所」という意味ではないという点である。それは「今は郡家の東に属けり」の一文をおさえれば、意宇郡家の東側に隣接して置かれていたことが理解できよう。

この黒田駅の移動は重要である。何故なら意宇郡家の「西北二里」にあった黒田駅が意宇郡家を 頭越しに、意宇郡家の東に移されたということを意味しているからである。これは単なる駅家とい う施設の移動ではなく、駅戸を含む黒田駅という行政地域空間の移動と考えるべきではなかろうか。 黒田駅の東への移動の結果、意宇郡家から最も近い郷家は黒田駅の「西北一里」(意宇郡家からは 西北三里一百二十歩)にあった山代郷となったのである。

大胆な仮説となるが『出雲国風土記』編纂段階の意宇郡家の所在郷は山代郷と考えたい。すなわち意宇郡家は山代郷の東端に位置し、その東に黒田駅が所在していたのではなかろうか。

『出雲国風土記』によれば郡家所在郷には1例として正倉の記事はみえない。しかし、郡家には 正倉の記事が欠けていても、出雲郡家の例から正倉があったと理解すべきとしてきた。ところが意 宇郡家の所在郷が山代郷とした場合、山代郷の正倉記事は郡家所在郷の唯一の正倉記事となろう。 意宇郡家は出雲国府と同所ということから、郡家付設の正倉を離して設けたと考えたい。その地が 団原遺跡である。

意宇郡には拝志郷・山代郷の正倉以外に①山國郷、②舎人郷、⑤賀茂神戸の正倉が確認されるが、 3 正倉とも意宇郡家の東方に位置している。意宇郡家から伯耆国への山陰道沿いには余戸里、野城 駅家、舎人郷が続く。その舎人郷の正倉に対応するのが舎人郷・安来郷・飯梨郷であろう。山陰道 の舎人郷の先が山國郷であり、その正倉を楯縫郷・屋代郷・母理郷が使用したと考えられる。

賀茂神戸の正倉は特別な事情があったようである。『出雲国風土記』によれば、出雲国には賀茂神戸、忌部神戸、出雲神戸、そして秋鹿郡・楯縫郡・出雲郡・神門郡に各1つの神戸がみえる。その中で正倉が置かれたのは賀茂神戸1つのみである。この事実は何を語っているのであろうか。

忌部神戸、出雲神戸はともに出雲国一国に限定される神々(神社)に係わる神戸であるのに対して、賀茂神戸は大和国の葛城の賀茂社の神戸であり、「独立採算」的な存在であったのではなかろうか。加藤義成氏は「この神戸里にだけ特に官倉があったのは、遠い大和の賀茂社への貢米を貯えておいて、適宜所要の品物と代えなどして送った」とし、天平6年出雲計会帳の「賀茂神に進上る税」に注目するが、卓見である<sup>(13)</sup>。その特殊性が、他の正倉設置の諸郷(三里)よりも規模が小さい賀茂神戸(二里)に正倉を置かしめたのである。

不思議なのは神門郡である。神門郡は8郷・余戸・駅家2・神戸で構成されており、出雲国内では 意宇郡に次いで大きな郡となる。その神門郡には想定される郡家付設正倉以外に『出雲国風土記』 からは正倉は確認できないのである。

その事実を受け止める時、いくつかの解釈が可能である。まずは正倉記事の欠落という事態を想 定することも可能であるが、根拠もない、そのような解釈は方法的には「逃げ」であり、今後の研 究の進展を視野に入れた場合、取るべき方法ではない。

神戸里・余戸里・朝山郷以外は山陰道に沿っており、かつ比較的平坦であり、古志郷所在の郡家付設正倉で事足りた可能性も強い。まずは史料が語るように神門郡には郡家付設正倉以外に正倉はなかったと理解すべきであろう。その点をおさえれば、神門郡の郡家付設正倉は他郡のそれに比し、規模が大きかったのは確実である。その確認は今後の考古学の成果によるしか方法はないであろう。

文献史学から、唯一指摘できる事実は、神門郡の郡司が出雲国造と並ぶ有力在地首長である神門 臣であった点である。出雲国の正倉設置には特に基準がなく、各郡が地域の実情をふまえ施策を講 じていることをふまえれば、神門臣氏の正倉政策のあらわれともいえよう。

#### 7. おわりに

以上、『出雲国風土記』の正倉記事を交通の観点から検討してきた。『出雲国風土記』の正倉の文献史学からの本格的研究は加藤義成氏の研究以外に管見の限り見られない。その加藤氏の研究も『出雲国風土記』の正倉記事の細部に立ち入ったものではなかった。本論は交通という一つの視点で、雑駁に論じたものであり、恣意的解釈も含め、多くの問題を含んでいると思う。しかし、停滞している『出雲国風土記』の正倉の研究にささやかな刺激を与えることはできたと考える。最後に本論を通して得られた『出雲国風土記』にみられる「郷の正倉」の性格について一言し、まとめとしたい。『出雲国風土記』の正倉を、郷に所在したことをもって「郷倉」とする見解もあるが「44、そのような観点では、出雲国が国・郡・郷制下にある限り、何処に作ろうが「郷倉」となるのは当然である。検討してきたところから言えば、「郡の正倉」を地域の実情に合わせ、分置したものと理解すべきである。

延暦14 (795) 年 7 月15日の太政官符は、各地域世界の実情に合わせ展開されていた郡家正倉の 分散化現象をふまえ、全国レベルでより徹底化した「一郷一院」策として採用しようとした布告で あったのである。(本稿を執筆するにあたり、斐川町教育委員会宍道年弘氏にお世話になった。)

#### 註

(1) 『出雲国出雲郡家正倉跡(後谷 V遺跡発掘調査概報)』島根県斐川町教育委員会、1993年。『出雲国出雲郡家正倉跡 II (後谷 V遺跡第 2 次発掘調査概報)』島根県斐川町教育委員会、1994年。山中敏史「古代の役所のしくみと役割――斐川町後谷 V遺跡の調査をめぐって――」(『うやつべ』第 3 号、斐川歴史を語る会、1994年)。池田満雄・宍道年弘「郡衙と正倉跡」(山本清編『風土記の考古学・3・出雲国風土記の巻』同成社、1995年)。

- (2) 『風土記』は日本古典文学大系『風土記』(岩波書店、1977年)を使用する。尚、固有名詞の表記について は助詞を削除した。
- (3) 加藤義成「古代出雲の正倉」(『史跡出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会、1981年)。
- (4) 『類聚三代格』国史大系によるが書き下しは筆者。
- (5) 鈴木啓「『陸奥国風土記』逸文の世界」(『図説 福島県の歴史』河出書房新社、1989年)。
- (6) 加藤義成『出雲国風土記参究』(原書房、1962年)。
- (7) 秋本吉郎 註(2)に同じ。
- (8) 『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会、1994年。山中敏史・佐藤興治『古代の役所』(岩波書店、1985年)。
- (9) 「郷家」に関しては拙著『日本古代社会生活史の研究』(校倉書房、1994年)を参照。
- (10) 『時代別国語大辞典(上代編)』
- (11) 岡部春平『出雲神社考』(千家和比古氏に閲覧の機会をいただいた。郷別に事象をまとめる注目すべき編纂方法を展開する)。
- (12) 加藤義成 註(6)に同じ。参考図として加藤作成地図を付す。
- (13) 加藤義成 註(6)に同じ。
- (14) 阿部義平『官衙』(ニューサイエンス社、1989年)を参照。



# Ⅵ ま と め

#### 1. 遺物の検討

本遺跡からは縄文土器、弥生土器、古式土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、打製石斧、砥石など多時期にわたって多くの遺物が出土した。その中で、県内でも平野部では出土例が限られる縄文後期前葉、晩期の土器や打製石斧、また杭列遺構とともにまとまって出土した中期末の弥生土器は、縄文・弥生時代の生活の様子を考える上で極めて重要な資料である。しかし、これらは遺構が伴わず数量的に少ないため十分に比較検討することが困難である。従って、今後周辺の調査例とも併せ改めて検討していく必要があると思われる。

ここでは、建物遺構の時期を決定づける時期の須恵器・土師器・土師質土器を取り上げて若干の 検討を試みてみたい。また、文字資料として重要な墨書土器については、平石 充氏に検討をお願 いした。

#### (1) 遺構に伴う遺物

遺構に明らかに伴った遺物は、以下の4点がある。

- •1区 SB04-P5出土の須恵器壺(第14図)
- 7区 SD05出土の土師器高坏(第36図1)
- 7区 SK01出土の須恵器坏(第36図2)
- 7区 SK03出土の須恵器甕片(第36図3)

このうち、 $SB040P_5$ から出土した須恵器は、底部に高台が付き、丸味のある胴部をもつもので長頸壺になる可能性がある。壺には珍しく胴下半部の内外面にタタキ痕跡が認められる。ほかに第30図3に示す壺も同様のタタキ痕跡がある。このような例は松江市出雲国庁跡 (1) や同市丁の坪遺跡 (2) の長頸壺にみられ、7世紀末~8世紀前半の時期とされている。遺構外の遺物で7世紀末のものがあまりないことからSB04は8世紀前半頃の時期とみてよいものと思われる。

SK01から出土した須恵器の坏は、形態・技法的特徴から国庁第4形式  $^{(3)}$ 、即ち、8世紀代に位置づけてよいものと思われる。また、SD05から出土した土師器は古墳時代のもので、椀形の坏部をもつ高坏である。

#### (2) 遺構に伴わない遺物

#### a. 須恵器について

遺構は伴わない須恵器はおもに 1 区と 7 区から多く出土している。第16図 7 と第43図 8 はともに古墳時代のものとみられる。奈良時代以降の須恵器では、第16図 8 • 9 、第43図 9 • 11の蓋、第16図11~16、第43図13~17の坏皿類が柳浦編年第4 式 (4) と考えられ、8 世紀後葉~9 世紀後葉に位置づけられる。但し、第15図11の坏、第43図12の蓋はやや新しく位置づけられよう。

第15図20の壺は、宍道町小松古窯跡群<sup>(5)</sup>から類似の口縁部をもつ壺甕類がみられ奈良時代 後半から平安時代初めの時期とされている。

このように遺構外の須恵器については奈良時代後半~平安時代の時期に集中していることから礎石建物に何らかの関連性があるものと考えられる。

## b. 土師質土器について

土師質土器についてはその大半が礎石を覆っている層より上層から出土していること、その 出土量が多いことにより、建物の廃絶時期に関わる可能性があるものと思われる。

土師質土器の分類については1区出土のもののみ既に記しているが、もう一度まとめてみる。

・高台の付かないもの

皿形土器 Ⅰ類、Ⅱa類・b類・c類・d類、Ⅲ類、Ⅳ類

坏形土器 I類、Ⅱ類

椀形土器 I類、Ⅱ類、Ⅲ類

・脚付きのもの

皿形土器 a類、b類

坏形土器 a類、b類

・高台付きのもの

皿形土器 I類、Ⅱ類

坏形土器 I類、Ⅱa類·b類、Ⅲ類、Ⅳ類

椀形土器 I類、Ⅱ類

以上、I 類~IV類は口径の大きさより分類し、さらに a 類~ d 類は形態的特徴から細分化した。この中で、高台の付かないものの坏形土器と椀形土器は数量が少ない上に、口径・形態にバラェティーがあり、今後再検討する必要があろう。

これら土師質土器の年代的位置づけは、高台の付かないものの皿形土器の形態的特徴が類似し、脚付きが出現することから分類・編年が検討されている松江市石台遺跡 (6) や町内の西石橋古墳群中の西土壙墓 (7) に類例を求めることができよう。それによると、西土壙墓では12世紀~13世紀という時期が与えられているので、1区出土の土師質土器は平安時代末から鎌倉時代初期のものとみることができる。

#### 註

- (1) 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年
- (2) 松江市教育委員会『丁の坪遺跡・片山遺跡』1981年
- (3) (1)に同じ
- (4) 柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論』(『松江考古3号』松江考古学談話会1980年)
- (5) 宍道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』1983年
- (6) 島根県教育委員会『石台遺跡』1986年
- (7) 川原和人・桑原真治「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」(『古文化談叢第18集』九州文化研究会1987年)

## (3) 墨書土器について

釈文

□□倉

礎石建物SB02周辺出土の須恵器高台付坏の底部外面に墨書がみられた。須恵器の詳細については本文に譲るが、年代は8世紀後半~9世紀初頭と考えられる。



第59図 墨書土器

釈読できる「倉」は、『令集解』職員令主税寮条の「倉廩」の注釈に「謂穀倉日倉」とみえ、主として稲穀を収納するクラを指し、蔵・庫(器杖などを収容するクラ)と区別される。ただし、この区分は必ずしも厳密ではない(5)。さらに、建築としての倉そのもののみでなく、郡家の中の施設名・組織名としても「倉」の文字が使われることもある。すなわち『令集解』儀制令五行条古記には、郡の施設として郡院・厨院と並んで倉院を見ることができ、長元3(1030)年中成立の『上野国交替実録帳』にも正倉の施設名として正倉院がみえ、郡家の正倉施設総体が倉院・正倉院とも呼ばれることがうかがえる。このような施設名・組織名としての「倉」が使われる例には、造金堂所解案(『大日本古文書』16-281頁)の池辺御倉も挙げることができる。この池辺御倉の実態は明らかではないが(6)、葛木大夫(戸主)所・坤宮官などと併記されることから、何らかの組織名と考えられる。

「倉」に関わる墨書土器は、平城京をはじめとして全国で見られる(表20)。千葉県宮台遺跡では「倉」の墨書土器を出した住居跡から「大福戸」という吉祥句とも取れる文字の書かれた墨書土器も出土しており、「倉」一字の墨書土器には、集落遺跡で多く見られる一文字書きの墨書"の範疇に入る可能性のあるものもある。また平城宮第128次調査で出土した一連の「蔵」のみえる墨書土器は「蔵人所」に関わるものと見なしてよい(8)。これらの「倉」関連の墨書土器は、ただちに正倉を示すものでない。茨城県源氏平遺跡出土の「土垣倉」の墨書土器は、天平10年の「駿河国正税帳」に土倉がみえることから、建築としての倉の名称を表記した可能性がある(9)。また、この土器には漆紙文書が付着しており、この「土垣倉」と書かれた土器の最終的な使用を考えるうえで興味深い。

以上、「□□倉」墨書土器をめぐって検討を加えてきたが、その性格は断定できない。墨書に ついては正倉内の倉呼称、倉を含む施設・組織名の墨書を記載した可能性を想定しつつ、類例の 増加を待ってあらためて検討する必要があろう。

平石 充(島根県埋蔵文化財調査センター)

#### 註

- (1) 斐川町教育委員会 『出雲国出雲郡家正倉跡』 1993年
- 同朋社 1983年) (2) 松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」(『文化財論叢』
- (3) 池田満雄・宍道年弘「郡衙と正倉跡」(『風土記の考古学③』 同成社 1995年)、山中敏史「正倉の構造と 機能」(『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房 1994年)
- (4) 山中敏史前掲4、『復元天平諸国正税帳』(林陸朗・鈴木靖民編 現代思潮社 1985年) 注釈
- (5) 村尾次郎「正倉の構造と規格」(『律令財政史の研究』 吉川弘文館 1951年)
- (6) 渡邊晃宏「二条大路木簡の内容」(『平城京長屋王邸宅と木簡』 吉川弘文館 1991年)は、二条大路木簡に みえる池辺御蘭との関連の可能性を指摘する。
- (7) 平川 南「墨書土器とその字形」(『国立歴史民族博物館研究報告』35 1991年)、高島弘志「古代東国の村 落と文字」(『古代東国の民衆と社会』 名著出版 1994年)
- (8) 奈良時代の蔵人については直木孝次郎「奈良時代の蔵人」(『奈良時代史の諸問題』 塙書房 1968年)
- (9) 源氏平遺跡では倉庫跡は検出されていない (表20文献®)。

# 表20 「倉」関係墨書土器の出土遺跡

出土遺跡	釈文	種類	器形	墨書部位	出土遺構	年 代	備考	文献
島根県・後谷 V 遺跡	□□倉	須恵器	高台付坏	底部外面			出雲郡家正倉跡	
奈良県・平城宮 第32次調査	倉	土師器	坏	底部外面	井戸		平城宮	1)
奈良県・平城宮 第102次調査	倉	土師器	甕	体部外面	溝		平城宮	2
奈良県・平城宮 第128次調査	蔵	土師器	坏または皿	底部外面	溝		平城宮	2
奈良県・平城宮 第128次調査	蔵人	須恵器	坏	底部外面	土坑		平城宮	2
奈良県・平城宮 第128次調査	蔵人所	須恵器	坏	底部外面	土坑		平城宮 計2点	2
静岡県・舟久保 遺跡	倉	土師器	坏	体部外面 逆位	堅穴住居跡	奈良時代 後期		3
神奈川県・四宮 下郷遺跡	倉所カ	土師器	坏	底部外面	堅穴住居跡	10世紀前半	相模国府関連遺跡	4
千葉県・小座ふ ちき遺跡	大倉□□	土師器	坏	体部外面 横位	堅穴住居跡	9世紀中	内黒土器	5
千葉県・宮台遺 跡	倉	土師器	坏	底部外面	堅穴住居跡	8世紀後半		6
千葉県・山田水 呑遺跡	佐倉	土師器	坏	底部外面	遺構外		計 5 点	7
茨城県•源氏平 遺跡	土垣倉	土師器	高台付坏	底部外面	堅穴住居跡	9 世紀	漆紙付着	8
茨城県・鹿の子 C遺跡	倉カ	須恵器	高台付坏	底部外面	堅穴住居跡		国衙工房	9
岡山県・津寺遺 跡	倉	土師器	坏	底部外面	土器だまり	9 世紀		10

- ①『平城宮出土墨書土器集成 I 』 奈良国立文化財研究所 1983年 ②『平城宮出土墨書土器集成 II 』 奈良国立文化財研究所 1989年
- ③『駿豆考古』4号
- ④『四宮下郷』 平塚市教育委員会 1984年
- (助千葉県文化財センター 1984年 ⑤『東総用水』
- ⑥『千葉県大網白里町 宮台遺跡』 働山武郡市文化財センター 1989年
- ⑦『山田水呑遺跡』 山田遺跡調査会 1977年
- ⑧『茨城県史料 考古資料編 奈良•平安時代』 茨城県 1994年
- ⑨『茨城県関係古代金石文資料集成―墨書・箆書―』 茨城県立歴史館 1985年
- ⑩『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』 岡山県古代吉備文化財センター 1994年

#### 2. 遺構の検討

4次にわたる調査によって検出された遺構は総柱構造の掘立柱建物2棟と礎石建物3棟、側柱の みの礎石建物1棟、柵列1条、溝状遺構6条、土坑3穴であった。その他に建物の基礎石になると みられる礎石(B)と建物の柱になるとみられる柱穴(A)も検出された。このうち土層の堆積状 況と切り合いから新古関係を示すと下記のとおりである。

このことを踏まえて、各遺構を検討してみたい。

1区では掘立柱建物が廃止されたあと、ほぼ同じ位置で礎石建物に建て直されている。SB02は遺存状況が良く、 $5 \times 3$ 間の南北棟で床面積63.5㎡を測る大型の高床倉庫である。SB01も北側は道路下に延び全容は不明だが、おそらく南北は4間程度の倉ではないかとみられる。両倉とも主軸方向をN1°Eにむけ、東辺礎石列をそろえるなど計画的に配置されている。これらの時期は、礎石周辺から出土した須恵器から8世紀後半~9世紀代とみることができる。この時期の建物群をII期とする。

これらの建物群は I 期、II 期とも元々は稲籾を大量に貯蔵した高床倉庫ではあったが、何らかの事情で I 期建物群は奈良時代前半代に焼失、その後その場所で建て替えられた II 期建物群は奈良時代後期から平安時代前期に焼失し、その後は再建されなかったものと考えられる。本遺跡のように掘立柱建物から礎石建物への移行は正倉の高質化を意味し、稲の長期間保管や防虫害にも適しているといわれている (1)。全国的にも奈良時代後期以降に行われていたようで、福島県関和久遺跡(陸奥国白河郡衙) (2)、鳥取県大高野遺跡(伯耆国八橋郡衙) (3) などでも知られている。

建物が焼失したことについては、SB02の礎石に焼失した痕跡が認められることに裏付けられる。但し、掘立柱建物の柱根が焼けた痕跡は確認できなかったので、SB03、SB04が焼失したかどうかは、知ることはできない。なお、SB04の掘り方内にも炭化米、炭化物を含むことから、遺構では確認できていないが、SB04が建てられた以前にも火災にあって焼失した倉が建っていた可能性がある。このようにみてくると、1区では同じ場所で少なくとも3回(3時期)にわ

たって倉庫が建ち続けていたことが 想像される。

溝状遺構との関連についてみると、SD01はSB01の南側に並行して走るものの西と東は、ともにやや方向を変え幅広くなるところから、SB01の排水を兼ねたやや大きな

表21 建物遺構の時期

		建物名	時 期
I	期	SB03 • SB04	8世紀前半
		SB01 • SB02	8世紀後半~
П	期	SB05 • SB06	9世紀代
		(SB07)	J EACT C

溝とみられる。SD02はSB02の雨落ち溝と考えられる。ともに溝内から大量の炭化米が出土したことから、SB01は南側に、SB02は西側に建物が倒壊した可能性が強いといえよう。

次に、3区では側柱のみに礎石をもつ建物(SB05)が検出され、今のところ4以上×3間の南北棟と推定している。しかし、北側の梁行の礎石が1個も確認されていない(動いている可能性もある)ことから、桁行は5間以上になる可能性も十分にある。ただし、大阪市前期難波宮西方官衙倉庫群 $^{(4)}$ にみられるように $4\times3$ 間の建物が南北に建つ双び倉になる可能性も否定できない。

SB05の時期は主軸方向がN4°Wを測り1区でみられた建物方向とほぼ同じであることや、 出土遺物も8世紀後半から9世紀代であることから、SB01やSB02と同時期の奈良時代後期から平安時代前期とみておきたい。

建物の構造については、おそらく列石の上に根太を置き、その上に板材を貼った低い床張り構造の建物ではなかったかと想像されるが、類例を待って改めて検討してみたい。いずれにしても礎石周辺から炭化米が大量に出土することから、稲籾を貯蔵した倉庫が焼失したもの考えられる。建物の西側で検出されたSD04は雨落ち溝と考えられる。

一方、5 区と7 区の両方で礎石が検出された8 B 0 6 は、 $4 \times 3$  間の唯一東西棟であることがわかった。1 区と3 区で検出された礎石建物はいずれも南北棟であるのに対して、8 B 0 6 は東西に主軸をとる建物であった。建物の規模、主軸方向からみると、8 B 0 1 、8 B 0 2 と同時期とみてよいように思われる。また、7 区で検出された礎石(B)は8 B 0 7 の南西隅の礎石とみられ、8 B 0 6 同様東西棟と思われるが可能性にとどめておく。このように建物の主軸方向が変わって検出された場合、千葉県日秀西遺跡(下総国相馬郡衙) $^{(5)}$  や神奈川県長者原遺跡(武蔵国都筑郡衙) $^{(6)}$  などの例からみて、8 B 0 6 は 1 期建物群の南西隅付近の建物ということがいえそうである。

7区では溝状遺構SD05が検出された。浅い溝で、小礫まじりの埋土中から古墳時代の土師器 高坏片が出土した。土層断面、検出面からみると礎石建物の時期には、溝はすでに存在していたと 思われるが、残念ながら積極的に同時期の遺構としては捉えることは難しい。

8区でも東西方向にSD06とSD07が検出され、遺物は出土していないがSD05と同じような小礫まじりの埋土で類似した性格の溝であると思われる。SD06とSD07との空間距離は7.5mを測り、SD05を東方に延長すると、ちょうど両溝の間を通ることになる。このように小規模な溝については、松江市出雲国庁跡  $^{(7)}$  や同市下黒田遺跡  $^{(8)}$  からも確認され、区画用小溝とよばれている。大高野遺跡で確認されている区画溝は2重と3重の部分があるが、この場合は溝幅や

表22 建物遺構計測表

調査区	建物	規 格	建物 長軸 方向		桁 行	行 梁 行		主軸	床面積	備考
	番号	(間数)		全長(m) (尺)	柱間(cm) (尺)	全長(m) (尺)	柱間 (cm) (尺)	方位	(m²)	7HI 45
1	SB01	2以上×3	〔南北〕		193 • (195) (6.5) (65)	6.24 (21)	208 • 208 • 208 (7) (7) (7)	N-1°-E		礎石、総柱、炭化米
1	SB02	5以上×3	南北	11.90 (40)	238 • 238 • 238 • 238 • 238 (8) (8) (8) (8) (8)	5.34 (18)	178 • 178 • 178 (6) (6) (6)	N-1°-E	63.5	礎石、総柱、炭化米
1	SB03	4 × 3	南北	7.72 (26)	193 • 193 • 193 • 193 (6.5) (6.5) (6.5) (6.5)	5.79 (19.5)	193 • 193 • 193 (6.5) (6.5) (6.5)	N-1.5°-E	44.7	掘立、総柱
1	SB04	3以上×3	〔南北〕		193 • 193 • 193 (6.5) (6.5) (6.5)	5.79 (19.5)	193 • 193 • 193 (6.5) (6.5) (6.5)	?		掘立、総柱、掘方内に炭化米
3	SB05	4以上×3	南北	11.88 (40)	297 • 297 • 297 • 297 • (297) (10) (10) (10) (10) (10)	5.94 (20)	208 • 178 • 208 (7) (6) (7)	N-4°-W	(70.6)	礎石、桁間に3列の石を配列 炭化米
5 • 7	SB06	4 × 3	東西	8.32 (28)	208 • 208 • 208 • 208 (7) (7) (7) (7)	5.79 (19.5)	193 • 193 • 193 (6.5) (6.5) (6.5)	N-45°-E	48.2	礎石、総柱、炭化米
7	SB07	不明								礎石1個のみ

\* 〔 〕は推定、1尺は29.7cmとした。

深さがもっと大規模であるため、本遺跡とは様相を異にする。

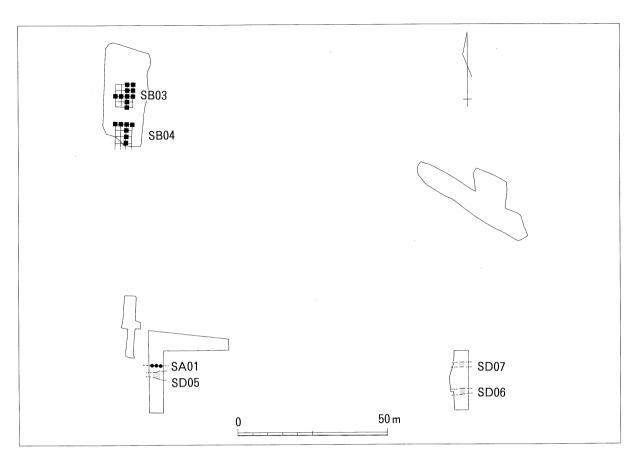
SD05の北側で検出されたSA01は小溝の内側を走る柵列ではないかと思われる。出雲国庁跡では、宮の後地区でSD010の北側に1.5mの間隔でSA003が検出されているように本遺跡の場合も柵列と小溝 $1\sim2$ 条で、倉庫群の南側を区画していたと考えられないだろうか。

## 3. 後谷 V 遺跡の性格と今後の課題

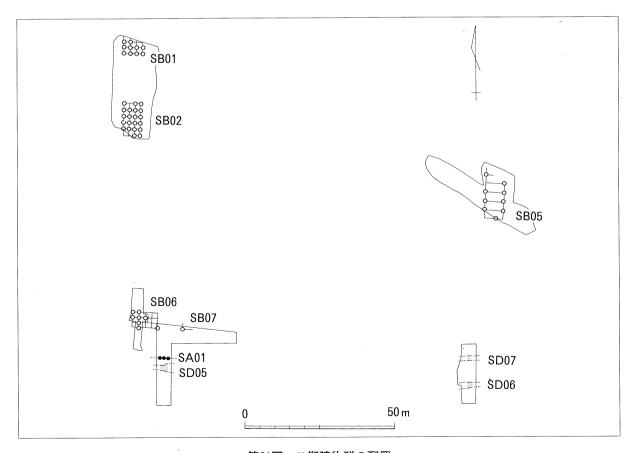
I 期とした建物群はSB03、SB04で総柱掘立柱建物の高床倉庫であった。また、II 期とした建物群はSB01、SB02、SB06が総柱礎石建物の高床倉庫、SB05が側柱のみの礎石建物(低床倉庫)であった。さらにSD01、SD02、SD04が建物に伴う溝状遺構、SD05、SD06、SD07が区画用小溝(可能性にとどめておく)として確認することができた。

表22に示すように建物のようすがよくわかる建物の規模と床面積をみると、SB02が5×3間、SB06が4×3間、SB05が4以上×3間の規模になり、床面積はSB03が44.7㎡、SB02が63.5㎡、SB06が48.2㎡を測る。ところで松村恵司氏 (9) は官衙遺跡の正倉の規模について4×3間の倉が正倉の中核をなし、集落遺跡の倉とは隔絶した規模をもつとされ、また、山中敏史氏 (10) は正倉の平面規模について集落の倉は25㎡未満の小型であるのに対して、正倉には25~60㎡の中型、60~100㎡の大型の倉が多いとされている。先に示した本遺跡の場合は正にこれらの基準によく符合しており、郡家(郡衙)の正倉とするにふさわしい規模であるといえよう。

建物の配置についてみると、まず I 期において S B O 3 と S B O 4 が4.7mの距離をおいて南北に並置に配され、II 期においても S B O 1 と S B O 2 が15mの距離をおいてやはり南北に並置に配され、しかも各期において東辺礎石筋をそろえるという、極めて計画的に直列配置が踏襲されていたことがわかる。このことは、『上野国交替実録帳』(II) の新田郡条において「正倉東第二土倉壱宇中第一土倉壱宇 東第一土倉壱宇 北第二土倉壱宇 西第一土倉壱宇 西第二土倉壱宇 後略」とみられる記述からも裏付けられるように倉の管理が長期間いきとどき、維持管理が厳格であった



第60図 | 期建物群の配置



第61図 川期建物群の配置

ことの現われであろう。

建物群の全体の範囲についてはⅡ期建物群がよくわかる(第61図)。東西の範囲はSB01とS B02の建物の中心距離(南北ライン)からSB05の建物の中心距離(南北ライン)までは、120 m(40.4尺)を測り、東西に何らかの区画施設が伴っていたとすれば、西側の地形を考慮に入れる と少し大胆な想定ではあるが150m(50.5尺)近くになるのではないかと思われる。一方、南北の 範囲はSB01の北側道路下からSB06の南側の小溝までは120m近くの範囲が想定される。『実 録帳』の那波郡条で「正倉院」という言葉が出てくるように正倉は一院を形成していたと考えられ る。八橋郡衙の正倉院といわれる大高野遺跡が東西120m、南北105m、山代郷の正倉といわれる松 江市山代郷正倉跡(12)が一町四方の範囲が推定されていることを考慮すると、本遺跡の場合は東西1 50m、南北120mの範囲内に倉、屋、管理棟などの諸施設が建てられていたものと考えることがで きるであろう。但し、実際には明確になっていない区画施設を確認することが今後の課題であろう。 ところで、正倉と収納物について少し触れてみる。まず1区で検出されたような高床倉庫はそれ 自体が米櫃の役割があり、穀稲を大量にバラ積みの状態で収納されたものと考えられている(13)。 山代郷正倉跡や福島県郡山台遺跡(陸奥国安達郡衙)(14) では、床底部における密積を防ぐための底 敷穎稲を使用したと考えられる長粒稲が検出されているが、本遺跡ではそのところを確認するには 至らなかった。次に3区のSB05については長期間貯蔵のきく高床倉庫に対して、低床であるこ とから、貯蔵機能は高床より劣る反面、建築は簡易で、作業し易い施設(44)であることがいえよう。 その機能、性格についてはたとえば、脱穀作業後の穀物を仕分けのために一時的に集められ保管さ れた施設(15)、農民に貸し与えるための穎稲(出挙稲)を収納した屋(16)、本倉から出された物品が 直接受給者に渡る中間において一時収納される場所(17)などが考えられるが何より遺構の裏付けが 必要であるため類例の増加を待って今後の検討課題としたい。

以上述べてきたように、本遺跡は各地の郡家の正倉に匹敵する規模の倉庫群であることが明らかとなった。『出雲国風土記』の出雲郡条に「出雲郷即属郡家朔園」(18) との記述があるように本遺跡が所在する出雲郷内に出雲郡家が置かれていたのである。本遺跡の倉庫群は正にこの郡家の一施設となる正倉にあたるものと考えたい。そして、この近辺に郡家の政治的中心となる郡庁や館、厨家などの諸施設も存在するものと推測される。

文献記述にあらわれない律令出雲の実態にどこまで迫れるのか、今後の計画的・継続的な調査で明らかになることを期待したい。

#### 註

- (1) 山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」(『日本古代の都城と国家』塙書房 1984年、『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房 1994年)、富山 博「正倉建築の構造と変遷」(『日本建築学会論文報告集』第216号 日本建築学会 1974年)
- (2) 山中敏史・佐藤興治『古代日本を発掘する-5 古代の役所』岩波書店 1985年
- (3) 大賀靖浩「大高野遺跡」(第21回山陰考古学研究集会発表資料 島根考古学会 1993年)
- (4) 山中敏史「古代の倉庫群の特徴と性格」(『クラと古代王権』ミネルヴァ書房 1991年)

- (6) (2)に同じ
- (7) 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概要』1970年
- (8) 松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』1987年
- (9) 松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」(『文化財論叢』同朋舎 1983年)
- (10) (1)に同じ
- (11) 「上野国交替実録帳」(『平安遺文』 4609号 1761年)
- (12) 島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』1981年
- (は) 富山 博「律令国家における正倉建築の機能」(『日本建築論文報告集』第214号 日本建築学会 1973年)
- (14) (1)に同じ
- (15) 山中敏史「古代の役所のしくみと役割」(『うやつべ』第3号 斐川歴史を語る会 1994年)
- (16) 池田満雄・宍道年弘「郡衙と正倉跡」(『風土記の考古学③』 同成社 1995年)
- (17) (9)に同じ
- (18) 秋本吉郎校注『風土記』岩波書店 1997年

# 図版